

伊能忠敬

研究

史料と伊能図

二〇二一年 第九十四号

史料と伊能図「伊能忠敬研究」

二〇二二年 第九十四号

伊能忠敬研究会

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.94 2021

伊能忠敬研究会



国立国会図書館蔵 伊能大図 第99図(相模・伊豆・駿河)

表紙の図は相模国西南部の伊能大図である。

酒匂川の西に位置する小田原は、西国から江戸へ向かう入口に位置し、戦国時代末期には関東一円を支配した北条氏の拠点となっていた。

交通の要衝であったこともあり、中世以来、政争の舞台となった地でもある。戦国時代、北条氏がここに居城を構えてからも、北方から上杉、武田等の度重なる攻撃を受け、最後は秀吉による小田原攻めで難攻不落思われていた總構えの小田原城が開城したのは、天正18年(1590)である。

北条氏滅亡後は、徳川の支配下に置かれ、徳川の下で小田原攻めに功のあった大久保忠世が城主となったが、慶長19年(1614)に子の忠隣が改易され、一時期、城主不在の番城や後に越後高田に移った稲葉氏が城主となった時期があったが、貞享3年(1686)に大久保氏の子孫である忠朝が再び小田原城主となり、以後は幕末まで大久保氏の居城となっていた。

伊能隊が測量した当時の城の規模は、内郭だけでも東西十町、南北五町とされ、伊能図に描かれている城の中でも規模の大きい城といえよう。

江戸から東海道を西に向かうと、小田原を起点に道が四方に分岐する。西に向かうのが東海道で、北に向かう道は御殿場を通り、甲斐に向かう。南に向かう道は伊豆半島東岸を海岸沿いに南下する。

伊能隊が第2次、第4次の測量後、西国の測量に向かう途中、小田原を通過するのは、第5次、第6次、第8次、第9次と、東山道経由で西に向かい甲州街道を帰路にした第7次測量以外は、全て小田原に宿泊している。

第2次測量では、往路で相模、伊豆の海岸沿いを測量し、伊豆半島を一周して帰路で東海道を測量し

て江戸に戻っている。その後、第4、5、6次測量では、西国測量に向かう往復の途中、小田原を通過している。第8次測量では、東海道の平塚、藤沢から北に向かい、大山を経由して関本で二手に別れ、支隊が関本から小田原まで測量して測線を東海道に繋いでいる。忠敬等本隊は、関本から西に向かい、矢倉沢、御殿場を経由して甲府に向かい、富士川を南下して東海道に繋いでいる。第9次測量では、伊豆の離島を測量した帰路に御殿場から箱根を経由して測線を東海道に繋いでいる。

(表紙題字は伊能忠敬の筆跡)

菱山剛秀



伊能忠敬の測量ルート

目次 94号

表紙解説

国立国会図書館蔵

伊能大図第99図部分(小田原周辺) 菱山剛秀

研究と話題

●伊能忠敬測量の日本地図を読む

―二〇〇年前の日本の姿― 星埜 由尚

●江戸府内第一次測量の記録(四) 玉造 功

―文化十二年二月八日の『日記』― 福田 仁

●土佐の伊能測量4 四国縦断編 柏木 隆雄

●江戸実測図(東京市版) 考察 玉造 功

●国宝紹介(器具類番号50) 携帯用磁石 星埜 由尚

●伊能大図の復元について

資料

●「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」 渡辺 一郎・井上 辰男

連載第二十八回 30

忠敬談話室

●「伊能図完成二〇〇年記念の集い」開催 事務局

●「伊能図に描かれた現存十二天守」 河崎 倫代・室山 孝

●令和の伊能大図制作 横溝 高一

●明治期の模写図における山の表現 菱山 剛秀

●銅像建立と広報の必要性 中塚 徹朗

●日本地図の第一歩は吉岡から 伊能忠敬 77

会員だより・新入会員紹介・事務局からのお知らせ

各地のニュース

●伊能図完成二〇〇年記念 馬場 良平

●「伊能ウオーク」開催 玉造 功

●伊能忠敬記念館HPで初のオリジナル動画を公開!

●新たに「伊能小図」副本確認 事務局

●渡辺 一郎著『伊能忠敬の日本地図』 事務局

●新入会員自己紹介 事務局

●事務局からのお知らせ

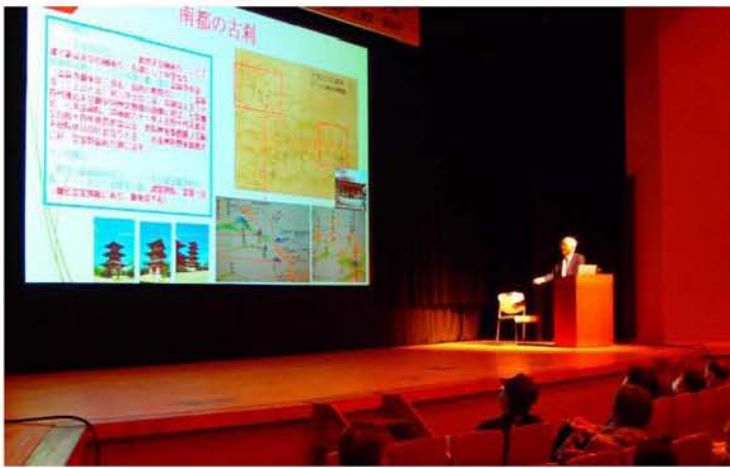
「伊能図完成二〇〇年記念の集い*」記念講演 伊能忠敬測量の日本地図を読む

—二〇〇年前の日本の姿—

星 楚 由 尚

はじめに

今から二〇〇年前に幕府に上呈された日本初の実測図である伊能図は、その形が現代の地図とあまり変わらないので有名です。その地図を通して知られる二百年前の日本の姿はどのようなものか。今日は伊能図について、技術的な話ではなく地図を見ることを主眼にして紹介したいと思います。



記念講演「伊能測量の日本地図を読む—200 年前の日本の姿—」

2021. 4. 18 江東区文化センター ホール

忠敬の前半生

これは国宝となっている伊能忠敬の肖像画です。測量隊員の青木勝次郎という人が描いたと言われています。通常、国宝の絵画といえば狩野探幽とか著名な画家の作品ですが、これは無名人が描いた国宝として唯一のものであります。こちらは佐原の伊能忠敬旧宅です。忠敬は前半生は商人として商売をしていました。九十九里の網元で小関家という名主を代々務めた家に生まれました。小関家はもうありませんが、今でも「小関」という地名が残っていて、上層の農漁民層の出身でした。十七歳で伊能家に婿入りしました。近郷近在で「デキる息子」という評判があったのでしよう。佐原の豪商であった伊能家の主人として迎えられました。忠敬は日本最初の科学的実測地図製作者となりましたが、後年、娘にあてた手紙の中で「本当は学問で身を立てたかった」と言っています。佐原で昼間は商売、夜は学問という生活を送り、隠居後に江戸に出て高橋至時に師事しました。至時は天才的な天文学者で、勉強しすぎて死んだ人です。当時、緯度一度の距離が天文学上の課題となっていました。それには子午線一度の長さを知ればよいというので忠敬は自宅から浅草の司天台までの距離を測って計算し、至時に報告しましたが、「それでは距離が短かすぎる」ということで、蝦夷地に行くことになりました。地球の大きさを知りたいということがきっかけで十七年にも及ぶ全国測量となったのです。その結果、忠敬は日本全国を巡り、当時最大の旅行家にもなりました。

忠敬が遺したもの

忠敬が遺した主なものは『伊能図』と総称される地図類、詳細な『測量日記』、『山島方位記』な

どのデータ集で、それらは現在国宝になっています。忠敬は実に几帳面に記録を残しました。先祖の先例から、記録の重要性をよく知っていたためだといわれます。忠敬の偉いところは商売に励んで家産を増やし、それを公的なことに使ったという点です。もちろん幕府のほうも相当費用を使っていたのですが、忠敬は個人財産で公共の測量事業を行いたいと願って許され、十次にわたる全国測量となりました。



伊能測量の時系列

1800	1801	1802	1803	1804	1805	1806	1807
①	②	③	④		⑤		
↔	↔	↔	↔		↔		

1808	1809	1810	1811	1812	1813	1814	1815	1816
⑥		⑦		⑧			⑨⑩	
↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔

忠敬の生きた時代（一七四五—一八一八）

忠敬の時代は天災や飢饉が多く起こった時期でした。忠敬は名主として佐原の村政に携わっていましたが、飢饉の際には救恤米を出して難民を援助し、一人の飢餓者も出ませんでした。村民はもちろん領主からの信頼も厚く、忠敬が隠居を申し出て許可されなかったという話が伝わっています。

この時期は洋書の禁輸緩和により西洋の学問が中国経由ではなく西欧から直接入ってくるようになりました。

西洋天文学を含め洋学が興隆し、また町人文化の発展に伴って地図の刊行が盛んになり、長久保赤水の「赤水図」が出版されるなどして一般庶民も地図を購入できるようになりました。

一方、当時の社会背景として北方問題がありました。ロシアの南下を警戒した幕府は一七九九（寛政十一）年、東蝦夷地を松前藩から上知して幕府直轄地としました。伊能測量はその翌年に蝦夷地から開始したので、ちょうどこの時期にあたります。やがて幕府は一八〇七（文化四）年に蝦夷地全体を直轄地とし、一八二一（文政四）年になって松前藩に返却しました。伊能図が完成した年です。

伊能図を見る

伊能図を近くで見ると、たくさんの針穴があります。これは地図を写す際に針を使って写した跡です。朱色の線は測量隊の測線で、これが重要です。山は絵画的に描かれ、近代の地図とは違っています。測量方法は導線法と交会法と言うやり方で、まだ三角測量ではありません。忠敬は実測を重ね、測量しなかったところは「不測量」として空白のままにしています。しかし蝦夷地は測量隊が行かなかつたところも書いてある。これは忠敬の弟子だった間宮林蔵が測量して提出したデータを使って書いたと言われています。しかし林蔵はカラフトなど酷寒の地での活動により凍傷で手指を失っていたと云われており、林蔵の著書は、村上貞助などが助力しています。ですから、蝦夷地のデータが本当に間宮の測量によるものなのかどうか、さらに検討の余地があります。

大図・中図・小図

伊能図には大図・中図・小図の種類があり、各

図の現存状況、所蔵先等は次のようになっています。

【大図】

大日本沿海輿地全図（正本・控）全て焼失
国会大図（模写）国立国会図書館

アメリカ大図（模写）米国議会図書館

歴博大図（模写）国立歴史民俗博物館

海保大図（模写）海上保安庁海洋情報部

毛利大図（副本）山口県文書館

松浦大図（副本）松浦史料博物館

【中図】

東博中図（副本）国立博物館（大河内松平家旧蔵）

フランス中図（副本）NUSHA（株）（ペイレ氏旧蔵）

【小図】

東博小図（副本）東京国立博物館

イギリス小図（写本）英国ナショナル・アーカイブズ

【大図・中図・小図】

九州沿海図（測量途次の図で正本）東京国立博物館

二〇〇年前の蝦夷地

では、第一次測量の際の測量日記の記録と伊能図から、当時の蝦夷地の様子を見てみましょう。これは礼文華山道です。大変な難所でした。忠敬らは長万部で「オムシャ」という、アイヌの長に幕府役人が盃を与える儀式を見学しています。

平沢屏山というアイヌ画で知られる絵師が函館のオムシャの様子を描いた図があります。伊能隊が到達した最東端はニシベツ（本別海）ですが、そこに行くまでにいろいろな人たちに行き遭っています。



第一次測量成果(1800)
松前距蝦夷行程測量分図
(国立公文書館)

襟裳岬



最終成果(1821)

ます。上知していた時期なので幕府役人が現地に
沢山いて行ったり来たりしていました。蝦夷地は
未開で人跡未踏の地という印象がありますが、実
際はそうではありませんでした。ニシベツには伊
能測量隊を記念して「最東端到達記念柱」が建て
られています。地図ではニシベツ川を渡ったところ
に☆の印があり、ここに止宿して天測したよう
です。伊能図では厚岸に国泰寺というお寺が書い
てありますが、忠敬が行った時はこの寺はまだあ
りませんでした。後世の間宮か誰かが行った時の



データによって書いたのでしょうか。野付半島も忠
敬の測量ではありません。ノツケには「キラク」
という伝説の町があり、クナシリ島に渡る船や人
を管理する通行屋があつて賑わっていたと言われ
ます。近年、発掘したところ当時の建物跡や日常
の食器、墓などの遺跡が出てきました。

天売島、焼尻島は幕末に焼尻島に漂着した米国人
がいて、捕らえられ長崎に送られ、初めての英
語の先生になったと言われています。
国土の変遷を見る
伊能図には二〇〇年前の日本の姿が記録されて
います。そのうちから興味ある事例をいくつか見
て行きましょう。これは伊能図の横浜村の部分で

児島湾の干拓



大図145号(模写本アメリカ議会図書館)

すが、往時は砂洲が横に長く延びており、まさに
「横浜」でした。金沢八景は入江が奥に入り込ん
だ風光明媚な海岸で岬には一覽亭がありました。
幕末にベアトが金沢八景を写した写真があります。
今は埋立地のところも伊能図には当時の姿が残っ
ています。
岡山県の児島湾は江戸時代から大規模な埋め立
てが行われていた所です。測線が内湾をせき止め
た土手の上を通っていて、ここを歩いて測量した
ことがわかります。七番村、九番村など番号の村
や新田と名の付く村が多く、当時から広範囲に干
拓が進んでいました。瀬戸内の三田尻、今の防府

瀬戸内海の塩田（山口県防府市）

市ですが、塩田が黄色く描かれています。塩田の中に家を書いてあるのは汐汲みの小屋です。



大図(副本・山口県文書館)

御両国測量絵図（伊能大図）三番 山口県文書館蔵

秋田の象潟は松島に似た景勝地でしたが文化元（二八〇四）年の地震で隆起して陸地になりました。伊能図には地震以前の象潟の姿と噴煙を上げている鳥海山が描かれています。そのほか火山では有珠山、浅間山、阿蘇山なども写實的に表現されています。雲仙火山は寛政四（一七九二）年に噴火して「島原大変肥後迷惑」という大災害を起こしました。島原の眉山が崩壊して有明海に流入、大津波が対岸の熊本に波及したのです。伊能図はその際に形成された九十九島のほぼすべてを測量しています。薩摩半島の南端、開聞岳を望む

番所鼻自然公園に「伊能忠敬先生絶賛の地」の石碑があります。「蓋し天下の絶景なり」と伊能忠敬が絶賛したという言い伝えにより建てられました。江戸も伊能図と現代の地図を比較すると、埋立地の面積の増え方が分かります。東京の面積がどれだけ増えたか。現在江東区を通っている湾岸道路は伊能図では全くの海の中でした。二〇〇年間に日本の海岸線は大きく変化しました。

三陸海岸の測量

第二次測量では海上引縄を行いました。岩手県の三陸海岸の唐丹―大石浜は船で縄を引いて測りました。その様子を再現したテレビ番組がありました。「縄が重くて大変だった」そうです。大石浜には「伊能忠敬海上引縄之地」記念碑が建っています。唐丹には葛西昌丕という地元の学者が伊能忠敬の測量に感激して建てた「陸奥州気仙郡唐丹村測量之碑」があります。これは文化十一（一八一四）年、忠敬の存命中のことで、伊能測量の記念碑として江戸時代に建てられた唯一のもので、天候との闘い

三陸海岸から北上し、青森県三沢市付近に來たとき、浜三沢と平沼村間で大吹雪に遭いました。

「ホワイトアウト」状態で駕籠の戸障子が吹き飛び、「駕籠の中にも雪が吹き込んで外と同じ」になり、やつこのことで平沼村に着いた、とあります。

地元の対応の良しあし

地元の対応も様々でした。加賀藩では伊能隊は冷遇されました。上からのお達しで、村役人に村高や人口などを聞いても拒絶され、村名くらいしか教えてもらえなかったと測量日記に書いてあります。海岸から金沢城下まで、間縄を使わず量程車で測りました。地図上ではこの区間は測線が一

直線に引かれ、途中の地名ありません。もう一件、加賀藩のあとの糸魚川藩では「糸魚川事件」が起きました。町役人に姫川は大河で水量が多くて危険だから上流を渡れといわれましたが、実際は小河だったので町役人たちが叱ったところ、それを根にもって江戸の藩主へ訴えられました。藩主から勘定所、天文方へと伝えられ、忠敬は六日町で至時から公式の戒告文を受け取るという仕儀となりました。

北陸諸藩で測量隊は軽く扱われた一方、多くの藩では測量隊を厚遇しました。鳥羽藩では隊員を饗応し、人員や資材を提供するなど、丁寧な対応でした。志摩市の海岸には「伊能忠敬富士山測量本土最南端の地」碑が建っています。各藩は老中からの通達を受けて対応しましたが、隣藩に問い合わせる横並びでやっています。各藩とも贈り物を多数贈っていて、土佐藩では鯉節百本といった風でした。旅行中にたくさんもらっても困るので、すぐ売り払うのですが、持ってきた人に頼んで売ってもらったりしています。現代の我々には何とも理解しがたいことです。

また、第八次測量で五島の福江島で副隊長の坂部貞兵衛がチフスで客死した際、五島藩では三日間歌舞音曲を停止して弔意を示し、家老の墓の隣に埋葬しました。右腕を失った忠敬の落胆は大変なものでしたが、測量日記は「坂部貞兵衛病氣養生不相叶、於福江町命終」と極めて簡潔に記しており、当時の死生観を見る思いがします。

屋久島 種子島測量

屋久島・種子島の測量は第七次では風が悪く、渡海が困難なので忠敬らは断念しようとした。しかし幕府が測量を命じたため、第八次測量で

山々の表現



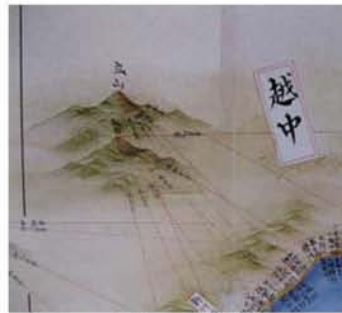
筑波山(中図副本東京国立博物館蔵)



日光三山(男体山・白根山・女峰山)
(大図模写本国立国会図書館蔵)



妙義山
(大図模写本国立国会図書館蔵)



立山・劔岳
(中図副本東京国立博物館蔵)



『越中四郡村々相分図』石黒信由 (1825)
(一財) 高樹会蔵・射水市新湊博物館保管)

鹿兒島から大船八隻の大船団を組んで出航しました。外様の雄藩である薩摩藩の地理情報幕府はこの機会に知りたかったのではないかと推測しています。

銚子で富士山を測る

銚子では富士山の方位を測るために長期逗留し、九日目にやっと天候に恵まれて測定できました。測量日記にはその時の喜びが記されています。測定地の犬若岬には記念碑が建っています。

奇遇なる再会

第二次測量で牡鹿半島の分浜に止宿した際、主人の秋山惣兵衛は偶然にも二十三年前の松島旅行で道連れになった人物でした。二人は再会を喜び、惣兵衛は別れを惜しんで三日間測量に付き添いました。江戸時代の人情の厚さを見る思いです。

奥北に稀なる所

下北半島の田名部(むつ市)では学問や文芸を嗜む地元の人々の歓待を受けました。『測量日記』に「此の所は奥北に稀なる所にて寺院、医師、其の外表立し人々学文を好み、詩歌もなる人あり」と意外な

驚きをもって地元との交流を記しています。

鬼死骸の伝説

岩手の一ノ関に「鬼死骸」という所があります。昔、坂上田村麻呂が鬼を退治して胴体を埋めた所が鬼死骸、首が飛んで落ちた所が鬼首だそうです。対馬から朝鮮を測る

対馬では高台にある遠見番所から朝鮮半島、すなわち大陸の山を測っています。当時、対馬藩は幕府から朝鮮国との外交を任されていました。

神社仏閣への関心

大和路測量では南都の古刹を訪ね回り、わざわざ當麻寺まで行って測量しています。富士山裾野の伊能図にも多くの浅間神社や富士五山のお寺が書いてあって、伊能図は見るほどに興味があります。

(ほしの・よしひさ 特別顧問 元国土地理院長)

※本稿は、講演内容を事務局(前田)が記録したもので、使用した図版は、講演に使用したスライドの一部である。

注

*「伊能図完成二〇〇年記念の集い」記念講演会

日時 令和3年4月18日(日) 13:30~15:00

場所 東京都江東区東陽4-11-3

江東区文化センター ホール

主催 伊能図完成二〇〇年記念事業推進協議会

(伊能忠敬研究会は、協議会の構成団体)

—文化十二年二月八日の『日記』—

玉造功

ぐものであつた。

でを測量し④板印に繫いだ。

治以降に天領とも呼ばれる) や私領 (大名領・旗

二月八日 晴天 正六の節出立

武勅豐島郡

金輪寺
芝雲岩四福寺
法中寺隆寺

三給王子村

王子川
又滝野川

二月八日 晴天

正六ツ前出立 武州豊島郡

金輪寺領
芝愛宕円福寺領
浅草幸隆寺領

三給王子村

王子川飛鳥橋
又滝野川という

右欄工文化六己年八月

日光御成街道
江戸方に向う

測量 滝野川 飛鳥橋

五渡長

中央
界
右側斗
馬同忠立

右欄干（文化六巳年八月二十八日残し）日光御成街道江戸の方へ向て

測量 滝野川 飛鳥橋

五渡
間長
中央
界

右側ばかり
野間忠五郎知行所

滝野川村 右側斗

澤川雲光院
山川守無衛知行所
大丹夏治石工門支那的

野間忠孝新所
本所法恩寺
平塚社
領領領

六給西ヶ原村

西原村

滝野川村 右側ばかり

深川雲光院領
（山川宇兵衛知行所
大貫治右衛門支配所

野間忠五郎知行所
(本所法恩寺領)

六給 西ヶ原村

左右共
西ヶ原村

字
新茶屋一里塚

李鄧追々
一ト云

左可斗引道松生
右板橋道追分

左側斗
上中里村

字一軒茶屋一里塚

（本郷追分より）
（左一町ばかり引込松生山という又御殿山という）
（右板橋道追分）

（左側ばかり
上中里村地先



図1 『大日本沿海輿地全図』第90図に加筆

本領)、寺社領が錯綜する農村地域であり、中山道や日光御成街道沿いには町場も見られる。

幕府編纂の地誌の面から見ても、駒込や巣鴨までは『町方書上』を提出しており『御府内備考』に記載されるが、王子、西ヶ原、板橋は御府内を除いて編纂された『新編武蔵風土記稿』に記載されており、江戸の境界領域であった。

・幸隆寺：幸龍寺の誤記。『淺草寺書上 甲七』によれば、將軍家光が幸龍寺に豊島郡王子郷の五十石の朱印地を寄進したという。

・三給・六給：一つの村が複数の領主によって支配されることを相給という。王子村は王子権現社と王子稲荷社を管理する別当寺の金輪寺、芝愛宕権現社の別当寺の円福寺、浅草の幸龍寺の三寺の寺領であつたので三給という。西ヶ原村は六給であるが、図1や図6では「御料所」、「日記」ではより具体的に代官の大貫治右衛門支配所と記している。

・王子村：王子村のあたりは、江戸北郊の行楽地として名高かった。安藤優一郎(2005)によると、「春は王子稲荷の初午、飛鳥山の花見、夏は王子稲荷の祭礼、石神井川沿岸の滝浴み、王子の蛸狩り、秋は石神井川沿岸の滝野川地域の紅葉狩り、虫聞き、冬は王子・飛鳥山の雪見」で江戸の人気行楽地になったという。

十方庵敬順(1763～1832)は『遊歴雑記』に文化・文政期の江戸市中の名所旧跡、風習などを詳細に書き残した。王子村については「あふぎや(図3の扇屋)、海老屋の二軒茶屋は、軒をならべて高宅を巧みに作り、料理の美味に庖丁の手際なる。器物には善し美し、客の需めに応ずるは辺鄙には賞すべきか。片鄙ながら、王子稲荷の門前より飛鳥山の麓まで、その間凡四町余、酒樓茶屋のおの軒を同ふし、繁華の土地にも劣らぬ」と記している。この扇屋に宿泊したのが忠敬の第七次測量隊である。

文化六巳年八月二十八日：第七次(九州第一次)測量の出発の集合地点は王子村の茶屋扇子屋(扇屋)であった。ところが荒川大洪水のため



図2 江戸府内図(北)に測量経路などを加筆

・王子川飛鳥橋：『新編武蔵風土記稿』には「長五間の板橋にて飛鳥山下の用水堀に架す」とある。『江戸名所図会』で確認すると図4の右下に描かれている橋がこの日の測量出発地点の飛鳥橋である。

・一里塚：この一里塚は現存し、大正十一年には「西ヶ原一里塚」として国の史跡に指定された。この一里塚の保存に尽力したのが、渋沢栄一のことである。

・装束榎：図2には測線とは無関係な木が王子村の北に描かれ「装束榎」と記されている。こ



図3 広重 江戸高名会亭尽 王子扇屋

め川留めとなつて扇子屋弥右衛門に泊まることになった。忠敬は「此茶屋家作も広く庭に流水を用、風景好」と評している。

図5 広重 名所江戸百景から
王子装束糸の木大晦日の狐火

れは官撰地誌の『新編武蔵風土記稿』にも、「土人の説に毎年十二月晦日の夜、此榎に狐聚りて衣装改むるゆへ斯唱ふと云ふ。」と記載されるほど有名であった。

毎年大晦日の夜、関八州各地の稲荷社の使いの狐たちが集まり、この榎の下で衣装を改めて王子稲荷神社に参詣したといわれ、狐火の名所として見物客が集まった。広重の名所江戸百景の図5も名高い。



図4 広重 東都名所 飛鳥山全図から

—8—



図8 江戸名所図会 駒込富士浅間社 六月朔日富士詣



図7 江戸府内図(北)に測量経路などを加筆

が植木屋伊藤伊兵衛家の花壇、植木溜を御覧になり霧島つじなど二十九種類の御用木を命じたことなどを詳細に紹介している。この地はソメイヨシノを生み出すなど、江戸のガーデニングブームを支えていた。

・白須甲斐守下屋敷：江戸府内図で確認すると、白須甲斐守下屋敷は松平但馬守屋敷の向かい側であるので、欠字は「左」である。

・江岸寺：曹洞宗の見海山江岸寺。

・富士の社：江戸時代には「江戸八百八講、講中八万人」といわれるほどに富士講が流行し、多くの富士塚がつくられた。駒込の富士浅間社も代表的な富士塚として知られる。『新編武蔵風土記稿』では「一丈余の塚上に鎮座す。：例祭毎年六月朔日。前日より参詣の人群集す。此日、小児の飢物に麦藁をもて作りし蛇を売る」と記している。

・天念寺、教覚寺、南国寺：文政九年に各寺が幕府に提出した『駒込寺院書上参』で確認すると天然寺、教元寺、南谷寺の誤記である。図7も天念寺として

いるが、こちらも誤記である。

・吉祥寺：図10では学寮が目につく。吉祥寺は曹洞宗の寺院で、僧侶を養成する梅檀林が置かれ、多くの学僧が仏教と漢学を学び、駒沢大学の前身となった。

元々は神田駿河台に所在したが、明暦の大火を期に駒込に移転した。吉田伸之(2005)によると、明暦三年の大火では江戸城や大名屋敷群



図9 守貞謄稿 富士詣の麦藁蛇

を含む江戸の大半が焼き尽くされた。幕府は「江戸市中の空間構造をリセットするかのよう」に、一回りも二回りも外縁部へと拡張する方向で、江戸の大規模復興に乗り出した」という。

明暦の大火では吉祥寺以外にも高林寺、天栄寺、定泉寺などの寺院が駒込に移転を命じられ、駒込の日光御成街道沿いに寺町とその門前町を形成することになった。

江戸府内図では図7のように寺社地は緑色で区別されている。

・目赤不動：元来は伊賀国の赤目山に由来する赤目不動尊を祀る庵であった。『駒込寺院書上参』に記載された南谷寺の書上によると、將軍家光が御鷹狩りの折りに庵に立ち寄り、「赤目不動尊ヲ目赤ト以来申すべき旨、御上意ニテ」、この地に七百二十六坪の土地を拝領したという。この日の日記の記録者は目黒か目赤かの判断が付かなかったよう両方を併記している。

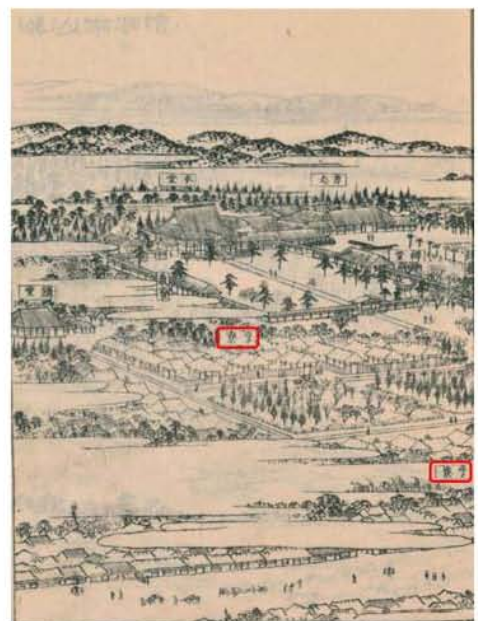


図10 江戸名所図会 吉祥寺

<p>九郎毛 浅嘉町 三十五町四十八間 又御成道 昨日残し 力印始 中仙道 測量</p>	<p>左右とも 俗に土物店 浅嘉町 という 昨日打止め印に繋ぐ 三十五町四十八間四尺 又 (御成道) 追分 昨日残し 中仙道 測量</p>	<p>左側 本郷森川宿 右側 駒込片町 九軒屋敷 左御徒組屋敷 右三条辰之丞屋敷 右戸田主水屋鋪</p>	<p>左側 本郷森川宿 右側 駒込片町 九軒屋敷 左御徒組屋敷 右三条辰之丞屋敷 右戸田主水屋鋪</p>	<p>左阿部備中守屋敷 右御先手組屋鋪入口 左小池源次郎屋敷 下左片岡吉之丞屋敷 昼休 自身番所</p>	<p>左阿部備中守屋敷 右御先手組屋鋪入口 左小池源次郎屋敷 下左片岡吉之丞屋敷 昼休 自身番所</p>	<p>左山田吉右衛門、左長持龜五郎 左権田小左衛門屋敷 右横町 片町上組 左佐々彦之丞屋鋪 左ばかり 丸山新町</p>	<p>左横町 浄心寺坂云 浄心寺門前 右大田寺 左側 小石川白山前町 左常徳寺 左横町</p>	<p>左側 三辻昨日の残し 夕印繋り 一十三町四十五間 左横町 惣名 巢鴨 右土井大炊頭下 屋鋪 左毛利</p>	<p>左側ばかり 小石川御数屋町 三辻昨日の残し 夕印繋り 一十三町四十五間 左横町 惣名 巢鴨 右土井大炊頭下 屋鋪 左毛利</p>	<p>左側ばかり 小石川御数屋町 三辻昨日の残し 夕印繋り 一十三町四十五間 左横町 惣名 巢鴨 右土井大炊頭下 屋鋪 左毛利</p>
--	---	--	--	--	--	---	---	--	---	---



図 11 江戸府内図(北)に測量経路などを加筆

・土物店：土物とは土のついたままの野菜のこと。近隣の農民たちが江戸市中へ野菜を売りにいく途中で、この地で休憩するのを常とした。いつしか天栄寺門前、高林寺門前、浅嘉町で青物市が始まり、『御府内備考』では十四軒の青物問屋の名を記している。そのためこの辺りは「土物店」、「駒込辻のやっちゃば」と呼ばれ、神田、千住と共に江戸三大青物市場の一つとして知られた。

・図11の赤枠で囲った「四軒寺町 御先手組」は測量隊員の坂部貞兵衛と青木勝次郎が住んでいた組屋敷である。

・柴山傳左衛門が記録した第六次測量の隊員名簿(『伊能測量隊旅中日記 上』『愛媛県立歴史文化博物館研究紀要』第6号)によると、坂部貞兵衛と青木勝次郎は「御先手 能勢市十郎組同心」と記されている。武鑑によると能勢市十郎は二千石の旗本で、御先手御鉄砲頭をつとめていた。与力六騎と同心三〇人を配下に置き、その組屋敷は駒込であった。

文化六年八月二十七日の測量日記によると、



第六次測量に出立する際、忠敬一行は出発地点の王子村に向かう途中、駒込大観音前で坂部貞兵衛と出会い、同道して青木勝次郎方に立寄って、一緒に王子村に向かった。

・西善寺：図12の西善寺には、国後島・択捉島など北方探検で知られる近藤重蔵の墓がある。

忠敬の『江戸日記』の文化四年六月十二日に近藤重蔵に中図二枚を貸したとの記事があり、両者の交流がうかがえる。

・駒込片町：中山道沿いのこの地域は、御用地として没収され武家屋敷や寺領となり、村民は中山道の東側に移され片側町となったため、駒込片町と称した。

・九軒屋敷：『駒込町方書上』によると、御家人など九人の拝領町屋敷



図12 江戸府内図(北)に測量経路などを加筆

達五百五十俵の蔵米取。

・戸田主水：五〇〇石の旗本戸田氏友のこと、『日記』では「主水」、図12では「主膳」と記載されているが、『寛政譜』で確認すると、通称として「主膳、源五郎、主水」と記載されている。後に嫡男の戸田伊豆守氏栄は浦賀奉行としてペリー艦隊来航時の折衝役となった。

・阿部備中守屋敷：備後福山藩の中屋敷で九万坪余の広大なものであった。幕末の藩主阿部正弘は老中首座としてペリーの浦賀来航から日米和親条約の締結に至る開国問題を主導した。

・白山権現：加賀白山の白山神社を勧請したも

であったことから駒込九軒屋敷が町名となった。此の辺の中山道の道幅は四間であった。

・三条辰之丞：図12に「三上」とあるように「三条」は誤記。『寛政譜』によると三上辰之丞季



図13 中山道分間延絵図 駒込追分・駒込片町

ので小石川の鎮守であり、江戸における白山信仰の中心となった。また將軍綱吉と生母桂昌院の保護を受けたことで知られる。

・小石川御数屋町：小石川御数寄屋町の「寄」を書きおとしている。『御府内備考』によると天和年間に御数寄屋坊主の拝領町屋敷となったことに由来する。御数寄屋坊主は茶室・茶礼・茶器をつかさどり、將軍・大名・諸役人に茶を調進した。

兵橋屋鋪（此邊俗に鶏声ヶ久保といふ）
左大久保公邸屋敷、五坪井、善太邸屋鋪、虎土井、九門屋鋪、九土井、漆器屋敷、九間井、河内守屋敷

兵橋屋鋪（此邊俗に鶏声ヶ久保といふ）
左大久保八五郎屋敷、左坪井、善太郎屋鋪、左土井、左門屋鋪、左土井、淡路守屋敷、左酒井、河内守屋敷

右土井、大炊頭屋鋪限、右野間、太門屋敷、右横通、右関、藤七郎屋鋪、右山口、真次郎屋敷、右横町、右小泉、八兵衛屋敷、右太田、伊織屋鋪、九酒井、雅樂頭守屋敷

右土井、大炊頭屋鋪限、右野間、太門屋敷、右横通、右関、藤七郎屋鋪、右山口、真次郎屋敷、右横町、右小泉、八兵衛屋敷、右太田、伊織屋鋪、九酒井、雅樂頭守屋敷

右天野、清兵衛屋敷、本戸、泉鴨御駕籠町、右町家、左御家人、右横町、又右横町、九横町、中町通

右天野、清兵衛屋敷、本戸、泉鴨御駕籠町、右町家、左御家人、右横町、又右横町、九横町、中町通

是より右松平加賀守中屋鋪、是より、泉鴨町下組、町家と成る。右横町、右大久保安芸守中、九日井、四郎兵衛組屋敷、泉鴨町下組、町家と成る。右横町、右大久保安芸守中、九日井、四郎兵衛組屋敷

是より右松平加賀守中屋鋪、是より、泉鴨町下組、町家と成る。右横町、右大久保安芸守中、九日井、四郎兵衛組屋敷、泉鴨町下組、町家と成る。右横町、右大久保安芸守中、九日井、四郎兵衛組屋敷

泉鴨中組、右酒井、九衛門、尉下屋鋪、右稻葉、大膳屋鋪、右石川、北後守、一屋鋪、右京極、加賀守屋鋪、九真性寺、右神澤、信濃守屋鋪、右増山

泉鴨中組、右酒井、九衛門、尉下屋鋪、右稻葉、大膳屋鋪、右石川、北後守、一屋鋪、右京極、加賀守屋鋪、九真性寺、右神澤、信濃守屋鋪、右増山

備中守下屋鋪、泉鴨上中組、左右町家、右三十間ばかり引込、御用屋敷、洪江長伯御預、泉鴨上組、右横町、本戸

備中守下屋鋪、泉鴨上中組、左右町家、右三十間ばかり引込、御用屋敷、洪江長伯御預、泉鴨上組、右横町、本戸

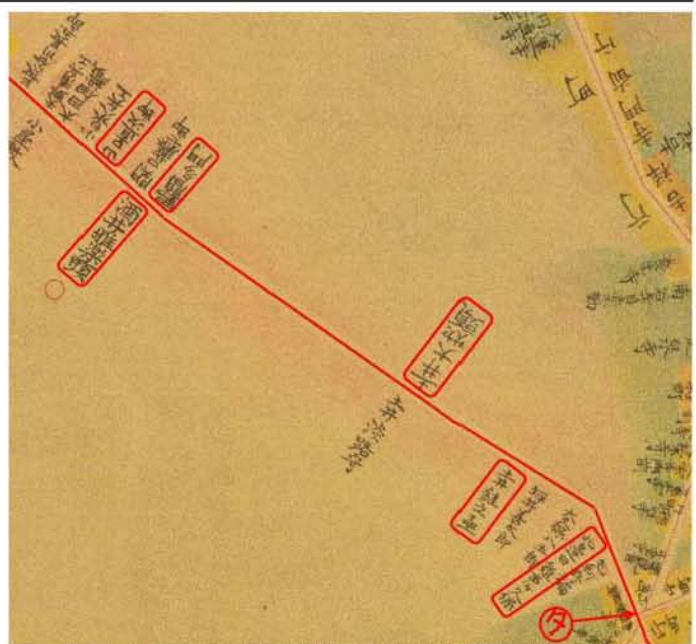


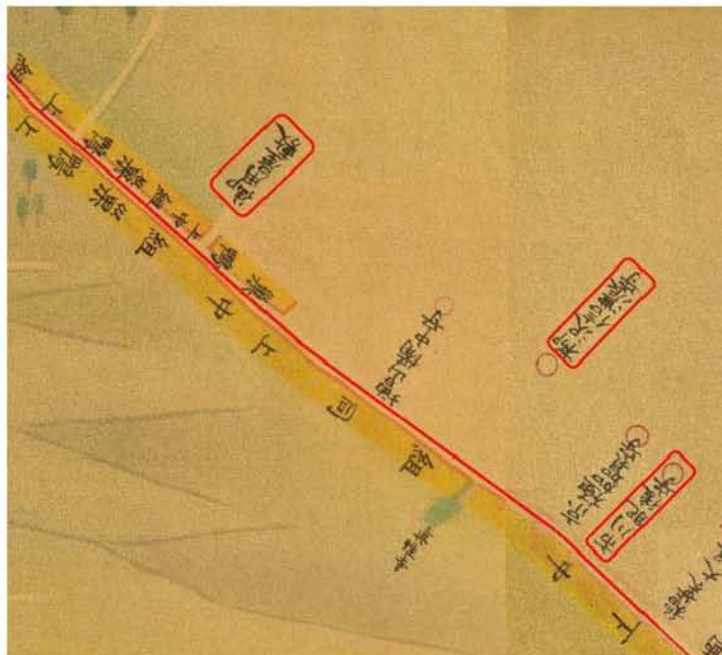
図14 江戸府内図(北)に測量経路などを加筆

・鶏声ヶ久保：図14にも「此辺曰鶏声ヶ久保」とあるが、図15のように傾城ヶ窪とも呼ばれた。『御府内備考』によると、むかし土井大炊頭利勝の屋敷の地中から夜ごと鶏の声が聞こえたため、地面を掘ったところ金の鶏が出てきたことからこの名が付いたとある。図14を見ると、この先の中山道は大名や旗本の武家屋敷が続くので、鶏声ヶ窪が町場の最後の場所だったのである。図15には人馬の往来で賑わう中山道の様子が見える。『本郷区史』によると、図15左側の「即席御料理」とある料亭万金は中山道の立場茶屋に始まり、奥州諸大名の送迎休憩所にもあてられるようになったという。右上に「卵の厚焼大鉢へ数万金」とあり、厚焼玉子が名物なのだろうか。

・図14を見ると、鶏声ヶ久保を過ぎると中山道の両側は武家屋敷が続き、中でも土井家が目立つ。江戸初期に権勢を振るった土井利勝に始まる下総古河藩土井家七万石が宗家で、当主の土井大炊守利厚は時の老中である。三河刈谷藩土井淡路守利以は利勝の三男の家系で二万三千石、土井左門は同じく五男の家系の五千石の旗本で銚之允に代替わりした。



図15 広重 江戸高名会亭尽 白山傾城ヶ窪 万金



土井大炊守の上屋敷は大名小路、土井淡路守は上赤坂御門内、土井左門は小石川御門外にあり、この地の屋敷は何れも下屋敷である。江戸府内図の記号では中屋敷、下屋敷、抱え屋敷には○をつけるはずであるが図14では欠落している。国会図書館所蔵の江戸府内図(北)も同様に○が欠落している。

・酒井河内守屋敷：酒井河内守忠実(播磨姫路藩十五万石の酒井雅楽頭忠道の嫡男)であり、別々に記載する意味がないので図14には記していない。

・野間太門、山口真次郎：図14では名前

が野間多聞、山口直次郎と記されているが調査未了。

・巢鴨御駕籠町：『巢鴨町方并寺院書上』によると、町名は御駕籠の者五十一人の大縄拝領町屋敷となったことによる。

・大久保安芸守：図16では加賀守と記している。文化七年の時点で既に相模小田原藩主の大久保忠真は安芸守から加賀守に官職名を変更していた。

・石川肥後守：図16の市川肥後守清素の誤記。一千石の寄合席の旗本。

・柳沢信濃守屋敷：元禄八年に五代將軍徳川綱吉の側用人柳沢吉保がこの地を賜って下屋敷を造り、回遊式築山泉水庭園の六義園を作庭した。

・御用屋敷、渋江長伯御預：『沿革図書』二十一頁によると、寛政十年に奥詰御医師の渋江長伯が管理する薬園となった。

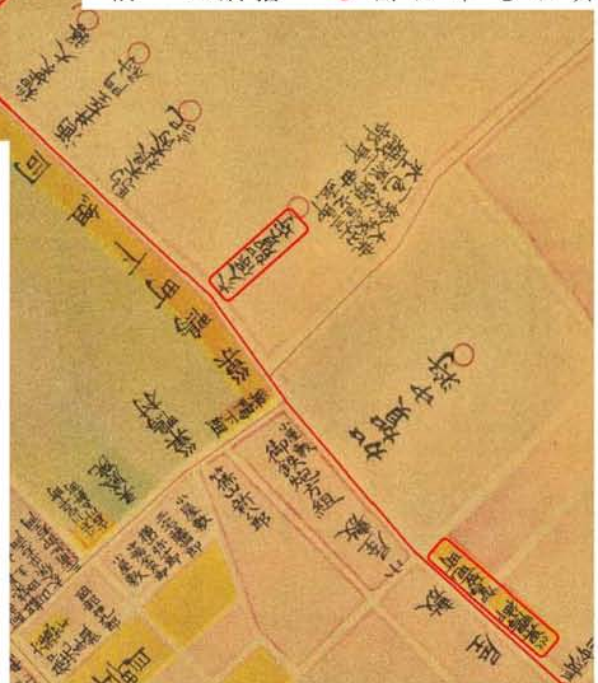


図16 江戸府内図(北)に測量経路などを加筆

・庚申塚：原文の「□子道」の個所は虫損しているが、庚申塚は中山道と王子道・大塚道が交差する場所にあるので「王子道」と判断出来る。『遊歴雑記』には、庚申塚の四ツ角には立場（休憩所）があり、よしづ囲いをして煎茶を売る茶店四軒を団子茶屋と称すると記載されている。図17には休憩する人々が描かれ、手前では団子を焼いている。図の右上に見えるのが庚申塚であろか。

・大岡□□□□：名前が虫損で判別出来ないが、「支配所」とあり代官支配地を示しているの

代官の名前が記載されている。『県令譜』や『武鑑』などから武蔵国担当の代官である大岡源右衛門であろう。

・加州下屋敷：三十一万七千九百三十五坪の加賀藩下屋敷。加賀藩の江戸屋敷は中山道に沿った本郷の上屋敷・駒込の中屋敷・板橋平尾の下屋敷と、深川黒江町の蔵屋敷という四屋敷体制をとっていた。

・板橋宿：板橋宿は中山道沿いに南北に長く連なっており平尾宿、仲宿、上宿からなる。『江戸名所図会』の本文には次のように記している。

惣測二里一十四町五十二間 一尺 七ツ時帰宿

惣測二里一十四町五十二間 一尺 七ツ時帰宿

白子道追分

地蔵の前、文化十一戊年
五月二十二日御用杭印繫ぎ畢る

一里〇六町二十〇間 五尺 追分より合

一里二十〇
町〇五間 五尺

白子道追分
地蔵の前、文化十一戊年
五月二十二日御用杭印繫ぎ畢る

一里〇六町二十〇間 五尺 追分より合
一里二十〇
町〇五間 五尺

一里塚
（此所より一町ばかり右へ引込）
加州下屋敷

（左側ばかり）
板橋宿入会

（板橋宿入会）
字平尾

（左共）
板橋宿

（左共）
板橋宿

一里塚
（此所より一町ばかり右へ引込）
加州下屋敷

（左側ばかり）
板橋宿入会

（板橋宿入会）
字平尾

（左共）
板橋宿

（左共）
板橋宿

（左共）
板橋宿

（左共）
板橋宿

芝増上寺領
巢鴨村
（右に庚申塚。右□子道
左大塚道追分）

滝野川村

字三軒家

（大岡□□□□
支配所）

板橋宿

芝増上寺領
巢鴨村
（右に庚申塚。右□子道
左大塚道追分）

滝野川村

字三軒家

（大岡□□□□
支配所）

板橋宿

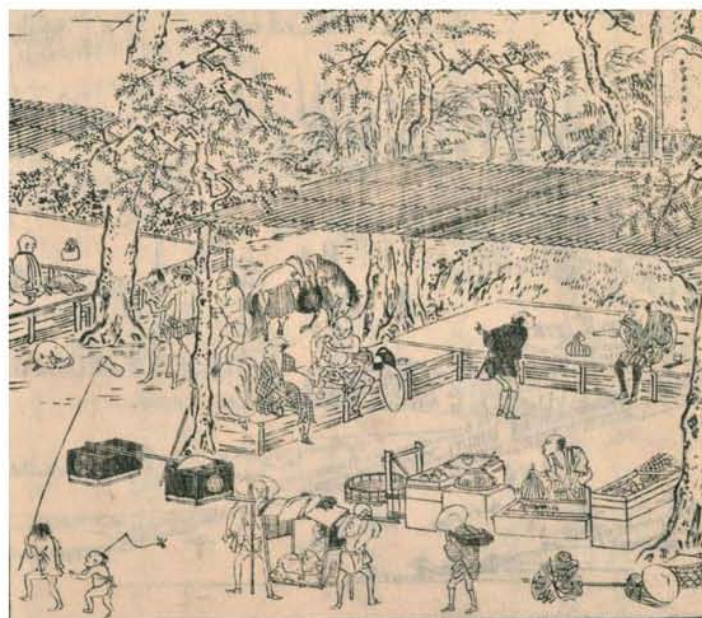


図17 江戸名所図会 巢鴨庚申塚

中山道の最初の宿場で日本橋から二里である。往来する旅行者が絶え間なく、旅籠や酒屋が軒端を連ね、繁昌している土地である。宿場の中程を流れる石神井川に架かる小橋があり、板橋の名はこれに由来する。

・文化十一戊年五月二十二日：第八次測量を終えて、川越から白子村（現埼玉県和光市）を経て平尾宿で中山道に出た。平尾宿は板橋宿の南側の入口であり、川越街道との分岐点。白子道追分でもあった。『測量日記』には「板橋宿中山道に出、追分地蔵の前迄、一里十町十八間」とある。追分地蔵の前の印の御用杭に繫いだとあるが、図18のどの辺にあったのだろうか。『歴史の道調査報告書 中山道』によると、中山道と

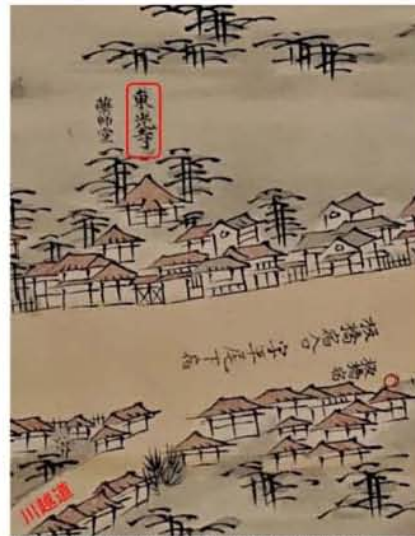
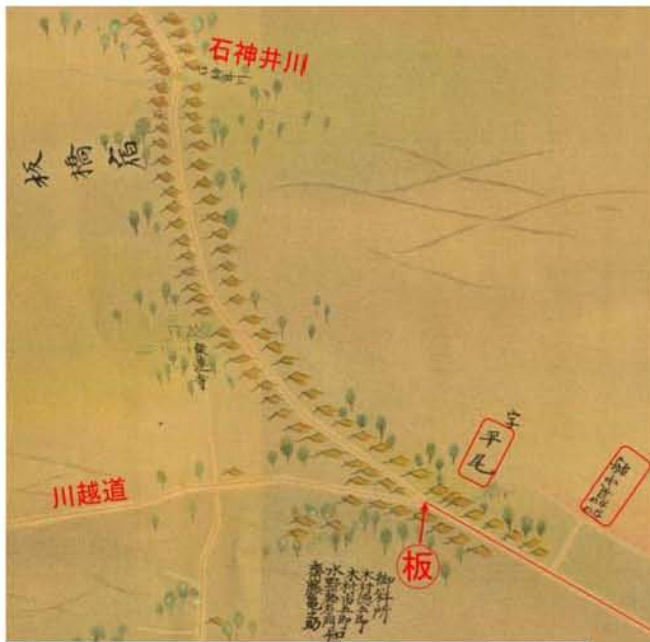


図18 中山道分間延絵図 板橋宿入口

川越街道の追分にあった地蔵は現存しており、東光寺に移されているという。東光寺HPによると、図20の道中守護の地蔵は享保四年に建立されたもので全高三メートルとのことである。



図20 平尾追分地蔵

図19 江戸府内図(北)に測量経路などを加筆

【図版の出典】

- ・『日記』の図版は香取市立伊能忠敬記念館に架蔵されている写真帳による。
- ・図2・6・7・11・12・14・16・19の江戸府内図は『東京市史稿市街篇 附図第三』による。
- ・図1・3・4・5・8・9・10・15・17は国会図書館デジタルコレクションによる。
- ・図13・18は東京国立博物館所蔵である。
- ・図20は板橋区の東光寺のHPによる。

【参考史料】

- ・『町方書上』『寺社書上』(文政八〜十二年)
- ・『御府内備考』(文政十二年)

【参考文献】

- ・『新編武蔵風土記稿』(文政十三年)
- ・『十方庵遊歴雜記』(文化十一年)
- ・『江戸名所図会』(天保八年)
- ・『武江年表』(嘉永二〜三年)
- ・『守貞謄稿卷』(天保八年)
- ・『伊能測量隊旅中日記上』
- ・『愛媛県立歴史文化博物館研究紀要』第6号
- ・『県令譜』
- ・『寛政重修諸家譜』(寛政譜)
- ・(寛政十一年〜文化九年)
- ・『武鑑』(文化十一年・十三年)
- ・『中山道分間延絵図』(文化三年)
- ・『御府内場末往還其外沿革図書』(沿革図書)
- ・(文化四年〜安政五年)
- ・『柳宮補任』(『大日本近世史料』所収)
- ・『観光都市 江戸の誕生』安藤優一郎 (2005) 新潮新書
- ・『都市 江戸に生きる』吉田伸之 (2015) 岩波新書 日本近世史④
- ・『歴史の道調査報告書 中山道』東京都教育庁生涯学習部文化課 (1994)
- ・『板橋区史』(1998)
- ・『文京区史』(1981)
- ・『本郷区史』(1937)
- ・『小石川区史』(1935)
- ・『北豊島郡誌』(1918)
- ・『江戸幕臣人名事典』改訂新版 (1997) 熊井保編 新人物往来社
- ・『寛政譜以降旗本家百科事典』(1997) 小川恭一編 東洋書林

土佐の伊能測量4 四国縦断編

福田 仁

今回は、伊能測量隊の本隊が高知城下に留まっている間、坂部貞兵衛率いる支隊（別手）が城下から北上し、伊予・土佐国境の笹ヶ峰に到達した「四国縦断」の行程をたどってみたい。

この南北測量は、土佐藩の参勤交代道（北山道）が利用された。高知城下を出た土佐藩の大名行列は、笹ヶ峰を越えて伊予に出た後、瀬戸内海を船で渡り、播磨国などから陸路、江戸に向かった。およそ1カ月、約800キロの長旅で、総勢2800人を超える年もあったという。

そもそもの参勤交代ルートは、船で土佐沿岸を東進し、室戸岬を回る海上ルートだった。しかし天候に大きく左右されるため享保3（1718）年、四国山地を越える北山道に変更した。これが坂部隊による四国縦断の90年前である。街道として徐々に整備された既存インフラを、伊能隊は有効活用したわけだ。

坂部隊に付き添った土佐藩役人、奥宮正樹の日記によると、伊能隊が阿波から越境して土佐・甲浦に入った初日、唐突に四国縦断の意図を告げられた。文化5（1808）年4月19日の彼の記述を、現代語訳して引用する。

事前の通知では、甲浦から宿毛までの（土佐の海岸沿いの）街道を通ることだった。これに加えて北山路（四国縦断の山岳ルート）も伊予・土佐の国境まで行くという。この件についても藩庁へ消息を遣わした

四国縦断計画を聞かされた正樹は、即座にこれ

を重大事項と認識した。心の中で「えっ？ 聞いてないんですけど！」と悲鳴を発したに違いない。正樹は、伊能隊到着から数日間、不眠不休で各種対応に追われている。そして4月24日、次のように書き記している。

笹ヶ峰までの測量は、坂部組が別行動で行くと今宵、決定した。そのことも藩庁へ申し遣わした。また昨日、「土佐の画図に各河川、主要山岳の險夷大小、札を付けて出せ」と命じられたので、記して坂部に提出した。

この手際よさも、さすがである。事前の情報収集で知った他藩の事例が念頭にあったのだろうか。いずれにしても常時、資料一式を持ち歩かなければできない対応だ。坂部も内心、「むっ、この男でさる！」と感嘆したに違いない。かような人間模様を（想像を交えながら）うかがえる点にも、奥宮日記の価値がある。

【高知市布師田】

3年前、「高知新聞」紙上で忠敬没後200年記念企画を終えた後、高知市布師田（ぬのしだ）在住の岡本純一さんからお声掛けがあり、浅学ながら「伊能測量と布師田」について講演させていただいた。布師田はかの奥宮正樹が居住し、かつ四国縦断測量の舞台ともなった、ゆかりの地である。岡本さんは住民組織「布師田の未来を考える会」の一員として、各所に歴史案内看板を設置するなど、地域学習に取り組んでこられた。そんな岡本さんの案内で今春、地域を丹念に回った結果、さまざまな痕跡が見えてきた。

高知市中心部から東北へ約4キロ。JR土佐一宮駅の東方、小山の南麓を、狭い県道が通ってい

る。これが布師田の旧参勤交代道だ。西の入り口付近に「送り番所」跡を示す看板が建てられている。道の両脇には、石垣を築いた立派な伝統家屋が多い。

「布師田ふれあいセンター」のある辺りが、この街道で最初の宿場となった「御殿跡」。藩主の行列はここで往路に旅装を整え、帰路には旅装を解いた。

布師田の参勤交代道はいくつかのルートが存在した。旧街道の趣を今にとどめるのは、前述の送り番所跡、御殿跡などある国分川北岸の道で、グーグルマップには「土佐北街道」と表示される。川の南岸にもルートがあった。伊能図の測線を見れば、支隊はこの南岸ルートを測量している。

支隊が四国縦断に出発した5月1日、奥宮日記に「布師田村庄屋、奥田常右衛門家にて昼食出す」とある。「考える会」の歴史パンフレットによると、近くの「葛木男神社」拝殿再建の棟札（文化元年）に「大庄屋、奥田常右衛門」の名前があるという。



右手の家屋辺りが奥宮邸跡。
手前道路の左手が国分川

年代的にもまさに同一人物。岡本さんが、南岸

にある庄屋敷跡を教えてください。測量ルートのすぐ脇だったはずだ。

奥宮正樹邸跡は、この庄屋敷跡から、国分川を隔てて直線距離で約350メートル北東。北岸の旧街道沿いに、奥宮家跡を示す歴史看板が設置されている。

奥宮家跡のすぐ東に「真言宗西山寺」がある。本堂の裏手から北へ続く小道を、道なりに100メートルほど登ると、「寿宝明神」の石の鳥居と小さな社がある。そのすぐ背後が、奥宮家の墓所。正樹の墓石は正面に「奥宮弁三郎正樹」、側面に「嘉永六癸丑歳 四月十三日歿」「年七十五」と刻まれている。なお、たびたび引用させてもらう奥宮日記は、本誌84号と86号（平成30年）に全文が掲載されているので、ぜひご覧いただきたい。



奥宮弁三郎正樹の墓（右端）

【推測あれこれ】

布師田地区の東端、県道「後免—中島—高知線」脇の畑に、郡境の石碑がある。上部が欠損し、傾きながらも、けなげにそこに存在し続けた。石には「(従) 是西 土佐郡」「(従) 是東 長岡郡」と

刻まれている。今も正確に高知市布師田と南国市岡豊町中島の境である。伊能図中、朱の丸印で示された郡境は、この場所だろうか。なお同様の石碑が約300メートル西の土手際にもあるが、これは「別の場所から移設された」とも伝わるが、本来の設置場所など詳細は不明という。



「(従) 是土佐郡」と書かれた郡境の石碑

伊能図を見れば、常通寺島村で、朱の側線が逆「く」の字に折れ曲がっている。「この形状で思い当たる場所はありませんか？」と岡本さんに尋ねると、即座に車で案内してくれた。上述の県道を東へ進む途中、旧中島村の住宅地に差し掛かると、道幅狭く、車の行き違いは困難。ここもわずかながら、旧街道の趣が残っている。到達した場所は、変則的な十字路。そこから左手（北東）へ、伊能図とほぼ同じと思われる角度で、気持ち良いほど一直線の道が伸びている。過去には、ここから東進すれば室戸方面へ。左手に折れれば北山道。そんな重要な分岐だったそうだ。坂部隊は、この地点で北山道へと方向を転じたのではないだろうか？ 以上、推測ではあるが、何かの参考になれば

ばと書き記しておく。

【権若峠1】

奥宮日記に、亀岩で休んだ後、「権若（ごんや）く」坂」から険しい山道になったとある。坂を上り詰めた権若峠は標高約550メートル、北山道で最初の難所だ。以下、奥宮日記よりの引用。

権若坂の山路は険しかった。石ヶ休場、中の休場、峠の休場などがあった。（略）山道は木々の枝に覆われ、曲がりくねり、思うように縄も引けない。所々で器具による計測※を行った。

（※小象限儀で高低を計測している。）



奥宮日記にも出てくる「石の休場」

ここからは3年前、権若峠を含む北山道を、筆者が自転車と徒歩で北上した道中を紹介する。

高知城下を自転車で出発した後、亀岩を経由して、何度か迷いながら登り口に到達。「権若峠・釣瓶登山口」と書かれた標柱がある。道を改めて、徒歩でこの権若坂を登る。平成の中ごろには、住民らがこのルートを「歴史の道」として整備していたようだ。現在では所々で倒木が道をふさいでいるほか、道が土砂で埋まって消えている場所も

見受けられる。登山者は、ほぼ途絶えているようだ。

道は曲がりくねっている上に、木々が茂って見通しが悪い。伊能測量の時代には、少なくとも現状よりは街道らしく整備されていたはず。そうだとすると、この山中で、よく測量が成り立ったものだ。あちこちにかつての「休場（やすば）」を示す古びた看板があった。急斜面でわずかに開けたなだらかな場所では、看板に「中休場（行列を止め、人馬を休ませた）」と書かれていた。

高度を上げるにつれ、ますます道は判然としなくなつた。そろそろ峠かと思うころ、背の高いスキヤセイタカアワダチソウが密生するやぶに、行く手を阻まれた。視界が閉ざされ、身体の内も利かない。あきらめて引き返そうとした時、数メートル先に人工物の一部が見えた。やぶをかき分けると、権若峠を示す標石だつた。地形的には、いわゆる鞍部（あんぶ）。少し開けた場所から来た方向を振り返れば、太平洋と南国市の平野が視界に入つた。峠から北へと降りていこうとしたが、道の痕跡すら見当たらず、南麓へと引き返した。

【権若峠2】

支隊の宿泊地の一つが穴内（あなない）村。昭和39年に穴内川ダムが完成し、集落は湖底に沈んだ。過日、南麓からたどり着いた権若峠を、今度は北麓のダム湖から目指して、自らの足跡をつなげようと試みた。北側のルートも、基本的には廃れている。それでも所々に、色あせ破損した「北山道」の案内板があり、自分の進む方向が間違っていないことが分かる。地図とコンパスを頼りに、地形を読みながら、権若峠に到達した。低山なの

に難易度が高く、労苦の割には眺望も今ひとつ。それでも歴史との一体感を感じる点では、心に残る登山となつた。峠の南北でかろうじて残っていた北山道の痕跡が今後、年を追うごとに薄れていくとすれば残念だ。



穴内川ダム湖。旧村落は湖底に



棚田地帯を下り、本山の町へ

穴内―国見峠―古田をつなぐ山越えの北山道は、地形図にそれらしいルートがうかがえたものの、現状が分からないので、少し西の県道を自転車で行った。標高約800メートルの赤荒峠を、主に

は自転車を押しながら越えた後、棚田の絶景を見渡しながら坂を急降下。下りきると、吉野川沿いに本山の町が開けている。

【本山町―大豊町】

本山町からはしばらく吉野川左岸を東、つまり流れの方向へと走る。なだらかな下りが続き、実に快適だ。欄干がなく増水時に水没する沈下橋（ちんかばし）は四万十川のものが有名だが、ここ吉野川上流にも存在するとは知らなかった。川口から北に向かう北山道は、数カ月前の豪雨によって随所で崩落。とても歩ける状態ではないので、県道を自転車で行った。



吉野川・下津野の沈下橋

愛媛・高知県境の笹ヶ峰は、標高1016メートル。その南麓（高知県側）に位置するのが立川の集落だ。江戸期には、集落内を流れる溪流を挟んで東に下名（しもみょう）、西に上名（かみみょう）と二つの番所が存在した。

奥宮正樹が5月5日「下名の関屋に宿る」と記した宿は、下名に現存する国重要文化財「旧立川番所書院」。堂々たる建築物だ。この土地が、瀬戸

内―土佐を結ぶ交易拠点として栄えた過去がうかがえる。



奥宮正樹が宿泊した立川番所(右)。
左に高知自動車道

隊員の一人、柴山伝左衛門は同日の「旅中日記」に、「元(本)山頼右衛門預かり番所」に宿泊したと記している。「番所よほど広し」とも。これがつまり西の上名の番所だ。「旧立川番所保存会」の石川靖朗さんが、「本山氏番所」跡地を案内してくれた。跡地は地元で「ごてんとこ(御殿処)」と呼ばれてきたという。二つの番所間の距離は、直線で約350メートル。

聞けば石川さんは、この本山庄屋の子孫という。開いてくれた特大の家系図の中に「山頼右衛門」の名を見つけることができた。今回の旅も、測量協力者の子孫の方との出会いがあった。立川から笹ヶ峰までの旧街道は、やはり各所で崩落。あきらめ切れず大きく迂回した山道でも大規模な崩落があり、高知県側から笹ヶ峰山頂を目指すことは断念した。

【愛媛県・四国中央市】

高知県側で「北山道」などと呼ばれる旧参勤交

代道は、愛媛県側(四国中央市)では「土佐街道」と呼ばれる。笹ヶ峰山頂を、今度は愛媛県側から目指す。新宮インター近くに車を停め、土佐街道を登った。案内板はどれも古びて、倒壊したものも見受けられる。それでも道は広く明瞭で、迷う心配は全くなかった。



笹ヶ峰の南山腹より南を臨む。
右下に高知自動車道

奥宮日記には笹ヶ峰山頂の国界に到達した時、「予州(伊予)より名主めく人二人出会たり」「名主の一人は宇摩郡の大庄屋なり」とある。伊予側から大庄屋らが險路を登り、伊能隊到着を待ち受けていた。忠敬の「測量日記」には「予州より出迎者」として5人の名を列挙し、彼らから瀬戸内までの各村の道のりを聴取したむね記述されている。

標高約800メートルの笠取峠にある説明看板には、「東側への道が、犬の墓道(立川陣屋と新瀬川の脇本陣への犬の飛脚の墓)」とある。つまり笹ヶ峰を挟んで、立川(土佐)と新瀬川(伊予)を結ぶ「犬の飛脚」が存在したということだ。Eメールならぬ犬メール。伊能測量に関連した通信連

絡にも、この犬の飛脚は活躍したのだろうか？



四国縦断ルートで最も標高が高い
笹ヶ峰山頂

柴山伝左衛門が「何に負う腹包丁という大難所」と記した、長い急坂がある。参勤交代の折、土佐藩の武士たちが刀を腹に抱えて下ったため、そう名付けられた。地理院地図にも「腹庖丁」と記載されている。

文化5年4〜6月にかけて土佐を歩いた伊能隊は、次に伊予に入り、時計回りの四国沿岸の測量を続行。同年9月、坂部隊が瀬戸内海側(現四国中央市)から南下して笹ヶ峰に到達した。9月10日の柴山日記に「去五月六日、土佐高知城下より来りし打止杭に繋ぎ終る」とある。

伊能図に描かれた四国を見れば、その中央を朱の測線が貫いている。曲がりくねりながらも、瀬戸内海と太平洋がしつかり結ばれている。険路とはいえ、四国という島を最短距離で横切る、理にかなったルート選択だった。忠敬以下、毎日の現場作業をこなす一方で、先々の行程の情報収集や検討作業にも、相当の労力をつぎ込んだことだろう。彼らを突き動かした情熱の根源に、遠く思いをはせた。



徳島大学附属図書館所蔵「大日本沿海図稿（南海）」

(徳島大学附属図書館ホームページ「貴重資料高精細デジタルアーカイブ」で閲覧可能)

URL : <https://www.lib.tokushima-u.ac.jp/~archive/z/z013.html>

主な地点の位置図



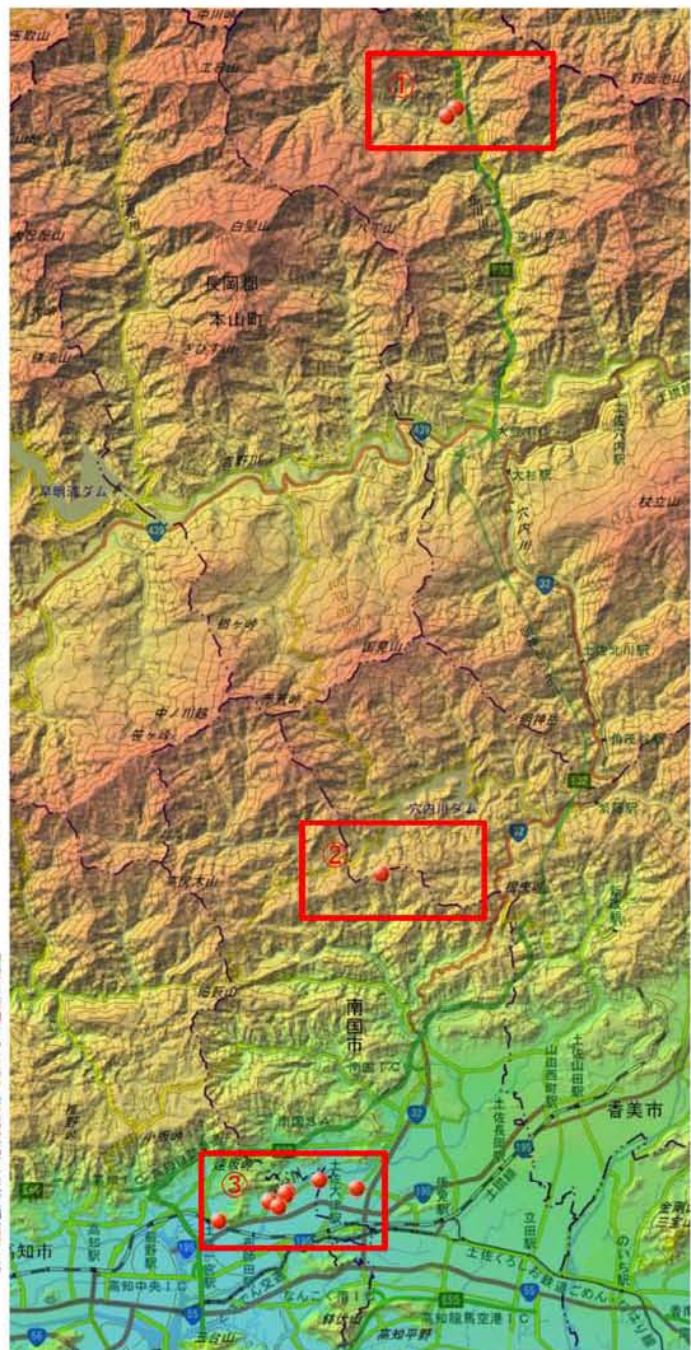
右図①の範囲の拡大図



右図②の範囲の拡大図



右図③の範囲の拡大図



「地理院地図」に主な地点を表示

主な地点の経緯度

場所	緯度	経度
布師田・石渕「送り番所」跡	33度34分43.79秒	133度34分49.28秒
御殿跡	33度35分0.47秒	133度35分42.30秒
奥宮家跡	33度35分6.23秒	133度35分58.86秒
西山寺（背後に奥宮家墓所）	33度35分8.98秒	133度36分0.43秒
奥田庄屋敷跡（昼食場所）	33度34分56.33秒	133度35分50.83秒
郡境の石碑（高知市・南国市境）	33度35分19.16秒	133度36分34.05秒
常通寺分岐（逆「く」の字カーブ）	33度35分12.19秒	133度37分13.98秒
権若峠	33度39分46.45秒	133度37分39.99秒
旧立川番所書院（奥宮正樹宿泊）	33度50分55.75秒	133度38分58.12秒
本山氏番所跡（柴山伝左衛門宿泊）	33度50分48.05秒	133度38分48.60秒

江戸実測図（東京市版）考察

柏木 隆雄

靖国通りに面する神田神保町の古書街から猿樂町寄りに少し入った所にS書房がある。

古書店と言うよりも、昔風に古書肆と名乗っているような店である。間口は一間もない。書架と書架の間を人ひとりやっと通れる狭さの小さな店。半世紀を越してこの地域に事務所を持つ小生。古書店街を逍遙する長年の経験から、どの店が何を得意とするか、また専門かはおよそ見当がつく。S書房は歴史物、特に蝦夷、アイヌ、北海道開拓に関する古本が揃っていて界限では一番かと思う。伊能忠敬測量の「江戸実測図」一冊はこのS書房で購入した。大谷亮吉「伊能忠敬」の初版本を以前この店から求めたことから店主とも顔なじみになり、店の在庫目録が時々送られてくる。最近のものにこのような記載があった。

伊能忠敬測量「江戸実測図」揃。東京市役所篇
昭3彩色一部小汚れ20枚○○○円

どんなものかと、さっそく店を訪ねた。

重々しい錦地表装の函に20枚の測量図が二度折りされ重ねて納められていた。一枚の大きさは縦78センチ、横106センチ、紙は少し焼けているが、測量図の文字は鮮明で、押えた色調の絵図もそれほど褪色していない。

この実測図には小冊子の解説書が付いている。外題は「東京市史稿市街篇附図第三」書き出しの部分の原文のママ写す。

江戸實測圖ハ、東河伊能忠敬ノ手ニ成ル。忠敬ハ佐藤坦撰スル所ノ墓銘叙記ス如ク、

東河伊能君墓銘并叙

江都一齋佐藤坦爲文

以下は浅草源空寺の忠敬の墓石に刻された顕彰文が丸写しで記されている。

続いては、高橋景保の文書からの転載で、実測図測量から完成に至る経過、測量日程、従事者などの詳細が記されている。

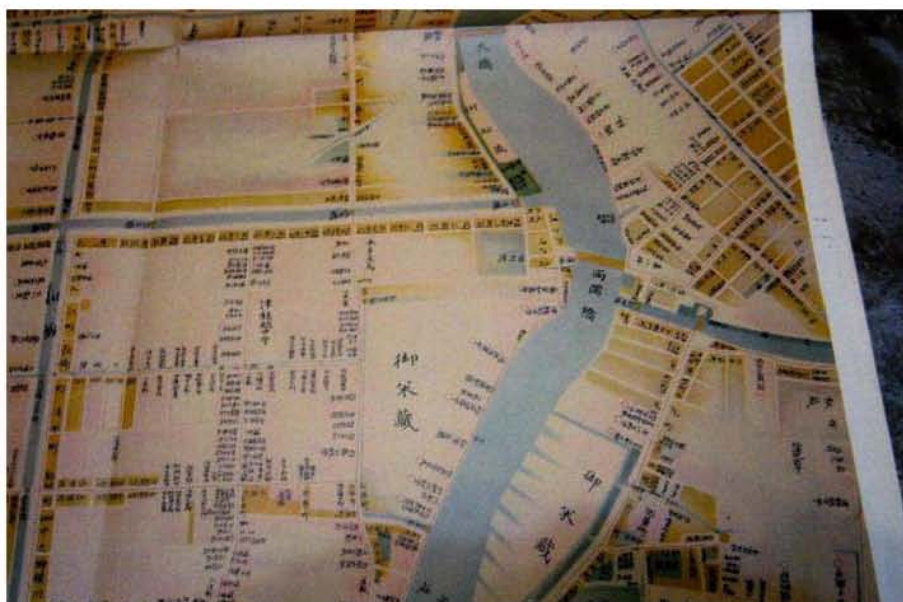
奉命により、忠敬が十余年をかけて、五畿七道二島の沿海、街道を測量し日本全図となったが、ここに江戸実測図を加えて江都の詳細を明らかにした。

文化十四年丁丑 秘書監兼日官臣高橋景保謹誌
と末尾に記されているので、これは幕府への上呈時、実測図に添えた文書である。

以上を前文として東京市篇の解説書は、忠敬の「江戸実測図」をこの時節に、なぜ出版したのかの本意を縷々記述しているの、原文を転写する。

而シテ上呈スル所ノ諸圖ハ、藏シテ紅葉山文庫ニ存セシモ、王政維新後、政府權大外史塚本明毅等ヲシテ地誌ヲ纂修セシメ、日本輿地大中小圖沿海實測錄以下、參考用トシテ之ヲ地誌課ニ保管シ、明治六年五月五日ノ皇城炎上ニ際シ、一朝擧ゲテ烏有ニ歸セシム。乃チ忠敬ノ裔伊能氏ニ論シテ之ガ副本ヲ献セシム。江戸實測圖副本、同ク献中ニ在リ。而來内閣文庫ニ藏シ、東京帝國大學圖書館之ヲ保管シタリ。大正三年三月東京大正博覽會開催ノ舉有ルヤ、東京市役所市史編纂室史料ヲ出陳スルニ方リ、審美書院ニ命シテ之ヲ謄寫セシメ、久保田鼎重督下ニ京橋九州俱樂部樓上ニ於テ影寫シタル者、即チ本圖也。是時竪九尺四寸横六尺四寸及竪一丈五寸横六尺二寸幅ナリシヲ合シテ竪一丈九尺七寸五分横一丈二尺四寸ノ一圖トス。然ルニ大學圖書館保管スル所ノ原圖ハ、大正十二年九

月一日ノ震火ニ焼失シ、僅ニ一幅ヲ存スル市ノ寫本亦年ト共ニ漸ク褪色シ、紙上往々痕影ヲ失スル所有ラムトス。竟ニ消磨シ盡クルノ虞無カラサル也。今之ヲ東京市史稿市街篇附圖第三ニ收メ、凸版印刷會社ヲシテ假ニ二十葉二分チテ割刷ニ附セシム。大小色彩一ニ原圖ニ同シクス。江都ニ於ケル忠敬ノ遺業、或ハ永ク湮滅セサルヲ得ルニ庶幾カラム乎。



両国橋

(追記)
写真江戸実測図、深川永代橋周辺の部分である。よく見ると黒江町の町名が六ヶ所に付けられている。忠敬の偶居、地図御用所は、その内のどこかと疑問を抱いた。
忠敬の江戸への出府前は、伊能三郎右衛門家の番頭の柏木幸七の江戸店であった。佐原からの物資の出入りに便利の川筋に面していたと思はれる。以前、本誌82号に、黒江町は松平加賀守、伊達遠江守の屋敷に隣接していると書いたがお殿様の屋敷の敷地内で商売をしていたとは思えない。ならば他の五ヶ所のどこか。
忠敬が、緯度一分の距離を求ようと実測した黒江町から暦局までの自筆の地図(測定メモのようなもの)では、方眼紙上に出発点を深川黒江町とだけ記しているの、位置の詳細は判らない。
現在、門前仲町の道路際に立つ忠敬住居跡の標柱は確かなものではない。地域の埋立てや都市計画による道路拡張などで、おおよそこの辺りの見識で据えられたものである。



江戸実測図表紙

なお、この江戸実測図の表装函に貼られた題紙には、朱で蔵書印が押されている。「村上蔵書印」と読みとることができる。
S書房には、村上元三氏の著作物や色紙、それに同じ蔵書印の押された古書などがあることから、この実測図は時代物作家の村上元三家から出たものと推察できる。村上氏の著作は伝記物が多く「源義経」「平清盛」「真田十勇士」「勝海舟」「岩崎弥太郎」など。



永代橋周辺拡大図

「次郎長三国志」と共に、多くの読者を得て、また人気のテレビドラマにもなった「松平長七郎江戸日記」村上氏はこれらの江戸物の時代背景と考証に、忠敬の江戸実測図を利用したのではない。
<了>
(柏木幸七子孫)

国宝紹介（器具類番号50）

「携帯用磁石」

玉造 功



図1 携帯用磁石

はじめに

この「携帯用磁石」は、伊能忠敬の全国測量で使われたものではないと考えられることから、穹窿羅針や量程車など他の測量器具に比べて、あまり紹介されることのない国宝である。なお、図版は図6を除き千葉県香取市伊能忠敬記念館所蔵・提供である。

形状

図1のように木製の箱に着脱可能な真鍮製の方位盤がはめ込まれている。本体の最大長18.7cmで、盤上に縦横十文字の中心線が点々と刻まれている。蓋の部分を外すと、木箱の中には図2のように木製部品が十一点和象牙棒二点が収納されている。

図3は令和元年十月の伊能忠敬記念館の企画展の際に部品を組み立てたものである。各部品は図4のように、ほぞ継ぎで組立てることが出来る。Aの円弧部や直線部には目盛りも確認できる。「携帯用磁石」という資料名で国宝指定されているが、木箱の中に納められていたものは組み立てた形状から見ても、携帯用の象限儀であろう。



図2 携帯磁石の蓋と箱の中

図3・Bの二本の棒をほぞ継ぎしたもの、懸垂させて角度を読み取る部品であろうか。その先端には図5のように象牙の部品がはめ込まれている。目盛りを読み取るためのものか、Bを懸垂させるためのものか不明である。また、図3C、Dの木箱に差し込んだ二つの部品や図2の箱の中に見える二つの象牙の棒はどのように使うのであろうか、どなたか御教示して頂ければ幸いです。

部品を組み立てた形状は図6の江戸中期の儒



図5 図3・Bの先端部



図4 ほぞ継ぎ

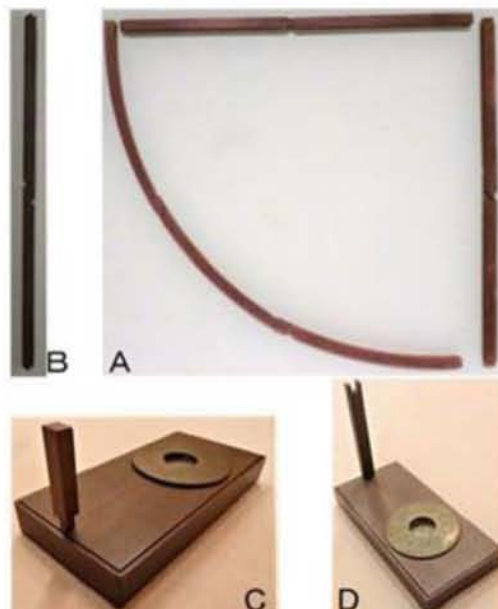


図3 組み立てた木製部品



図7 方位盤

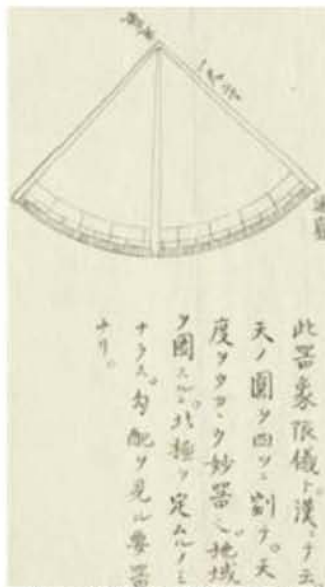


図6『秘伝地域図法大全書』

家・書家で天文・測量に通じた細井広沢（一六五八・一七三六）が『秘伝地域図法大全書』第三冊で紹介したワタランテ（クワドラント、四分儀）に似ている。説明文を書き下して紹介すると、「此の器、象限儀と漢にて云う。天の円を四ツに割つて、大度を窺う妙器なり。地域を図するに、北極を定むるのみならず、勾配を見る要器なり。」とあり、緯度や勾配を測る機器として紹介している。

図7下側の方位盤には「乾」や「坎」などの八卦が、その上の重ねる上側の方位盤には十二支が陰刻されている。十二支の方位盤は図8のようにな支（30度）を二十等分、八卦の方位盤は図9のように一卦（45度）を30等分しており、両方とも目盛りは五厘（1・5度）単位であり、全国測量で用いた器具のレベルの精度ではない。寛

政六年に忠敬が佐原で実測し制作した「下利根川沿実測図」や「地境に付取替絵図」でも単位で方位角を記載しており（会報九〇号所収の拙稿「方位角の精度」）それよりも精度は落ちる。あくまでも旅行などに携帯するための磁石・象限儀である。この携帯用磁石はその制作年代も忠敬の入手経路も不明である。

関連資料『旅行記』

（国宝文書・記録類番号218）

寛政五年二月二十九日に忠敬や久保木清淵らが佐原を出立して、伊勢参宮と関西方面への旅に出た。その旅行記である。

この旅行記では名所旧跡を訪れては、寺宝、句碑、様々な碑文、扁額等々を詳細に書き留めているが、その中に十四箇所での方位測定や二箇所での北極出地度の測定の記録も記されている。各地で行った方位測定の値の最小単位は「一分五厘」「二分半」「六分五厘」とあり五厘単位である。これは「携帯用磁石」の五厘単位が目盛りと一致する。



図9 方位盤（八卦）部分

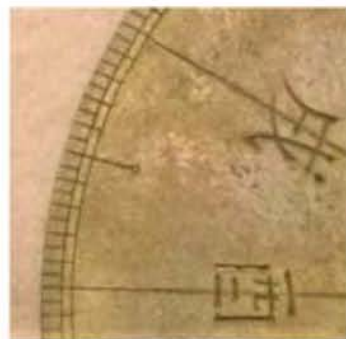


図8 方位盤（十二支）部分

また『旅行記』の三月九日には「駿府の宿甲州屋太兵衛と云。此地は北極出地三十五度弱に当る」、四月八日には大和多武峰で「北極出地三十五度弱」と緯度を記録しており携帯用の象限儀を持参していることがわかる。忠敬は関西旅行にこの「携帯用磁石」を持参し使用した可能性がある。

『旅行記』の方位測定の記述

『旅行記』の中から、方位測定についての記事の一部を、書き下し文にして紹介する。

・三月九日「久能山へ参詣しけれども、拝見叶わず。宗門の際まで登ること十町、石階十八曲、遠江潮見える。伊豆の御嶽山、巳の五分に当る。駿河より海へ成出したる岬の弁天、未の八分に当る」

・四月二十四日（京都）昼、四条を立ち、祇園社、清水観音、大谷御坊、大仏、三十三間堂、日吉社、東福寺、八坂塔、伏見稻荷を拝し、暮合いに伏見船宿小国屋七兵衛へ着し、乗船して道頓堀扇屋七兵衛へ上り、朝食を致す。清水の舞台より大坂の見透し未一分なり」

【参考】

- ・伊能忠敬『旅行記』（香取五郎氏の翻刻、私家版）
- ・佐久間達夫「伊能忠敬、旅先で方位や緯度測定」会報57号
- ・細井広沢『秘伝地域図法大全書』（国会図書館デジタルコレクション）

伊能大図の復元について

星 楚 由 尚

伊能忠敬とその測量隊が作成した「大日本沿海輿地全図」は、幕府に提出された後、明治維新後は、明治政府が管理するところとなったが、明治6年の皇居の火事により焼失した。伊能家に保存されていた控図も明治政府に提出され、国家機関により模写図が作成された後、関東大震災により焼失したとされている。

伊能忠敬とその測量隊が作成したいわゆる伊能図は、その製作過程により正本、副本、稿本、写本及び模写本に分類されている（渡辺、2000）。渡辺（2000）によれば、伊能測量隊が針突法により作成した地図のうち、幕府に提出された地図が正本であり、その他が副本である。写本は、正本又は副本から伊能測量隊以外により複製された地図であり、模写本は、明治期以降に伊能家控図から模写されたものを指している。稿本は、伊能測量隊の作成によるが、正本及び副本の原稿図など作成途上のものを指している。

大名等からの要望により献呈した伊能図が現存しているが、大図（縮尺 1:36000）、中図（縮尺 1:216000）及び小図（1:432000）から成る伊能図のうち、大図は、毛利藩に献呈した副本である「御両国測量絵図」（「毛利大図」と称する）及び平戸藩に献呈した平戸藩関係領域の副本*1（「松浦大図」と称する）のほか、第七次測量（第一次九州測量）の後に作成した九州沿海図大図、伊豆七島、天橋立、琵琶湖など特定地域に限られた地図のほか、第一次測量の蝦夷地の大図、東日本の測量終了後

にまとめた東日本の大図等*2が現存するに過ぎず、伊能大図の全貌は、これらの副本と明治初期に陸軍、海軍及び内務省により模写され、現代に伝わった地図により窺い知るほかにない。

このため、伊能大図について検証し、それに基づいて地理学的、地図学的検討を行うおうとすると、模写図から推定しなければならないという大きな問題が発生する。そのことは当然のことであるにも拘わらず、ややもすると忘却されたまま、模写図に基づいて伊能測量の測地学・地図学的検討が行われ、結論を得ることになりかねない。この問題について、改めて伊能図研究の課題として論じてみたい。

1. 模写図の意味とその限界

(1) 現存する伊能大図の模写図

現存する伊能大図の模写図は、明治初期に国家機関により模写されたものである。それらの模写図は、国立国会図書館に所蔵される内務省系統の大図（「国会大図」と称する）、アメリカ議会図書館等に所蔵される陸軍系統の大図（「アメリカ大図」と称する）、海上保安庁海洋情報部に所蔵される海軍系統の大図（「海保大図」と称する）の3系統の大図である。

内務省系統の模写図については、鈴木（2018）によると、工部省*3は、1873（明治6）年から伊能家の控図の模写を開始した。この模写図は、国立国会図書館に現存する関東地方を中心とする伊能大図模写図に当たる可能性があるが、そのことを裏付ける史料はない。また、1876（明治9）年には、内務省地理寮量地課による模写*4、1882（明治15）年には、内務省地理局地誌課により大図「ニ

枚の模写が行われている（鈴木、2018）。現存する国立国会図書館所蔵の模写図との関係は不明である。

陸軍参謀局が1876（明治9）年に伊能図を模写したことは、『陸地測量部沿革誌』に記載されている。この模写図のうち、大図については、昭和18年参謀本部陸地測量部発行の「研究蒐録 地図」に、「伊能忠敬先生測量叢話」との表題の記事があり、大図模写図24枚が陸地測量部に所蔵されていたことが分かるが（菱山、2018）、その後戦時の混乱を挟み所在不明となっていた。この大図模写図のうち207枚がアメリカ議会図書館に所蔵されていることが2001（平成13）年に明らかとなった（渡辺、2001）。

海軍水路局は、1877（明治10）年に内務省地理局から伊能家の控図を借り受けて謄写*5を開始し、翌11年1月に伊能図300余図の模写を完了した。しかし、これらの模写図は、関東大震災によりすべて焼失した。一方、明治13年から明治20年代の前半に、これらの模写図からさらに業務参考用に縮図として模写された大図があり、海上保安庁海洋情報部に現存している。（今井、2018）

(2) 伊能大図模写図の特徴

伊能大図模写図については、これまでも閲覧の機会があり、地図目録、図録の出版などが行われ、さまざまにその特徴が論ぜられている。ここでは、これまでに各模写図について判明していることを簡単にまとめておく。

① 内務省系統の模写図

国立国会図書館が所蔵する大図模写図は、南東北、関東一円、甲信越駿豆及び伊豆七島にわたる44図幅が存在する。いずれも色彩が施され、測線

は朱色で明瞭に模写されている。しかし、原図では直線が折点で結ばれていたはずであるが、模写によりかなり丸められている。集落は家形の符号の集合として描かれ、集落地名とともに領主大名、知行旗本の姓名が記されている。山景や耕地がそれぞれ緑色と褐色の系統の色で塗色され、樹木などもデザイン的に描かれている。交會法による目当てとなった山など著名な山は、スケッチした姿で描かれ、火山の露出した岩石は茶色に塗色されている。また、城郭が描かれ、城主名も記されている。宿駅には朱の円記号、天測地点には朱の星印、湊には朱の舟形記号、有名な寺社の覺が描かれている。コンパスローズも丁寧に模写されており、明治政府に献納された伊能家の控図をできるだけ原図に近い表現で模写したものと考えられる。平成9年気象庁において鈴木純子氏により見いだされ、気象庁から国会図書館に移管されたものである。

②陸軍系統の模写図

アメリカ議会図書館がその大部分を所蔵する陸軍系統の模写図は、陸地測量部沿革誌に明治9年に伊能家控図の模写を始めたことが記されており、明治初期に陸軍参謀局において模写され、その後参謀本部陸地測量部に受け継がれたものである。前述したように、戦前には陸地測量部に存在していたことが記録にあるが、平成13年に故渡辺一郎氏がアメリカの議会図書館に200図幅存在することを確認した。アメリカに渡った経緯は不明ながら、アメリカ議会図書館では重要資料として保管している。

陸軍系統の模写図の大部分を占めるアメリカ議会図書館所蔵の大幅は、測線の朱色、海や川の藍

色、砂浜の黄色の塗色はあるが、他は墨色で、色彩に乏しい。但し、北海道の図（箱館・松前の図を除く）には、「第七軍管北海道之圖」の表題がある。また箱館、松前以外の図は山景を緑に塗るなど彩色されている。北海道以外は、大阪、神戸、紀伊半島沿岸部の一部のほか浜松の図が彩色されているのが例外である。浜松の図には模写中途のコンパスローズが描かれている。

陸軍系統の模写図は、測線の複写が重点に置かれ、城郭や寺社の覺はやや画一的に描かれているが、それぞれ描き方は少しずつ異なる。山景は、北海道等の図を除き、山の輪郭線のみで、交會法の目標とした山の中でも顕著な山は、その山容をスケッチにより表現している。集落は家並みの表現ではなく、いわゆる黒抹の描示となっている。

一方、これら模写図のうちでも北海道、浜松、大阪、神戸及び紀伊半島の一部の図は、山景は緑色に塗色され、樹木を示す点描がある。平地は緑色と褐色の点描で示され、湿原や台地を表現しているものと思われる。海岸も砂浜と磯浜を区別して、砂浜は黄色に塗られ、磯浜は焦げ茶色で岩礁を表現している。しかし、内務省系統の大幅に比較すると塗色や山景の描写などは粗雑な印象を受ける。

これら模写図には鉛筆で方眼線が描き入れられている。明治政府は、明治初期に近代的国家地図の整備を目指したが、経費と時間を考慮して伊能図を利用した。方眼線はその痕跡であろう。

③海軍系統の模写図

海軍水路局は、海図の整備に利用するため伊能大幅を模写した。海上保安庁海洋情報部には、「一枚の「伊能図騰写図」が所蔵されている。その模写

の態様はさまざまで、縮尺は2分の1に縮小されているものが多く、彩色されているものもあるが、墨一色のものもあり、山景は、いわゆるケバ式の表現となっているものもある。また、地名が省略され、測線も描かれていないものなど多様である。中でも、東九州の図幅は、原寸で彩色され、国会図書館所蔵の内務省系統の模写図と同様の模写図となっている。

2. 伊能大幅の復元

前述したように、伊能大幅は、幕府に上呈された大日本沿海輿地全図の骨格をなす大幅（正本大幅と称する）が明治6年に焼失し、その後、内閣文庫から帝国大学に貸し出されていた伊能家の控図も関東大震災により焼失したとされており、原本が存在せず、どのような地図であったのか詳細は不明であった。伊能家から伊能忠敬記念館に寄贈された第四次測量までの蝦夷地及び東日本の大幅、第七次測量（九州第一次測量）の終了後に作成された九州沿海図大幅、その他毛利大幅、松浦大幅のほか個別の大幅等から正本大幅の全体像を類推するしかなかった。

ところが、上記の内務省系統の模写図とされる国会大幅の存在が明らかとなり、色彩も模写されていたため、この模写図が正本大幅の姿の手掛かりとして注目されるようになった。しかし、国会大幅は、東北地方南部と関東地方を中心とする地域のみで図であり、毛利大幅、松浦大幅が存在する地域以外の正本大幅の姿については手掛かりがなかった。そのような中で、故渡辺一郎氏がアメリカ議会図書館に保存されていた、旧陸軍が模写したいわゆるアメリカ大幅を見いだし、伊能大

図24 図幅のうち207図幅までの大図の副本と模写図が揃うことになった。その後、海上保安庁海洋情報部と国立歴史民俗博物館に残りの7図幅の模写図（海保大図*6と歴博大図*7）が存在することが明らかとなり、伊能大図の全貌を知る手掛かりを得られることとなった。

折しも、西暦2000年に伊能測量200年を迎え、伊能忠敬を顕彰する事業が各地で行われることとなり、伊能図を復元して床に展示することが計画された。伊能忠敬直系の子孫に当たる洋画家伊能洋氏の指導により、ほぼ無彩色のアメリカ大図と海保大図に国会大図を模範とした着色や補描を加え、「復元伊能大図」を原寸大で作製し、平成16年から各地で床展示を行った。このときの「復元伊能大図」は、現在国土地理院が所有し、一般財団法人日本地図センターが管理して求めに応じて貸し出しも行われているようである。

その後、平成18（2006）年に伊能大図の副本、模写本から成る「伊能大図総覧」が河出書房新社から刊行された。その後、故渡辺一郎氏の発案により、日本写真印刷株式会社（現名NTSSA株式会社）が「伊能大図総覧」に収載された伊能大図を主体とする伊能大図の原寸大パネルを作製した。このパネルは、副本である毛利大図と松浦大図のほか、色彩が模写されている北海道のアメリカ大図、関東一円の国会大図、歴博大図及び海保大図、彩色のないアメリカ大図と海保大図にはコンピュータ技術による彩色加工を施してデジタル化したデータから作成されている。NTSSA株式会社は、国会大図などを模範としてアメリカ大図に模写されている山景の外形線などを手掛かりにコンピュータ技術により彩色し、測線の朱色の強調なども

行い、得られたデジタルデータから特殊な素材の媒体に印刷し、パネル化したものである。このパネルを体育館などの床に敷き詰めて展示する「伊能大図フロア展」が計画され、平成21年から27年の足掛け7年間にわたり全国各地28ヶ所でのフロア展が実施された。

このとき床展示された伊能大図パネルは、「完全復元伊能図」と称され、東京国立博物館所蔵の伊能小図とNTSSA株式会社が所蔵の伊能中図（フランス中図と称されている）のデジタル複製図とともに展示された。現在は、香取市の所蔵となり、伊能忠敬記念館の管理下にある。

さらに、故渡辺一郎氏によりコンピュータ復元技術により、「令和の伊能図」と名付けた復元図の作成が計画され、横溝高一氏を中心に制作が進み、一部の完成を見ている。

3. 復元の問題点

伊能図の正本と控図は焼失し、原稿図から針突法によって作成された副本も数少なく、大図については、毛利大図と松浦大図のほか、測量途次の伊能測量隊作成の地図等は存在するが、最終上呈版「大日本沿海輿地全図」の副本は存在しない。そのような状況の中で伊能大図の正本即ち「大日本沿海輿地全図」大図の姿を推測・復元し、正本に限りなく近づけて復元することは至難の業である。

これまで伊能測量200年を契機として伊能忠敬の業績を顕彰し、その成果である伊能図の理解を高めるための普及活動の一環として復元図が床展示のために製作された。これらは、伊能忠敬の業績に対する一般の人々の理解を高めた点では高く評

価されるべきであるが、復元図と称するものが複数作成され、なおかつ「完全復元伊能大図」*8などと称されたことにより、伊能図の実像に対する誤解を招きかねないことも危惧される。

復元の模範とされた国会大図もあくまで模写図であり、色彩も模写されているが、伊能測量隊の手になる第7次測量の成果に基づいて描かれた「九州沿海大図」に比較すると、色彩表現の丁寧さが異なる。従って、復元図については、将来誤解を発生させないよう、その製作過程についての詳しい記録とどのような目的から作成されたものであるか明確に記したものを残す必要がある。

伊能図の作製過程による分類、即ち「正本」、「副本」、「写本」、「模写本」及び「稿本」の分類は、見直す必要があるだろう。特に、「正本」と「副本」の別については、疑問もある。「正本」は伊能図の原本であり、「副本」は「正本」から伊能測量隊の隊員を中心に針突法により複製物として作成されたもの、先入観がある。しかし、渡辺（2000）は、「正本」と「副本」は、双方とも針突法で同時に作成されたものであることを述べており、大図の場合は、下図即ち原稿図を集成した寄図（原稿図）から針突法により複数の地図が作成されたはずであり、中図・小図の場合も座標値に基づいたか図解法によつたかは別として、下図*9即ち原稿図が作成され、針突法により複数の地図が作成されたと考えられる。従って、「正本」と「副本」に原図―複製図の関係はなく、「正本」、「副本」ともに一次的な清絵図であるとも考えられる。その場合、「大日本沿海輿地全図」の正本と言われるものは、原稿図から針突法により作成された複数の地図のうち、その提出先に応じて最も丁寧に仕上げられた地図であると

言えるであろう*10。

伊能図の復元図を作成しようとする試みは、伊能忠敬及び伊能図の普及には貢献するものであり、その労は多とするものであるが、今後新たな復元図を作成する場合は、上述したこれまでの伊能図の分類に関する疑問や伊能図の作製過程に関する考察を十分に考慮した上で進められていくことを期待する。

注

*1「御両国測量絵図」は、周防・長門の範囲を描いた大図の副本である。山口県文書館が所蔵している。平戸藩関係領域の副本は、平戸藩主松浦静山の求めに応じて献呈したもので、松浦から長崎、壹岐、五島を描いている。平戸市の松浦史料博物館に所蔵されている。

*2これらの大図のうち、九州沿海図及び第一次測量の蝦夷地の大図は、東京国立博物館に所蔵され、東日本の測量終了後の大図及び伊豆七島、天橋立、琵琶湖などの地図は、伊能忠敬記念館に所蔵されている。

*3工部省測量司は、1874(明治7)年に内務省に移管され、地理寮となる。

*4鈴木(2018)によると、関八州大三角測量用ではないかという。

*5当時海軍水路局では、地図の模写を謄写と称していた。

*6海保大図は、12号(稚内)、133号(京都)、157号(呉・今治)及び164号(福山・尾道)である。12号は、海岸線と一致する測線は墨色であり、内陸の測線と宿駅記号のみ朱色である。133号は、測

線は朱色であるが、その他は墨色である。両図ともケバ式の山地表現である。157号は、彩色されているが、地名が全く記載されていない部分が多い。164号は、測線が描かれておらず、地名も非常に少ない。本来伊能図には描かれないう路が記入されている。

*7歴博大図は、34号(江指)と35号(奥尻島)で、アメリカ大図と同じく陸軍系統の模写図である。彩色されている。

*8全国各地で伊能図の床展示を行った際、コンピュータ技術によりアメリカ大図などを加工し復元図を作成したが、展示会の広報宣伝活動に資するために「完全復元伊能大図」と称した。これについては、如何に集客のためとは言え、筆者もこの名称には加担しているので、現在となつてみると、忸怩たるものがあり、反省点である。

*9東京大学総合図書館に所蔵されている「測地原稿図」が中図・小図の下図である。(渡辺 2003)

*10 渡辺(2000)もそのように述べている。

引用文献

- 今井健三(2018)：水路部における伊能図謄写図作成の経緯とその利用 地図 56-1 59-64
鈴木純子ほか(2008)：海上保安庁海洋情報部所蔵「伊能図謄写図」 地図 46-1 1-12
鈴木純子(2018)：伊能図利用の軌跡 地図 56-1 9-23
菱山剛秀(2018)：陸地測量部における伊能図の利用 地図 56-1 65-70
渡辺一郎(2000)「伊能忠敬の地図をよむ」 河出書房新社

渡辺一郎(2001)：米国議会図書館で伊能大図二〇

六枚を発見 伊能忠敬研究 26号 6-12

渡辺一郎(2003)：東大総合図書館蔵伊能忠敬測地

原図 伊能忠敬研究 32 30-33

針穴のある模写図

左の図は明治9年頃陸軍が模写した伊能中図の大阪、淀川河口部である。海岸線をよく見ると、赤い測線の曲がり角に小さな点(図中の○内参照)が見える。模写したときの針穴である。明治時代の模写図に針穴がある図は珍しい。



「伊能中図」中部近畿 国土地理院蔵

元図は確認できていないが、元図の針穴を利用して測線を移写したと考えられ、極細の線とともに、測線の位置を正確に写しとろうとした担当者の姿勢が感じられる。(編集子)

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第二十八回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

監修 渡辺一郎

編著 井上辰男

【第八次測量】（九州第二次） 五島列島く長崎 自 文化10年5月24日 至 文化10年8月18日

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
--------	------	-----	--------	-----	---------	------

【本隊】

文化10年5月	（1813）					
24	（22）	○五島列島 宇久島 平村	同 佐世保市	油屋藤助 山田紋九郎 亀屋与左衛門	平村逗留測。【伊能他四名】宇久島内平村、宇松原、城ノ岳道追分より左山沿海、左に当村鎮守神島大明神あり、砂浜、鯨組の納屋場（当春大村領川棚村浅井多兵衛鯨捕す、不漁にて鯨一本も不取得と云）、測所を歴て、字浜蔵町、字浜、字堀子、字塔ヶ崎、字力タノ脇、字長崎、字福ノ下、字ク浦、右沖に深瀬遠測、字蔵ノ崎、字蔵ノ首にて沿海打止。小敷瀬（大中小三瀬、何連も壁立也、大難所遠測）。【今泉他三名】宇久島平村、字松原より芽場崎、小浜村、三笠崎、小浜村枝浦ノ浦、水葉崎、権現崎、小浜村枝下山、江口崎、枝福浦、神ノ浦村松崎、宇白浜を歴て満切島へ渡り、松ヶ鼻小島一周測。地方宇白浜より初、神ノ浦町入江奥、平村道追分に終る。外に平村持前子島一周。恒星測定	二〇六
25	（23）	同 神ノ浦	同 佐世保市	本陣地役泊四郎左衛門 泊丈右衛門 渋谷富蔵 唐津屋長兵衛 肥前屋甚太郎	【伊能他四名】、平村字蔵ノ首より大田江村、字枕ノ浦、字牧崎（鯨見あり）、字対馬瀬、字ツブラ崎、左に姫大明神小社あり、木場村、字乙女崎、字小浦、字千崎（鯨見あり）、字ラビヤ崎、字千崎浦（左に鮪納屋有）、飯良村、右に瀬続唐人瀬遠測、黒崎にて左右合測。【今泉他三名】（佐助病氣）、神ノ浦村町人家前、平村追分より右山沿海、同所止宿本陣前を歴て、測所迄打上、それより山印を残迄測る。此より裏海へ横切、切印を残、又山印より薬師崎を廻て横切、切印に繋、飯良村、唐子崎、枝芋畑、飯良本村、塚崎、飯良村、宇宮ノ首、飯良崎（幟に繋）、舟隠シ鼻、鴨浦、木場村、黒崎にて左右両手合測。恒星測定	二〇六

27	26	宿泊日・旧暦
(25)	(24)	(西暦)
同	小値賀島 笛吹村	宿泊地
同	長崎県小値賀町	現・市町村名
同	本陣庄屋高量右衛門 小田八太郎 浜田屋多作 畑村作平治	宿泊宅
<p>【門谷他三名】宇久島属手羅島を測。宇曾根崎 織より右山測、ハイ目崎、立神瀬(大岩)、移 リ瀬を歴て裏海へ横切、字ツブラ浜迄測る。移 リ瀬より海苔瀬鼻を歴て海苔瀬一周測、立瀬遠 測、サンハラ鼻、クダラ崎、ツブラ崎、字ツブ ラ浜に繋、それよりツ印を残、此より小島へ渡 リ一周測。ツ印よりウン崎、蟹瀬鼻、此より満 切島を回て蟹瀬鼻に繋、満切小島一周測。それ より曾根崎織に繋終る。【伊能他四名】小値賀 島の内、柳村持納島を測。字広浦人家前より右 山に測、ハカノ崎、アコ崎、永石浦を歴て此よ リ山越横切向海辺裸瀬浦へ出る、又永石浦より カボセ崎、裸瀬崎(織に繋)、裸瀬浦(横切) に繋、大河原崎又カツカ崎(織に繋)、下里 浦、宮崎、右に若宮大明神あり、広浦に繋終 る。若宮丸昼休。それより小値賀島内、柳村字 泊浦、笛吹村道追分より右山沿海、馬籠崎、橋 ノ浜、前方村、堀切を歴て此より向海へ横切、 横印を残終。それより乗船。</p>		特記・天体観測
<p>笛吹逗留測。【伊能他四名】小値賀島前方村、 堀口より右山沿海、鳥山崎、猪崎、御神楽崎、 里ノ前、唐見崎、字唐見、右に若宮大明神社あ り、クスクリ鼻、堀切、横印に繋。右若宮大明 神社、字鳥山、右に真言宗鳥山満福寺、前方本 村、字筒井、右に志自岐大明神の社、字相津、 右上に鎮守神島大明神。値賀ノ浦、トヤ崎、殿 崎、赤浜滝、瀬貝崎、池ノ下にて沿海打止。 【門谷他三名】小値賀島の属島を測。笛吹村持 小黒島、黒島(横切一ヶ所)、産島、大島一周 測。恒星測定</p>	二〇六	大図番号

6 *		5 *		4 *		3 *	2 *	1 *	文化10年6月 (1813)	宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号	
(3)	伊能	(2)	伊能	(71)	伊能	(30)	(29)	(628)		(27)	小休						
野崎島 野崎	小値賀島 笛吹村	野崎島 野崎	小値賀島 笛吹村	野崎島 野崎	小値賀島 笛吹村	同	同	小値賀島 笛吹村		小値賀島 笛吹村	小値賀島 柳本村						
同	同	同	同	同	同	同	同	長崎県小値賀町		同	同						
神主岩坪三善 神主隠宅岩坪一善	本陣庄屋高量右衛門	神主岩坪三善 神主隠宅岩坪一善	本陣庄屋高量右衛門	神主岩坪三善 神主隠宅岩坪一善	本陣庄屋高量右衛門	同	同	本陣庄屋高量右衛門 浜田屋多作 畑村作平治		安川屋太郎右衛門							
雨天逗留。		雨天逗留。		雨天逗留。		雨天逗留。		雨天逗留。		笛吹逗留測。乗船、小値賀島属赤島一周測。それより又乗船、小値賀島柳村の内、字友尻より沿海測、五凌浦、大長崎、小長崎、泊浦に繋、小値賀島の一週終。此より笛吹道を測。柳本村より笛吹村、百間馬場、大道、宮ノ脇、左に六社大明神、北目街道、街道札場通、海辺波戸に繋。【門谷他三名】小値賀島属島を測。藪小路木島、大島の内、コロ島、斑島一周測。江戸行書状平戸へ向出す。		笛吹逗留測。【永井他三名】、前方村字池ノ下より沿海、笛吹村、右天満宮社あり、字船瀬、柳田、笛吹浦、新町崎小路、泊り浦道追分、浦ノ浜を歴て測所打上げ、浦町、左浄土宗向峯山阿弥陀寺、笛吹村字河ノ久保、測所迄測る。又浦ノ浜より沿海測、右に郡代役所、小浜、汐井崎、汐井場、雷崎（幟に繋）、笛崎（幟繋）、男島渡口を歴て男島一周測。又地方渡口より平越鼻、枝大浦、柳村、前浜江川、竹崎、矢石崎、釜田崎、馬渡、斑島渡口、外崎、浜崎、友尻浦にて沿海打止。此より山越横切裏海辺江川に繋。【門谷他三名】小値賀島属島を測。藪小路木島、大島の内、コロ島、斑島一周測。江戸行書状平戸へ向出す。		二〇六		二〇六	

宿泊日・旧暦	(西暦)		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
7 *	伊能	小値賀島 笛吹村	同 小値賀町	同 小値賀町	本陣庄屋高量右衛門				
8 *	小休	野崎島 野崎	同 小値賀町	野崎島字黒瀬より右山沿海順測、字ケセデン鼻、左沖にケブタ瀬遠測、矢ノ浦、高崎、小森崎に繫。それより昨日の逆測場所を飛で、字白浜より右山順測、小和田崎、小一ツ瀬崎、大一ツ瀬崎(左に大一ツ瀬岩遠測)、紅石に繫、野崎島一周終。それより乗船。	野崎島一周終。それより乗船。	野崎島一周終。それより乗船。	野崎島一周終。それより乗船。	二〇六	
9 *	(6)	同	同	同	同	同	同	二〇六	
10 *	(7)	中通島 立串村	同 新上五島町	竈主柴田徳太郎 諸国屋幸左衛門	立串村(古名藤頭塩竈)人家下より、右に乙宮明神小社あり、乙印を残、此より山越横切向海辺後浜に繫。又乙印より沿海、小串村、江川、江川浜、後浜、字縊越浜を歴て山越横切向海辺小串浜迄測る。又縊越浜よりアクシリ鼻を歴て小島へ渡、小串村持小島一周測。又地方アクシリ鼻より、小串村人家下、横切小串浜に繫、江ノ浦、大浦、三番崎、大浦仙崎、行仙壇場、似首村、平瀬鼻、魚待崎(鮪納屋一軒)、呂抗崎、同村蛭子神前、同村人家下、西手の横切に繫、馬籠浦、鯨供養、榎津村、枝丸尾、風ノ浦、門松崎に繫。此より榎津村持竹ノ子島へ渡り一周測。又門松崎より沿海、榎津村測所迄測る。それより仕越、浦村枝桑村、右の方に弁天の社、勘定岩、福崎浦村(古名魚ノ目)人家下、右に祖父君宮、堀切(西の手青方村より横切)に繫、赤ノ瀬鼻、領界(富江領浦村、福江領有川村)にて打止。	立串村測所打止。	立串村測所打止。	立串村測所打止。	二〇六
11 *	(8)	同 榎津村	同 新上五島町	地侍川口成作 庄屋西村本右衛門	立串村(古名藤頭塩竈)人家下より、右に乙宮明神小社あり、乙印を残、此より山越横切向海辺後浜に繫。又乙印より沿海、小串村、江川、江川浜、後浜、字縊越浜を歴て山越横切向海辺小串浜迄測る。又縊越浜よりアクシリ鼻を歴て小島へ渡、小串村持小島一周測。又地方アクシリ鼻より、小串村人家下、横切小串浜に繫、江ノ浦、大浦、三番崎、大浦仙崎、行仙壇場、似首村、平瀬鼻、魚待崎(鮪納屋一軒)、呂抗崎、同村蛭子神前、同村人家下、西手の横切に繫、馬籠浦、鯨供養、榎津村、枝丸尾、風ノ浦、門松崎に繫。此より榎津村持竹ノ子島へ渡り一周測。又門松崎より沿海、榎津村測所迄測る。それより仕越、浦村枝桑村、右の方に弁天の社、勘定岩、福崎浦村(古名魚ノ目)人家下、右に祖父君宮、堀切(西の手青方村より横切)に繫、赤ノ瀬鼻、領界(富江領浦村、福江領有川村)にて打止。	立串村測所打止。	立串村測所打止。	立串村測所打止。	二〇六

13*	12*	宿泊日・旧暦
(10)	(9)	(西暦)
同 友栖村	同 有川村	宿泊地
同 新上五島町	同 新上五島町	現・市町村名
本陣肝煎吉川平左衛門 浦役鶴之助 辰之助	下有川会所 預主福田兵右衛門 板屋太三治	宿泊宅
<p>有川村止宿入口より沿海測、字上り町、(当村の鎮守祖母君大明神)、字鴻ノ池、船津横切を 残、小島渡口を歴て小島へ渡り一周測。又地方 渡口より、博多網代を歴て山越横切向海辺横浦 へ出る。又博多網代より中串崎、鯨ヶ浦、満切 真中へ十印を残。此より鯨ヶ浦出鼻回、十印に 繋、横浦に繋、後浜鯨納屋(鯨組は当村代官平 田群治、去冬より此春迄鯨十一本を取と)を歴 て、人家の間を横切、向海辺船津に繋。又後浜 鯨納屋より神子島渡り口を歴て神子島へ渡り一 周測、松生山頂に弁天の社有)。又地方渡り口 より深浦、赤崎浦、赤崎、枝小河原、野縊浦を 歴て野縊横切向海辺、黒崎浦へ出る。又野縊浦 より野縊崎、黒崎、黒崎浦に繋、浜奈浦、枝赤 尾、瞽女崎、小櫃浦、銭亀崎、マブシ浦、マブ シ崎、堂ヶ浦、枝友栖村、豊ノ迫、亀甲浦、水 ノ浦、孕瀬戸、鏡山、穴口鼻、頭島より渡り残 穴印に繋、鼓崎、箸崎、干切島遠測、枝友栖村 人家下測所に打止。恒星測定</p>		<p>有川村字赤ノ瀬鼻より沿海測、右に潮目宮、枝 七目、浜河原、大和田崎、砂浜字蛤を歴て山 間横切、岩瀬浦村、枝太ノ浦、中ノ平、向海 辺、太ノ浦入江奥へ出、又有川村字蛤より初、 マ印迄測る。此より横切向海辺、枝茂串浦へ出 る、又マ印より、鏡瀬、長瀬遠測、味山崎、茂 串浦横切に繋、樫ノ久保、三本松、鰐口川尻、 有川村字下有川、止宿入口打止、測所へ打上。 【小手分】有川村枝赤尾村持野案中島、山案中 島、轆轤島一周測。有川村枝友栖村持頭島を 測。仏崎より右山測、カタフツノ鼻(幟に 繋)、雲閣箸崎、葛籠林崎、撫箸崎、鼻操崎、 カジリ黒箸崎(幟に繋)、古田浜、孕ノ瀬戸を 歴て地方へ渡を取る。地方へ穴印を残、浜浦、 赤尾村、白箸崎、平四郎浜、三本松崎、友栖 村、三年ヶ浦、仏崎初幟に繋終る。恒星測定。</p>
二〇六	二〇六	大図番号

16 *	15 *	14 *	宿泊日・旧暦
(13)	(12)	(11)	(西暦)
枕島 枕島村本竈	中通島 岩瀬浦村	同 太ノ浦村	宿泊地
同 五島市	長崎県新上五島町	同 新上五島町	現・市町村名
本陣桑原寿兵衛 地役桑原福右衛門 町人桑原甚兵衛	本陣会所 預主代官坪井聡助 浦役近藤福左衛門	本陣浦役坪井三之助 浦役近藤定太郎 郷侍坪井繁弥	宿泊宅
岩瀬浦村字ミサゴ崎より沿海測、右に志自岐、羽黒大権現合社あり、小川尻、川上に宇盧山滝と云、禪宗盧山寺あり、岩瀬浦村人家下、口網代浦、網代崎、見付島二ヶ所遠測、片岩崎、外河原浦、内河原浦、須崎浦帆上ヶ浦、帆上ヶ崎、神名崎、枝奈良尾村、福見崎、福見、平瀬遠測、蛇崎、高タビ浦、大奈良尾納屋下(紀州より出張の上普請の鰯納屋あり)、波戸石垣に繋。【小手分】大奈良尾納屋下、石垣より金山本、竿崎出鼻を回、竿崎本に繋、満浦、竿崎、奈良尾村、水垂鼻、丸瀬崎、満浦、竿崎至、岩瀬浦村枝奈良尾村、宿ノ浦界に繋終る。	サゴ崎にて打止終。 島、畑島一周測。此より地方へ移、岩瀬浦村枝神ノ浦字七石崎より沿海、船隠浦、元井出浦、干切鼻本、干切鼻を回て干切鼻本に繋、商人崎、白辺田崎、辻ノ鼻、浜串浦、岩瀬浦村字ミサゴ崎にて打止終。	友栖村打止より恵比寿崎、(左に地ノ小島、中ノ小島、沖小島あり。各島遠測)、大友栖浦、女崎、立崎、右に羽黒大権現社あり、枝江ノ浜、満堂鼻、高瀬崎、左に相ノ島(福江、大村)領論所遠測、潮合崎、岩瀬浦村枝大田、藤内崎、大河原、大河原崎、小河原浦、百貫浦、恵比須崎、右に志自岐、羽黒両合社(福江侯建立)、枝大田人家下に繋終。【小手分】岩瀬浦村枝大田村人家下より沿海、権現崎、南原浜、籠崎、枝太ノ浦村、鹿子崎、鹿子浦、塔崎、水垂フツボ浦鼻、アゼツ鼻、(右に羽黒小社あり)、畔津、松葉崎にて打止。	特記・天体観測
二〇七	二〇六	二〇六	大図番号

宿泊日・旧暦	17 *	18 *	19 *	20 *
(西暦)	(14)	(15)	(16)	(17)
宿泊地	同	同	同	奈留島 若狭ヶ浦(浦村)
現・市町村名	同	同	同	同 五島市
宿泊宅	同	同	同	本陣会所 代官役荒木金次 浦役久保甚兵衛
特記・天体観測	<p>枕島逗留測。枕島内伊富貴村宇イノ小島本より右山沿海、坊主瀬、伊富貴村人家下、釜蓋崎、毛吹浦、野崎浦、野崎堀切浦を歴て山越横切向海辺、和田浜に出る、又堀切より縊ノ浦、越縊浦、竹ノ浦、虎瀬崎、(右枕島村人家下)、田崎浦、池崎、仏崎、磯瀬にて沿海打止。</p> <p>枕島裏手は測量不相成、見合の所終日大風、殊に絶壁に付不測、逗留。</p>	<p>枕島逗留測。枕島の後手は浪高にて測不成。津婦羅島を測。(此島福江領富江領論島故、測量六ヶ敷に付、此方手にて測量致候間、両領より手伝人足、小船諸器持人足、半分宛差出候様、両領差添出役中、並両領村役人も罷出候に不及、只双方より案内一人宛差出候様申渡候て測)。字大石織より右山測、飛瀬崎、横畑、池ノ下上鼻絶壁(福江領にては堅濤、富江領にては唐人石と云)、デノマエ浜、字大石、初織に繋、津婦羅島一周終。それより(福江領にて大島、富江領にて椎木島。即論島)測遠幟より(福江領にて落泊、富江領にて白浜)右島一周測。中小島(即論島)一周測。二子島(即論島)、大絶壁(南西風にて波高、舟難寄、見切て八分通程測)。恒星測定</p>	<p>枕島本竈出立。枕島内字磯浜より(此より海岸大絶壁)、小河原、竹ノ尻、葦ノ浦、(右阿波国より出張の網納屋あり)、鷹ノ巣離瀬本を歴て鷹ノ巣離瀬片測。又離瀬本より鷹ノ巣、和田浦に繋、千貫瀬(遠測)、海士女子崎、海士女子浦、瀬黒崎、穴ノ鼻、ヲコ瀬(下、中、上、遠測)、浦ノ浜、池ノ小島(遠測)、押通ノ小島元干切を歴て此より小島片打、又元干切より、平瀬遠測、ユイノ小島出鼻元横切、ユイノ小島鼻に繋、枕島一周済。それより乗船。</p>	二〇六
大図番号	二〇七	二〇七	二〇七	二〇六

- 37 -

27 *		26 *		25 *		24 *		宿泊日・旧暦
(24)	伊能	(23)	伊能	(22)	伊能	(21)	伊能	(西暦)
久賀島 田ノ浦	奈留島 若狭ヶ浦(浦村)	奈留島 若狭ヶ浦(浦村)	奈留島 若狭ヶ浦(浦村)	同 夏井村	同 夏井村	同 夏井村	同 夏井村	宿泊地
同 五島市	同 五島市	同 五島市	同 五島市	同 五島市	同 五島市	同 五島市	同 五島市	現・市町村名
山口全弥 藤七	本陣会所 代官役荒木金次	本陣会所 代官役荒木金次 浦役久保甚兵衛	本陣会所 代官役荒木金次	伊勢太郎 与左衛門 紋右衛門	伊勢太郎 与左衛門 紋右衛門	伊勢太郎 与左衛門 紋右衛門	本陣会所 代官役荒木金次	宿泊宅
伊能は残居。【今泉他三名】奈留島出立。出船、久賀島へ向かう。久賀島、字折紙崎より右山測、左立神瀬遠測、水垂鼻、赤崎、亀ノ首、枝蔵村を歴て、此より葦小島へ渡、葦小島一周測。又地方枝蔵村より、寺福見浦、平瀬崎(幟繫)、左沖に飛小島遠測、鴻泊崎、五輪、福見浦、福見崎にて沿海打止。それより乗船。恒星測定		伊能は残居。夏井村逗留測。夏井村人家下より左山沿海、左に天満宮社あり、右沖に能瀬遠測、熊鷹浦、鵜子島瀬戸、鵜ノ子島渡口に繫、沿海打止。此より絶壁波高船測不成。同村内宇柿ノ浦より右山沿海、大小田崎、後阿古木を歴て此より山越横切向海辺、字阿古木浦へ出る。又後阿古木より水ノ浦、カブシ瀬崎、枝船廻村持、観音崎、阿古木浦横切に繫、後柿浦に繫終る。【小手分】枝相ノ浦村属、葛島を測。字ミサゴ崎より左山測、白浜(測遠松に繫)、鼻先にて打止。此島外海辺は絶壁、波高船測ならず止。又舟廻村字後柿浦より右山沿海、船廻村人家下、ダキクチリ浜、一ツ瀬、ケヅガ小浦鼻、矢上鼻、矢上浦、一ツ枝崎を歴て此より矢上小島へ渡、船廻村持矢上小島一周測。又地方一ツ枝崎より折尾口浜、イチキラ崎にて沿海打止。それより乗船。		伊能は残居。夏井村逗留測。夏井村字鵜子島瀬戸より左山沿海、早房浦、丸瀬崎、梶羽、野首浦に繫。それより内洲大瀬、黒瀬崎、瀬ノ内、能瀬崎、虹隠浦、笠鼻に繫終。【小手分】枝相ノ浦村持葛島を測。字ミサゴ崎より右山沿海、網代浜、鷺瀬鼻、先鼻に繫、葛島一周終。同村持鵜ノ小島渡より瀬戸を渡り鵜ノ小島一周測。		伊能は残居。夏井村逗留測。夏井村字鵜子島瀬戸より左山沿海、早房浦、丸瀬崎、梶羽、野首浦に繫。それより内洲大瀬、黒瀬崎、瀬ノ内、能瀬崎、虹隠浦、笠鼻に繫終。【小手分】枝相ノ浦村持葛島を測。字ミサゴ崎より右山沿海、網代浜、鷺瀬鼻、先鼻に繫、葛島一周終。同村持鵜ノ小島渡より瀬戸を渡り鵜ノ小島一周測。		特記・天体観測
二〇七	二〇六	二〇六	二〇六	二〇六	二〇六	二〇六	二〇六	大図番号

5		4		3		2		6月1日	5月29日	【支隊】 坂部他四名	28 *		宿泊日・旧暦
坂部	(2)	(7 1)		(3 0)		(2 9)		28)	(6 2 7)		(2 5)	伊能	(西暦)
同 青方村	同 奈摩村	同		同		同		同	中通島 青方村	○五島内中通島西を測	久賀島 田ノ浦	奈留島 若狭ヶ浦(浦村)	宿泊地
同 新上五島町	同 新上五島町	同		同		同		同	同 新上五島町		同 五島市	同 五島市	現・市町村名
山下三郎右衛門	藤七	同		同		同		同	山下三郎右衛門 内野庄右衛門		山口全弥 藤七	本陣会所 代官役荒木金次	宿泊宅
青方村字鶴戸、同川尻より東海辺魚ノ目浦へ横切、浦村へ出、印を残、又奈摩村字畑崎より右山沿海逆測、枝網揚々、奈摩本村、浜熊川尻小流、字越首浜を歴て此より又東海辺似首村へ山越横切印を残、又字越首浜より剥崎鼻にて打止。		青方村逗留測。船崎村熊鷹鼻より右山沿海逆測、白水鼻、奈摩村、神崎、太神崎、神崎浦、アマ五郎鼻(大岩)、ヤガタメ鼻元を歴て、ヤガタメ鼻を測。又ヤガタメ鼻元より奈摩村入口、畑崎迄測る。外に祝言島の残を測。トシヤク岩より左山に測、大鋸崎に繋、祝言島一周終。		青方村逗留測。青方村魚ノ目追分より左山沿海、鶴戸川小流、相河村、緑上川小流、相河崎、今里村、字赤岩鼻迄測る。又、青方村・船崎村界より右山沿海逆測、船崎村、俣板鼻、垂見鼻、熊鷹鼻迄測る。大風波に付、止て島測。(船崎、青方、相河三ヶ村)持祝言島、遠測のトシヤク岩より右山測、浜泊、鋸崎、大鋸崎にて打止。		青方村逗留測。青方村字鶴戸海辺、鶴戸川尻、東魚ノ目道追分より右山沿海逆測、青方村海辺人家入口、青方本村字横網代、浦底浦、字大曾(此所に鮪鰯の納屋あり、紀州より出張して漁すと云)、青方村・船崎村界にて打止。		雨天逗留。	小値賀島笛吹浦出立。津和崎島、字戸楽崎より左山測、平瀬鼻、高鼻、荒和布島、黒崎、小島遠測、裸瀬、中知浦、ビシヤゴ瀬遠測、奈摩村枝曾根字江袋浜にて打止。それより乗船。	伊能は残居。久賀島逗留測。久賀島字福見崎より右山沿海、外河原、駒瀬鼻、忠太ヶ浦、針ノ耳、長浜、通瀬戸鼻(多々良島と云、此所赤瀬瀬戸と云、唐人通船場所と云)、ゴウゴフ崎、巢行鼻、杉尾浜、相曾根浦、鬼ヶ崎、夏越浦、田尻崎、右に医王権現社あり、殿口浦頭、枝田ノ浦字横網代、田ノ浦測所前打止。恒星測定	特記・天体観測	大図番号	
二〇六	二〇六	二〇六		二〇六		二〇六		二〇六	二〇六		二〇七	二〇六	

12	11	10	9	8	7	6	宿泊日・旧暦
(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(西暦)
若松島 若松村	同 浜野浦	同 飯ノ瀬戸	同	同 浜野浦	同	同 奈摩村	宿泊地
同 新上五島町	同 新上五島町	同 新上五島町	同	同 新上五島町	同	同 新上五島町	現・市町村名
入江祥平 荒木左右吉、外一軒	給人伊藤助左衛門 町人安川吉郎兵衛	田中庄左衛門 田中与一郎	同	給人伊藤助左衛門 町人安川吉郎兵衛	同	藤七	宿泊宅
浜野浦内今里村より道土肥へ横切、裏海道土肥浦、字地藏田迄測る。又同所浜、字四軒屋より左山沿海順測、字地藏田に繋、字仏崎、今里村、京崎、小島遠測、字高仏、松ヶ崎、福浦、字ゴウノ首に至て此より裏海へ横切、ガウノ首迄測る。又字ゴウノ首より赤崎、大串崎、雷鼻、ガウノ首に繋、松ヶ崎、荒川村、蔵ノ小島瀬戸を歴て二方領蔵ノ小島へ渡り一周測。	平戸領浜野浦内字小崎より左山沿海順測、ヤスガ浦、ヤヶ崎、浜泊、僧都ヶ浦、松ヶ崎、青木浦、白浜崎、黒崎、虻ノ浦、鷺瀬鼻、殿ノ浦、殿崎、浜野浦、枝道土肥村、字四軒屋、道土肥浦入江奥にて沿海打止。此より山越横切、浜野浦内三本松浜に繋終る。	浜野浦内福崎より左山沿海測、大崎鼻、串島瀬戸を歴て串島へ渡り左山に測、長崎鼻、大崎鼻、ビシヤゴ鼻、ビシヤゴ瀬遠測（大岩石）、串崎、小土居島遠測、土居ノ浦、浜泊浦を歴て串島一周測終る。又地方串島瀬戸より浜野浦枝飯ノ瀬戸、ネン崎、小島遠測、地小島遠測、ヤツデ浦、小崎鼻迄測。	浜野浦逗留測。平戸領浜野浦、字向納屋場より左山沿海測、字三本松、それより枝統村、浜野浦本村、恵比須崎、コウゴ崎、伊浦を歴て小島崎福崎にて打止。又浜野浦内析レ島一周測。又柏島一周測。	奈摩村海岸、浜熊川尻より青方村へ街道横切、青方村海辺人家入口に繋、又赤岩鼻より左山沿海順測、三ヶ之浦（平戸領は浜ノ浦枝に属、五島領は若松村枝宿ノ浦に属）、両領大入込の場殊に論地なり、今里浦（平戸、五島）二方領、同前権現崎、平岩鼻、字野首、宮崎、大崎、小崎、小島鼻、（平戸領一円）浜ノ浦、字向納屋場に打止終。	雨天逗留。	奈摩村逗留測。奈摩村枝曾根字江袋より右山沿海順測、大水鼻、碇鼻、枝曾根村、曾根崎、鬼河原浜、小島崎、剥崎鼻に繋終る。	特記・天体観測
二〇六	二〇六	二〇六	二〇六	二〇六	二〇六	二〇六	大図番号

宿泊日・旧暦	13	14	15	16
(西暦)	(10)	(11)	(12)	(13)
宿泊地	同	同	同	同
現・市町村名	同	同	同	同
宿泊宅	同	同	同	同
特記・天体観測	若松浦逗留測。五島中通島内、字下木戸より右山沿海逆測、但、東手西手の測界即村界、(岩瀬浦枝奈良尾、即福江領なり。若松村枝宿ノ浦、五島領)、小島鼻、鶴瀬遠測、イカルカ崎、棹浦(鮪納屋あり)、ズンギリ崎、米山鼻、此より桂島渡り、桂島一周測、他に外籠鼻、裸島一周測。	若松浦逗留測。五島福江領若松島内、字土居ノ浦、土居鼻より左山沿海、但白崎鼻難所、今日海静に付此所より初、福浦、長崎鼻、小福浦、長鼻、高崎、針ノ目下遠測(大岩)、小アダ浦、白崎、水垂崎、鳥ノ子島遠測(大岩)、殿ノ浦、殿崎、小加倉鼻にて打止。今日は終日大巖石也。	若松浦逗留測。下中島一周測。但若松島の内、下早崎より下中島へ引渡、下中島よりアザ丸島へ渡り一周測。下中島より渡り上ゲシヨク島、下ゲシヨク島一周測。又中通島の内、若松村枝宿ノ浦、字米山鼻桂島渡口より右山沿海逆測、鼻切鼻、ヲウチ浦、ヲウチ崎、此より荷ヒ島へ渡り一周測。ヲウチ崎より桐崎迄測る。此より大鹿島へ渡り一周測。桐崎より字キリ迄測る。此より桐小島へ渡り一周測。字キリより荒島渡口迄測る。此より荒島へ渡り一周測。荒島渡口より字古里、深浦、板ノ浦、板崎にて打止。	若松村逗留測。中通島、宿ノ浦地内板崎より右山逆測、椎木ベタ浦、築地崎、築地浦、榎浦、カセノ浦、竹ノ浦、針目ノ鼻、字小瀬戸迄測る。此より上中島へ渡り一周測、弥五郎カ蹴上ヶ島遠測。字小瀬戸より、ヲムカヒ浦、白河原浦、夷崎、ヘボノ園迄測る。此より京島へ渡り一周測。ヘボノ園より入道浦口迄測る。此より松中島へ渡り一周測。入道浦口より姥ヶ浦入江奥にて沿海終。外に姥ヶ浦より裏海横切、宿ノ浦内大浦迄測る。又坂部小手分測、宿ノ浦(地方)松ヶ鼻より八王島へ渡り一周測、コンテヒ島、ヤク丸島一周測。
大図番号	二〇六	二〇六	二〇六	二〇六

宿泊日・旧暦	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
21	(18)	同	同	同	二〇六
20	(17)	日之島 日之島村	同 新上五島町	入江憲蔵 今村長兵衛	二〇六
19	(16)	同	同	同	二〇六
18	(15)	同	同	同	二〇六
17	(14)	同	同	同	二〇六
<p>若松村逗留測。若松島内字小加倉鼻より左山沿海、七ツ山鼻、伊崎浦、檜木浦、島山崎、カウベ浦、下早崎、下中島渡口に繋、守崎、若松浦本村、小島渡口を歴て離小島へ渡り一周測。小島渡口より加瀬ノ浦、重石鼻にて沿海打止。</p> <p>若松村逗留測。若松島字重石鼻より左山沿海、ヒヨウゲ崎、坊ヶ浦、松ヶ崎、若松村枝神浦、猿浦、鬼子崎、大鹿崎、小鹿浦、鶴瀬戸、小瀬戸鼻、太平浦、字太平、立瀬鼻にて打止終。それより乗船、又浦之内、貝ノ木入江奥より若松村人家中へ横切、老松繋。</p> <p>若松村字土井浜より土井浦、白浜崎、浜泊浦、水ノ浦瀬戸を歴て田ノ小島へ渡り、若松村持田ノ小島一周測。水ノ浦瀬戸より引ノ浦、石司鼻、字石司浦、高崎鼻にて終。外に若松村持へボ島一周測。</p> <p>日之島逗留測。日之島、堂崎より右山測、日之島村、馬刀ノ浦、曲崎、有福島渡口を歴て有福島、渡を測。有福島渡口より高鼻、竜宮島瀬戸を歴て竜宮島へ渡り一周測。又竜宮島瀬戸より堂ヶ崎初の幟に繋、日之島一周終。日之島属漁生島を測。字辰崎幟より右山測、漁生浦、松ヶ崎、小瀬戸鼻を歴て若松島地方へ渡を測。小瀬戸鼻より口キレ鼻迄測。此より又有福島へ渡を測。口キレ鼻よりインチャク岩、権現崎、辰崎初の幟に繋、漁生島一周終。</p>					二〇六

28	27	26	25	24	23	22	宿泊日・旧暦
(25)	坂部 (24)	(23)	(22)	(21)	(20)	(19)	(西暦)
久賀島 久賀村	福江島 福江上町	久賀島 久賀村	同	同	同	同	宿泊地
同 五島市	同 五島市	同 五島市	同	同	同	同	現・市町村名
江頭政之助、外一軒	富田屋八郎治	江頭政之助、外一軒	同	同	同	同	宿泊宅
久賀村逗留測。久賀島内折紙より左山沿海、久賀浦入江を測。立神岩(大岩)、ズンキリ浦、鷺ノ巣鼻を歴て弁天島へ渡り一周測。鷺ノ巣鼻より、蛭取浦、呼子鼻、字猿浦、久賀村枝大平、枝市小木、久賀本村、字宮ノ後、枝深浦、塩竈鼻を歴て弁天島へ渡り、大野、弁天島一周測。塩竈鼻より浜泊鼻にて打止終。	坂部病氣、福江引移る	日之島属有福島を一周測。同属相ノ島一周測。それより舟行。	日之島逗留測。若松島内横山鼻より左山沿海、ハゲ崎、犬瀬崎、藁塚浦、字藁塚、天神島遠測、藁塚崎、瀬戸脇、漁生島より渡り残に繋、笠瀬、赤瀬鼻、字堤之内、神崎、長瀬崎、字滝ノ河原、高崎鼻に繋終。(今日若松島済)。	日之島逗留測。若松島字大平の内、立瀬鼻沿海打止より左山沿海、ビシヤゴ鼻、ビシヤゴ瀬(大岩)、三年ヶ浦、布崎、大崎に繋終。又若松島の内、日之島枝間伏人家前より左山沿海、土ノ浦(大入江)、横山鼻にて打止終。	日之島逗留測。若松島字大平の内、立瀬鼻沿海打止より左山沿海、ビシヤゴ鼻、ビシヤゴ瀬(大岩)、三年ヶ浦、布崎、大崎に繋終。又若松島の内、日之島枝間伏人家前より左山沿海、土ノ浦(大入江)、横山鼻にて打止終。	日之島逗留測。若松島字大平の内、立瀬鼻沿海打止より左山沿海、ビシヤゴ鼻、ビシヤゴ瀬(大岩)、三年ヶ浦、布崎、大崎に繋終。又若松島の内、日之島枝間伏人家前より左山沿海、土ノ浦(大入江)、横山鼻にて打止終。	雨天逗留。
二〇七	二〇六	二〇七	二〇六	二〇六	二〇六	二〇六	大図番号

		文化10年7月			宿泊日・旧暦
		(1813)			(西暦)
					宿泊地
					現・市町村名
					宿泊宅
					特記・天体観測
					大図番号
2	1	29	【本隊】		
(28)	(7.27)	(26)			
同	福江島 福江町 福江上町 福江酒屋町	福江島 福江町 福江上町 福江酒屋町			
同	長崎県五島市	同 五島市			
同	本陣客館 塩塚惣吉 富田屋八郎治 吉田屋亀蔵	本陣客館 塩塚惣吉 富田屋八郎治 吉田屋亀蔵			
<p>福江逗留測。福江島東西手分。【東方伊能他四名】福江海辺波戸より右山沿海、波戸へ打出、大手門脇に至る。崎保崎に繋、それより大手門を歴て大津村に至る。天神崎、八幡崎、和布崎、大津本村、イゴ崎、崎山村枝長手、佐多瀬鼻、小泊、崎山本村人家前浜にて打止終。【西方今泉他三名】福江島福江町字丸木波戸元より左山沿海、横物波戸へ打出。それより向波戸へ渡を取。江川尻、丸木町、タブテを歴て山間横切向海辺、六方村字戸楽浦へ出、又タブテより、戸楽崎、馬立鼻、六方村字戸楽浦に繋。（従是行先海岸砲瘡人置場に付、人足船手共恐れて人足引込、漸小人数にて巖石船測手間取）。六方浦、南河原崎、（此節大村引越砲瘡病五人ありと）、右に瀬続小島見切、奥浦村字惣津浦、大泊を歴て字早崎、干切元にて沿海打出。此より早崎岬測遠嶺に繋。江戸へ書状を出。</p>		<p>福江逗留測。【永井他三名】六方村持多々羅島を測。字塔ノ越崎測遠嶺より右山測、鵜ノ瀬崎、摩浦、一添鼻、赤瀬崎、屏風立、塔ノ越崎初嶺に繋、多々羅一周終。又同村持屋根尾島測。字赤瀬崎嶺より右山測、加勢ヶ浦、波ノ木崎、北浦、平瀬崎、平瀬崎、吹通鼻、赤瀬崎初嶺に繋、屋根尾島一周終。別手測、竹ノ子島字干切鼻より庖丁島に渡り一周測。庖丁島より観音小島の瀬戸巾測、観音小島一周遠測。【門谷他三名】六方村持栄螺島を一周測、鳥ノ子島（大岩遠測）、同村持竹ノ子島一周を測。恒星測定</p>		<p>【本隊】久賀島田ノ浦測所より曲ノ内を歴て向海辺に横切、又曲ノ内より出鼻回、明神崎（明神社有）を歴て横切に繋、船瀬崎、狭根崎、長崎、亀河原を歴て山越横切向海辺、田ノ浦入江奥、字浦頭に繋。又亀河原より海辺（福江、富江）論所に付先日ツブラ島の例に両領人足にて測、黒崎、犬下し、小瀬戸崎、中網代鼻にて左右両手合測（久賀島一周終）。【支隊】久賀島浜泊鼻より左山沿海測、百合崎、スガメ浦、魚見崎、ゲンギヨ鼻、鳶瀬、野首崎、野首浦、黒瀬鼻、小魚崎、中網代鼻にて東西手分合測。それより乗船。恒星測定</p>	
二〇七	二〇七	二〇七			

7 *	6 *	5 *	4 *		3 *	宿泊日・旧暦
(2)	(8 1)	(3 1)	(3 0)	伊能	(2 9)	(西暦)
同	同 富江浜ノ町	福江島 大浜村	黄島	同 大浜村	同 大浜村	宿泊地
同	同 五島市	同 五島市	同 五島市	同 五島市	同 五島市	現・市町村名
同	本陣町年寄西島善兵衛 町年寄橋本屋仁左衛門 保田屋瀬兵衛	本陣御手洗喜十郎 社人森佐源	天野元五郎 中村万蔵	本陣御手洗喜十郎	本陣御手洗喜十郎 社人森佐源	宿泊宅
富江逗留測。【本手】富江島田尾村、人家前海 辺より、十二川道、横切を測。江湖川小流、田 尾村枝平村、船引坂、二俣川小流、田尾村枝茂 敷、岐宿村枝二本楠村、字越路、十二川街道、岐 字栗畑、四辻にて打止（但、富江、玉之浦、岐 宿、田尾）四辻。【小手分】黒島一周測。富江 村地方、字渡口より太郎島へ渡り一周測。太郎 島より竹ノ子島へ渡り一周測。竹ノ子島より和 島へ渡り一周測。恒星測定	大浜村海辺より右山沿海、御手洗崎、クブキ 瀬、大浜村枝増田、戸垂崎、字牛石、富江・富 江領界、此より富江領田尾村人家前浜、十二川 追分迄測る。江湖川小流、田尾崎、富江村枝田 野江村字二軒屋、本村字宮ノ下、富江陣屋下、 黒瀬村道追分を歴て浜ノ町通横町本町、同横町 浜ノ町、本陣測所前、沿海打止、同所より測 所。それより波戸にて打止。又波戸より小島崎 を回て波戸に繋。小手分尾形、昨日朝霧、且終 日曇。島々測遠不相成、此日地方所々測遠。恒 星測定	乗船、福江島内崎山村人家前浜より右山沿海、 崎山崎、中鼻、大ノ鼻、身投松鼻、蟹瀬鼻、塩 津浦、カクセン鼻、馬込鼻、水ヶ浦、弥兵衛 浦、本山村、大浦、広磯浜、経ヶ崎、里崎、大 浜村、山ノ浦、魚待鼻、大泊浦、神崎、大浜村 人家下に繋終。恒星測定	伊能は大浜に残。崎山村持赤島を測。字鶴ノ瀬 鼻より高瀬鼻、鶴ノ瀬鼻の初に繋、赤島一周 測。又赤島属板部島を測。小板部島一周測。小 板部より大板部島へ渡り一周測。小手分、大浜 村持黄島一周を測。恒星測定	定	福江村内寺山村鬼宿、三井楽・十二川追分より 街道測、字二ノ番町、字木場、大円寺川、枝三 尾野、福江・大浜街道追分。本山村枝吉田村、枝 堤村、枝野中、字高田、枝野々切村、大浜 本村人家前海辺に出、測所にて打止終。恒星測 定	特記・天体観測
二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	大図番号

宿泊日・旧暦			宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
	伊能	(西暦)					
8 *	(3)	同	富江浜ノ町	同	五島市	本陣町年寄西島善兵衛	二〇七
9 *	(4)	同	大宝村	同	五島市	本陣真言宗 弥勒山観音院大宝寺 佐々野与八	二〇七
10 *	(5)	同	玉之浦村字白崎	同	五島市	会所亭主代官山口源吾 浄土宗西芳寺	二〇七

伊能は黒瀬村止宿差支に付残
 富江島内富江陣屋下海辺より、黒瀬村へ街道横切測。富江陣屋表門通、富江本村、同枝横加倉、同枝山ノ手、同枝黒瀬村、山ノ手川端海辺へ出、人家前測所迄測る。又人家前測所より左山沿海、黒崎、魚釣瀬鼻、富江村枝山下、ムエ崎、金手崎、高三郎崎、小手分と合測。【小手分】富江浜ノ町より右山沿海、鯨場町通、兩附鼻、字渡口に繋、舟廻浦、長崎鼻に至り、測遠幟に繋。畑尻浦、糶島崎、根瀬崎、六島崎、浦頭浦、坪浦、笠山崎、高三郎崎にて両手合測。恒星測定
 富江島内富江村枝黒瀬村、山ノ手川端より右山沿海、山ノ手川、丸子村、ウクエ崎、丸子村(在所)、琴石村、布瀬鼻(大岩)、琴石鼻、琴石浜、カネ崎、琴石村(在所)、崎目崎、太田村、戸懸崎、玉ノ浦村枝大宝村を歴て裏海佐々目浦へ横切。【小手分】大宝村より沿海、弥勒山大宝寺門前を歴て測所へ打上。トクワ鼻、黒崎鼻にて沿海打止。外に津多良島、山見瀬、鯨瀬、二子瀬二ツ遠測。伊能は富江より黒瀬村迄陸行、それより乗船同村に至。恒星測定
 大宝村字佐々目浦入江奥より左山沿海測、神崎、立矢浦、別当木鼻、苦チキレ浦、トタケ浦、スイモン崎、井持浦、大瀬崎、小松崎、玉之浦本村、(井持浦、白崎、越首、深浦)、字白崎、測所前に至る。同所裏海、字越首横切。それよりエビス崎、字越首、字深浦、魚釣瀬にて打止終。【小手分】大宝村、黒瀬鼻より右山沿海測、力崎、馬下り浜、馬首浜、ヲコシマ遠測、大瀬崎、汐早崎、膳棚崎、鯛ノ鼻、島山瀬戸、築口にて打止。(海岸絶壁波高大難所、手伝人撰にて測)。外批榔島遠測。恒星測定

1 4 *		1 3 *		1 2 *		1 1 *		宿泊日・旧暦
(9)	伊能	(8)	昼休	(7)	(6)			(西暦)
同 荒川村	同 福江町	同 荒川村	同 玉之浦村枝丹奈村	同	同			宿泊地
同 五島市	同 五島市	同 五島市	同 五島市	同	同			現・市町村名
遠見番役鳥巢八右衛門 遠見番役真弓甚六	客館 塩塚惣吉	本陣舟改役山役 鳥巢徳之助 遠見番役鳥巢八右衛門 遠見番役真弓甚六	山役人中村甚助	同	同			宿泊宅
昨十三日玉之浦にて坂部病氣不宜よしを聞、今朝当所出立、陸行福江へ着。大病に相成に付、江戸御役所へ書状を出す。		玉之浦村枝荒川村より右山沿海、荒川人家前測所、字平ノウド、十二川道追分、それよりウジボ浦、七ツ岳越追分、荒川村持権現島一周測、字白泊、キウナル崎、玉之浦村枝丹奈村、丹奈崎に打止終る。此より外海波高測量不成。【小手分】玉之浦属島山島を測。字カツマ崎より左山、昼寝浦、小石浜鼻、字平瀬鼻、黒瀬崎にて打止。此より先大絶壁風波強、測量ならず引取。		玉之浦逗留測。玉之浦村内童崎より右山沿海、弁天島渡口を歴て弁天島へ渡、汎測。又渡口より白ケンナ崎、笠神浦、笠神鼻、三郎ヶ浦、仏崎、山ノ浦、立目崎、山ノ浦崎、夷崎に繋。【小手分】夷崎より右山測、外河原崎、河原崎に繋、それよりヨ印迄測。此より裏海へ横切ユ印を残、ヨ印より沿海、小鼻を回りユ印に繋、土師ヶ浦、銭亀崎、大瀬崎、一本杉鼻、布浦、桐崎、玉之浦村枝荒川村人家下迄測。		玉之浦逗留測。玉之浦村内童崎より右山沿海、弁天島渡口を歴て弁天島へ渡、汎測。又渡口より白ケンナ崎、笠神浦、笠神鼻、三郎ヶ浦、仏崎、山ノ浦、立目崎、山ノ浦崎、夷崎に繋。【小手分】夷崎より右山測、外河原崎、河原崎に繋、それよりヨ印迄測。此より裏海へ横切ユ印を残、ヨ印より沿海、小鼻を回りユ印に繋、土師ヶ浦、銭亀崎、大瀬崎、一本杉鼻、布浦、桐崎、玉之浦村枝荒川村人家下迄測。		特記・天体観測
二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七	二〇七			大図番号

宿泊日・旧暦	(西暦)		宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
15 *	伊能・今泉	同 福江町 福江酒屋町	同 五島市	本陣客館 塩塚惣吉 吉田屋亀蔵	此日ハツ半時頃、坂部貞兵衛病氣養生不相叶、 於福江町命終。早速測量両手へ申遣し、猶又江 戸表御役所へ死去届の書状を出す。	二〇七	
(10)	同 荒川村	同 五島市	遠見番役鳥巢八右衛門 遠見番役真弓甚六	測量不相成、逗留。五ツ時頃に坂部死去の知ら せ飛脚届。	二〇七		

(注) 7月15日、坂部貞兵衛福江島福江町(現五島市)で病死

【支隊】	今泉他三名	○五島内福江島西海辺を測(坂部病氣に付福江浜町に残、医療快方跡より出立の言合)			
7月3日	(7.29)	福江島 戸岐浦	長崎県五島市	忠吉 徳左衛門	二〇七
4	(30)	同	同	同	二〇七
5	(31)	同 岐宿村	同 五島市	給人西村八郎左衛門 治十郎	二〇七

福江出立。福江島、奥浦村字子崎干切元より左
山沿海、薦ノ小島遠測、中崎、小田河原、小田
崎、妙子瀬、松林崎、権現社拜殿、桎浦を歴て
山越横切向海辺、泊浦に繋。又桎浦より沿海
測、浜泊浦、鳥帽子崎、中鼻、仏崎、庄屋崎、
一本松、スズギ浦を歴て入江奥字浦頭迄片測。
又スズギ浦より沿海、女崎、左小山上に女崎
宮、奥浦村人家下、大工町、忠太ヶ縊を歴て山
越横切向海辺、忠太ヶ浦へ出、又忠太ヶ縊より
道崎にて沿海打止。それより奥浦村持小島一周
測。それより乗船帰宿。

戸岐浦逗留測。奥浦村字道崎より沿海測、小能
瀬崎(横、本能瀬に繋)、枝戸岐浦、ヲモヤ
崎、忠太ヶ浦に繋。右沖に弁天小島、右に瀬続
切鼻、十郎ヶ浦、赤小島、大屋崎、嵯峨瀬浦、
山計岐宿村、大小島渡口を歴て、大小島へ渡り
一周測。又大小島渡口より沿海、戸岐首浦を歴
て、山越横切向海辺、唐船ノ浦浦頭に出、又戸
岐首浦より沿海、山計奥浦村、櫛木浦、跡打、
小宮原浦、小宮原崎、京崎、船隠浦、戸岐浦止
宿下にて沿海打止。

戸岐浦止宿下より沿海、左に鎮守大明神、半泊
崎、半泊浦、半泊小島、赤崎、掛橋崎、間伏浦
を歴て横切向海辺、外間伏浦に出、又間伏浦よ
り沿海測、糸串崎、綱分崎、外間伏浦に繋。鴨
瀬遠測、多附崎、鰐(キビナゴ)網代浦、道ノ
巢浦、小長崎、岐宿村支配唐船浦、福見浦、鳥
居元にて打止、それより乗船帰宿。

9		8		7		6		宿泊日・旧暦
(4)		(3)		(2)		(8, 1)		(西暦)
同		同		同		同 岐宿村	同 唐船浦村山手浦	宿泊地
同		同		同		同 五島市	同 五島市	現・市町村名
同		同		同		大曾根権現 神主阿比留日向 給人西村八郎左衛門 治十郎		宿泊宅
岐宿村逗留測。岐宿村字ロク口場より向海辺に横切、又字ロク口場より鼻を回り横切に繋、満ノ浦、片山鼻、折串浦、呼崎、二重ヶ浦、ハツナマツ崎、狩主崎、古里浦、岐宿越、三井楽道に出、河原村となる。これより街道、海辺両用。字菜切浦、街道・海辺追分を歴て測ノ元川尻、測ノ元、白石、松ヶ崎、字内津和瀬を歴て山間横切向海辺、字外津和浦に出、又字内津和瀬より沿海測、黒小島瀬続真中を歴て右山に回り、黒小島一周測、寺小島(測遠幟初)一周測。又地方黒小島瀬続真中より沿海、若狭ヶ浦、焼崎、外津和浦横切に繋、ヘボ崎、ヘボ浦、塩竈、惣津浦、ハゲ島瀬続、鶴崎、石鍋崎、戸屋ノ縋浦を歴て山間を横切向海辺、字平床に出、又戸屋ノ縋浦より沿海、鯨越浦を歴て山越横切向海辺、字本ノ下へ出、又鯨越浦より沿海、マホシ浦、小マボシ浦、字出来網代崎にて沿海打止。それより乗船、帰宿。		岐宿村逗留測。岐宿村字蕨崎より字鰐川尻、字猪ノ渡瀬、茶園浦、牛揚鼻、黒蛸鼻、ヒキ瀬崎、小浦、葦ノ浦、岐宿村人家下字浜蔵、左に浄土宗大黒山妙永寺、浜里、津木崎、中ノ前、左に恵日山本宮寺、宮小島一周目測、左上に岩立権現、前津浦、内山崎、海士崎、八崎、榎津崎、小淵ヶ浦、惣瀬浦、浜田浦、水垂、松ノ元を歴て地焚小島へ渡り一周測。地焚小島より沖焚小島へ渡り一周測。又松ノ元よりヨ印を歴て山越横切向海辺へ出てコ印を残置、又ヨ印より恵比須崎、行巢ヶ崎横切コ印に繋、西津浦、轆轤場にて打止。		岐宿村逗留測。岐宿村字蕨崎より字鰐川尻、字猪ノ渡瀬、茶園浦、牛揚鼻、黒蛸鼻、ヒキ瀬崎、小浦、葦ノ浦、岐宿村人家下字浜蔵、左に浄土宗大黒山妙永寺、浜里、津木崎、中ノ前、左に恵日山本宮寺、宮小島一周目測、左上に岩立権現、前津浦、内山崎、海士崎、八崎、榎津崎、小淵ヶ浦、惣瀬浦、浜田浦、水垂、松ノ元を歴て地焚小島へ渡り一周測。地焚小島より沖焚小島へ渡り一周測。又松ノ元よりヨ印を歴て山越横切向海辺へ出てコ印を残置、又ヨ印より恵比須崎、行巢ヶ崎横切コ印に繋、西津浦、轆轤場にて打止。		岐宿村逗留測。唐船浦村字河原尻より御下ヶ浦、徳ヶ崎、岐宿村枝川霧村字大里、大里川尻、一ノ川尻、元ノ小島鼻を歴て前之小島へ渡り一周測。又元ノ小島鼻より沿海測、字馬回、これより街道、海辺一同、三井楽道・海辺追分、字浦ノ川を歴て三井楽道打越。字小松ノ元、三井楽道・山道追分にて打止。又、浦ノ川尻より、網揚ヶ浦、蕨崎にて沿海打止。それより乗船帰宿。		特記・天体観測
二〇七		二〇七		二〇七		二〇七		大図番号

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
15	(10)	同	同	同	測量不相成、浜畔村逗留。此夜八ツ時後、坂部死去の知らせ申来る。	二〇七
14	(9)	同	同	同	浜畔村逗留測。岐宿村属姫島を測。字須賀崎測遠轍より右山に測(海岸大絶壁西風強、船測ならず雑木の中を切分て測)、ヒ印迄測、打止はメ印に終(最早切分も成難打止)。それより乗船、帰宿。	二〇七
13	(8)	同 三井楽本村浜畔村	同 五島市	領主仮屋 預主代官平山甚吉	浜畔村逗留測。浜畔村江川尻より左江川添横切測、江迎、山子、江頭、平落(此所より左右へ水流れ分る)、貝津村、井ノ内、釜蓋、竹山、向海辺江川尻へ出、繋ぐ。此より左山沿海測。江川尻を渡、貝津村、間瀬崎、高浜浦(蛤名物)、小長崎、丹奈村、彫泊浦、波戸崎、黒落崎にて沿海打止終る。	二〇七
	昼休	同 貝津村	同 五島市	谷川清左衛門	浜畔村逗留測。柏村字滝崎より沿海、浜畔村枝測ノ本村、牛ノ浦村、長崎、汐水、浜畔村枝破砂間村、枝浜坂村、枝貝津村、薄崎、打瀬、白崎、江川尻にて打止。	二〇七
12	(7)	同	同	同	浜畔村逗留測。岐宿村(掛)河原村字内織浦より左山沿海、海辺街道両用、三井楽内浜畔村、江川を渡、浜畔村人家下、横瀬崎、政山、八ノ川、赤瀬崎、柏村(古名柏塩竈)、高崎浦、高崎(左に若宮大明神、左に鯨納屋)、柏崎、滝崎にて打止。それより乗船、帰宿。	#VALUE!
11	(6)	同	同	同	岐宿村字小松ノ元より三井楽道測。野稲畠峠、大湯平、橘河内、元越、鰐川、楠原、三本松、松山街道・三井楽街道追分を歴て向海辺岐宿越に繋(河原村道)。又飛て三井楽道・海辺追分、菜切木場より三井楽街道測、山ノ神堂、向海辺、字内織浦に出。此より右山にて沿海逆測。笠浦、笠崎、ドウジヤウ崎、千貫戸浦、小蔵浦、鳥帽子瀬、平床横切に繋、本ノ下横切に繋。葛籠崎、小浜浦、出来網代崎にて繋終。それより乗船。	二〇七
10	(5)	同 三井楽本村浜畔村	同 五島市	領主仮屋 預主代官平山甚吉		二〇七

【本隊】													宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号	
27 *	(22)	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	7月16日 (11)	同	同	同	同	同	同	同
26 *	(21)	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
25 *	(20)	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
24 *	(19)	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
23 *	(18)	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
22 *	(17)	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
21	(16)	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
20	(15)	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
19	(14)	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
18	(13)	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
17	(12)	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
7月16日	(11)	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
													福江浜町 福江酒屋町	五島市	本陣客館 塩塚惣吉 吉田屋亀蔵	七ツ時頃葬式、五島福江町浄土宗芳春山宗念寺へ葬る。	二〇七			
													同	五島市	同	同	福江町逗留。坂部所持金、木銭、米代等の諸帳面を改。	二〇七		
													同	同	同	同	福江町逗留。此夜江戸御用状届。此日も一同集会、坂部書物を相改る。	二〇七		
													同	同	同	同	福江町逗留。此日も一同集会、書物書籍を見る。	二〇七		
													同	同	同	同	福江町逗留。再江戸行書状出す、坂部書物を再正。	二〇七		
													同	同	同	同	福江町逗留。	二〇七		
													同	同	同	同	福江町出立。本山村字一ノ川端(即十二川の初)、十二川街道より街道逆測、一ノ川を渡、字ウトウ宿、岐宿村枝二本楠字地藏木場、字五郎左衛門木場、此所迄川を渡ること十二度、仍て十二川通と云。山椒木川小流、岐宿村枝山内村内二本楠字空穂木に繋終。	二〇七		
													同	同	同	同	波荒不測。(荒川村逗留)。	二〇七		
													同	同	同	同	波高不測。(荒川村逗留)。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同	同	同	雨天荒川村逗留。恒星測定。	二〇七		
													同	同						

宿泊日・旧暦		(西暦)		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅		特記・天体観測		大図番号	
【支隊】		今泉他三名		○再び福江島西の方残を測。									
7月22日		昼休		福江島 川霧村 浦ノ川		長崎県五島市		大浦木置場		総名福江村（本村）三尾野村字寺山村、岐宿、三井楽・十二川街道追分より三井楽道測、字吉久木、簗洲村字才原、字千代田、ウゼラ川、一里川、大坂峠、ヒメジキ川、岐宿掛川霧村、一ノ川を渡、字馬回に繋終。		二〇七	
23		(18)		同 同 同		同 同 同		同		風雨。姫島渡海不相成、逗留。		二〇七	
24		小休		同 松山村		同 五島市		百姓三太夫		岐宿村枝三本松、三井楽・七ツ岳越街道追分より松山通、七ツ岳道を測。字葛ヶ迫、幾山村枝松山村、志田ノ尾川渡、ウバメキ、松山人家前追分に繋。志田ノ尾川渡、枝寺脇村字井川、七ツ岳峠（虹蛭あり）、玉之浦村（支配）荒川村、左に七社大権現、向海辺、字大地坊浜に繋終。それより荒川村へ立寄、東の手に面会。		二〇七	
25		(20)		同 三井楽本村浜畔村		同 五島市		中村五郎右衛門 中村喜左衛門		無測にて子持坂を越、三井楽浜畔村へ行て止宿。		二〇七	
26		(21)		同		同		会所代官平山甚吉		西大風雨。姫島渡海ならず、逗留。		二〇七	
27		(22)		同		同		同		浜畔村逗留測。姫島へ渡海の所、風波に付途中より引取る。波砂間村より乗船、嵯峨島へ渡る。嵯峨島人家下より左山測、海岸絶壁は山上を測、字小井土手崎、字後平にて左右合測。		二〇七	
【本隊】													
7月28日		本隊昼休		福江島 本山村 字イカケ		長崎県五島市		百姓忠兵衛		【本隊】（本山村字一ノ川端より福江街道測、イカケ坂、字イカケ、字平山、福江村字瀬戸、字三番町（足軽小路）、岐宿・十二川追分に繋終。【支隊】姫島渡海ならず、浜之畔村出立。無測にて福江町着。		二〇七	
29		(24)		同 同		同 同		本陣客館 塩塚惣吉 吉田屋亀蔵		福江逗留。市中測。総名福江（本村）三尾野村、福江町・大浦追分より、三尾野町、本町、犬ノ馬場、三辻を歴て万町枝風呂屋町、江川橋手前に至る。祇園町、奥町、三辻迄測る。此より江川尻を渡（即沿海測）、江川向、字丸木町に繋。又奥町三辻より酒屋町通を測。犬ノ馬場に繋。又奥町三辻より、浜町通沿海測、右側計人家、左に舟改番所、測所を歴て、波戸ノ元に繋。五島侯より、一統へ国産を被贈下。此夕御料理御酒被下。町奉行、代官度々出る。此夜家老又野監物来て寛談、五島侯へ万国略図一幅を上る。		二〇七	
30		(25)		奈留島東風泊		同 五島市		船中泊		福江町乗船。風波に付、奈留島、東風泊に船泊		二〇六	

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
文化10年8月	(1813)					
1	(8月26)	平島	長崎県西海市	庄屋林田十蔵 百姓源右衛門 百姓長右衛門 百姓近蔵	奈留島東風泊出船。奈留島より引船来、竿崎迄漕送。宮崎栄二郎は量地芸古の為此より隨身。恒星測定	二〇五
2	(8月27)	同	同	同	手分にて平島を測。【伊能他四名】平島人家前波戸より右山測、鯨納屋跡(生月島畳屋又左衛門当春も鯨を獵す)、相崎、鎌崎(轍に繫)、黒崎浦を歴て山越横切向海辺、宇南風ハ工泊浦に出、又黒崎浦より南風ハ工泊浦横切残に繫、左に小島、竜崎にて両手合測。【永井他三名】彼杵郡平島人家前波戸より左山測、測所を歴て、ヒヨウ崎、菰田浦、足上鼻、高嶺崎、中江ノ浦、氏無浦、崎ノ瀬(大岩)、大平鼻、竜崎にて両手合測。	二〇五
3	(8月28)	江ノ島	西海市	本陣庄屋松崎勤兵衛 一向宗善行寺 神主広江大和	【永井他三名】江ノ島へ渡。【伊能他四名】加喜島へ向て乗船、満汐にて舟行悪一時計進不得、五島送の船手伝、漸と出帆。江ノ島着。	二〇五
4	(8月29)	加喜ノ島 加喜ノ浦	同 西海市	本陣庄屋渡木庄兵衛 渡木源右衛門 百姓禎蔵	江ノ島出帆、順風もありて加喜ノ浦着。恒星測定	二〇一
5	(8月30)	同	同	同	加喜ノ浦逗留測。【今泉他三名】加喜ノ島字今泊より右山測、浅浦崎、浅ノ浦、大津ヶ瀬、坊主ヶ瀬、大風泊(入江巾を測)、小島、満切瀬、続迄測り小島一周測。又満切瀬続より沿海測、雨見ヶ浦入江奥を歴て山越横切向海辺、鯨瀬取へ出、又雨見ヶ浦入江奥より沿海入江回、平崎、山下、菅牟田浦、櫃ノ浦、下崎、永ノ浦、釜ノ浦(又曰姫ノ浦)、水ノ浦、飯小島一周測、小島崎、福ノ浦、清水崎、土井ノ浦迄測る。此より入江奥を歴て山越横切向海辺、宇大阿穂へ出、又土井ノ浦より沿海入江回、内鎌田にて打止。それより乗船、帰宿。恒星測定	二〇一

宿泊日・旧暦	(西暦)		宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
6 *	(3 1)	同	同	同	同	加喜ノ浦逗留測。内鍛田浦より沿海測、内鍛田入江奥を歴て山越横切向海辺、字外鍛田浦へ出、又内鍛田入江奥より沿海測、上横浦(入江巾を測)、下横浦(入江巾を測)、黒崎、奥ノ浦、加嘉ノ浦(人家下)測所迄測る。阿古木、牟田島渡口を歴て牟田島に渡り一周測。鯨納屋場あり。当春十一本取得よし。志自岐社あり。又牟田島渡口より沿海測、小田島、鶴崎、平原崎、外鍛田浦に繋、両手合測、加喜ノ島一周相済。それより乗船、帰宿。	二〇一
7 *	(9 1)	大島 大島村	同	西海市	森柵右衛門 広田祥助	【今泉他四名】片島一周測。それより大島字立会取、枝黒瀬、本村大島界より左山沿海、但大島本村測、牛ノ首、鵜瀬崎、大島村(人家下)、大島浦、田ノ浦を歴て入江片測。又田ノ浦より沿海測、尾崎(入江巾測)、檜浦、上小羅崎にて打止。それより乗船。	二〇一
伊能		面高浦	同	西海市		伊能は加喜浦出立。乗船、面高浦泊	二〇一
8 *	(2)	面高村	同	西海市	本陣庄屋大串喜右衛門 大串長蔵 川口伯左衛門	【今泉他四名】大島字小羅崎より沿海測、古田崎、横尾、瀬ノ測、袋浦(横入江片測)、始浦、洲鼻、引掛崎、間瀬を歴て雲荏蓑にて左右合測。それより乗船。東嶋平橋来る	二〇一
9 *	(小休共 3)	同	同	同	同	面高村逗留測。面高村内字水尻より左山沿海、油出浦、後浜を歴て面高村人家間を横切向海辺、字中村へ出、又後浜より沿海岬回、番屋崎、左上に遠見番所あり、曲崎、難所崎、字中村横切に繋、測所を歴て、野崎浦、呼崎、左に弁天社あり、水ノ浦、天窪村、天崎、宮ノ浦、黒口崎にて沿海打止。それより乗船帰宿。	二〇一
10 *	(4)	中ノ浦村	同	西海市	本陣川野弥右衛門 庄屋大串直治	天窪村字黒口崎より沿海測、岩水、鯨ノ浦、雪ノ浦、黒口浦、小川左に観音堂、字塩屋、大多和村、枝池崎、中浦村、呼子崎、魚見崎、下手崎、南風崎、江川尻、中浦村止宿下、八大竜王・正観音合社(土堀石垣宜く見る)、小浜崎にて順逆合測。大村御老侯より暦談の使に来る。外に市瀬市右衛門、橋口郁三郎、老君より御差図にて入門。大村侯より時侯見舞として御国産物を一統へ被下置。	二〇一

15 *	14 *	13 *	12 *	11 *	宿泊日・旧暦
(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(西暦)
三重村	同	神ノ浦村	同	松島 松島村西泊	宿泊地
同 長崎市	同	同 長崎市	同	同 西海市	現・市町村名
本陣庄屋吉田左内 池田順蔵	同	本陣庄屋一ノ瀬伊太夫 朝長清兵衛	同	前深沢与五郎 (当時は中橋才兵衛)	宿泊宅
神ノ浦村・黒崎村境、字赤道(首)崎より沿海順測、右沖にラビ瀬遠測、黒崎村枝賤津、黒崎村枝出津、出津川尻、小城崎、大城崎、黒崎本村、黒崎村枝永田、左に天満宮社、仏崎、三重村、青瀬崎、三重村枝檜山、三重崎、大岳の下に繋。それより乗船。	神ノ浦村・黒崎村境、字赤道(首)崎より沿海順測、右沖にラビ瀬遠測、黒崎村枝賤津、黒崎村枝出津、出津川尻、小城崎、大城崎、黒崎本村、黒崎村枝永田、左に天満宮社、仏崎、三重村、青瀬崎、三重村枝檜山、三重崎、大岳の下に繋。それより乗船。	神ノ浦村逗留測。黒崎・神ノ浦村界、字赤道崎より沿海逆測、鳥簗、神ノ浦川尻、止宿入口を歴て測所打上、(止宿の後に鎮守松尾大明神社あり)。又止宿入口より沿海測、道徳、手水崎、相ノ川尻、雪ノ浦村枝小松、小松川尻、白岳崎、二ツ瀬崎、順逆両手合測。	松島逗留測。【伊能他四名】松島枝西泊測所より右山測、左沖に宮島遠測、浜泊(右山に石炭掘三ヶ所)、呂渡崎、仏崎、枝外平、亀ノ浦、大嶺崎、角瀬遠測、干切櫛島、瀬戸満切真中を歴て櫛島を測、右山測、左瀬ノ瀬遠測、談合ノ浦、鷹ノ巣崎、右に石炭堀小家あり、即今最中堀出す、瀬戸満切真中に繋、櫛島一周終る。又瀬戸満切真中より沿海、馬籠浦、落石崎にて打止。恒星測定	多井良村字清水鼻より沿海順測、字柳ノ浦、瀬続小島あり満切の真中を歴て小島一周測。又満切の真中より沿海、高穂崎に至る、急雨打止。それより乗船。	特記・天体観測
二〇二	二〇一	二〇一	二〇一	二〇一	大図番号

【支隊】		宿泊地・旧暦		(西暦)		宿泊地		現・市町村名		宿泊宅		特記・天体観測		大図番号	
8	(2)	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
7	(9 1) 昼休	大島 黒瀬	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
6	(3 1)	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
5	(3 0)	崎戸島	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
4	(2 9)	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
8月3日	(8 2 8)	江ノ島 江ノ島村	長崎県西海市	一向宗善行寺	平島出立、江ノ島測。鯨場、字丸田浜人家前より左山沿海、吉田鼻、白浜、石田鼻、亀ヶ浦、七郎浜を歴て番岳へ引上、測遠の為に船帆を残、七郎浜より岳ノ小島遠測、鵜ノ糞鼻にて打止。	二〇五									
						</									

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
13	(7)	同	同	同	大島内黒瀬山。大島枝大子島測。大島の地方間瀬鼻より渡り大子島一周測。又大島枝黒瀬持寺島測(人家なし)。字稲守鼻より右山に測。中瀬鼻、ビシヤゴ鼻、横島遠測、蓬萊崎、蓬萊島遠測、猪ノ渡鼻、屋敷鼻、赤崎、鳥帽子鼻、稲守鼻に繋、寺島一周終。外にガラ島遠測。それより乗船、地方へ移、大村領多井良村枝七ッ釜内名串崎より沿海逆測、字鳥越を歴て裏海へ横切、字鳥越より七ッ釜浦入江奥ノドノ洲瀬戸にて打止。	二〇一
12	(6)	同	同	同	七ッ釜浦逗留測。多井良村枝七ッ釜浦の内、名串浦より左山沿海、鳥越より横切に繋、字清水鼻を歴て山合を横切七ッ釜浦に出、入江奥ノドノ洲瀬戸に繋、それより右山逆測、多井良村枝七ッ釜浦、四釜崎、樫ノ浦、七ッ釜の内、字鳥崎、殿崎、中浦村、字伊佐ノ浦、ビシヤコ鼻、石口浦、中浦村(人家下)、小浜鼻にて順逆両手合測。	二〇一
11	(5)	瀬戸村	西海市	浦役人隈新	七ッ釜浦出立。多井良村の内、銭亀崎より左山沿海、三年ヶ浦(深入江)、女島遠測、鴨崎、測遠嶺にて打止。焼島へ渡、瀬戸村内焼島一周測。焼島より福島の地方小瀬戸鼻へ渡を取る。	二〇一
10	(4)	同	同	同	瀬戸村逗留測。乗船、池島へ渡。神浦村持池島、此島大村領流人島也大池あり、池島一周測。墓島(大村より出る真図を用遠測)。同属満切小島(同前)。池島より神浦村持母子島へ渡り一周測。それより瀬戸浦の福島を測。瀬戸村地方宮ノ鼻人家前より福島へ渡る。瀬戸村持福島、松ヶ崎より右山測、尻印を残、此より裏海、尻腐浦へ横切。又尻印よりタリタ鼻、尻腐鼻、尻腐浦、横切残に繋、又、立瀬鼻測遠嶺に繋打止。	二〇一
9	(3)	七ッ釜浦	西海市	庄屋井手友右衛門 山方目付岩永丹内	瀬戸村逗留測。乗船、多井良村高穂崎より左山沿海、白瀬鼻、ウバヶ島遠測、二ッ小島遠測、出口浦、エギリ鼻、長尾鼻、河内浦、銭亀崎に繋。多井良村、鴨崎測遠嶺より左山沿海、瀬戸村、小鴨崎瀬戸を歴て満切小鴨崎を回る(即島)。親島遠測、又小鴨崎瀬戸より石火矢谷浦、瀬戸村枝板ノ浦を歴て小島へ渡り一周測。沖小島遠測、板ノ浦より弥五郎浦、白瀬鼻、源太鼻(測遠嶺に繋)、瀬戸本村人家限、宮ノ崎に繋終。	二〇一

【本隊】		【本隊】	
18	17	8月16日	
(12)	(11)	(10)	本隊昼休
長崎町炉糟町	浦上洲村稻佐郷	福田浦	福田村枝手熊字柿泊
同	同	同	同
長崎市	長崎市	長崎市	長崎市
大同庵	本陣庄屋志賀和一郎 忠蔵	本陣 庄屋佐々木代右衛門 成瀬貞助	小庄屋茂内
稲佐郷出立。乗船、長崎町へ着。立山役所へ届に出る。		【本隊】式見村字螺崎、測遠幟より沿海順測、詫摩浦、鍋崎、枝相川、式見本村人家下、左に番所、前川尻、左に淡島大明神社、瀬続干切島、左に鎮守乙宮大明神の社、福田村字螺ノ鼻、枝手熊、手熊川尻、手熊内字柿泊、後瀬、後浜、能瀬に繋終。【支隊】式見村出立。福田村枝手熊の内能瀬鼻より左山順測、竜崎、葛籠浦、立目崎、福田村枝小江の内字小浦、西口鼻、野島遠測、枝小江串毛崎、福田崎、障子岩、福田本村、止宿下を歴て測所打上、即本陣前。止宿下より船番所、字船津、字小浦、字大浦、大浦川、成崎、観音崎にて打止。	
202	202	202	202
場前にて打止。		福田村字観音岩鼻より沿海順測、字観音崎、浦上村内洲村字小瀬戸郷（又浦とも云）、赤瀬、左山上に小瀬戸の遠見番あり、右沖に平瀬、丸瀬遠測（隠瀬）、谷迫、四株、横畑、小瀬戸郷（浦共。人家下、字水主小屋と云）、左山上に中番所、（左に不寝番所、左に制札、左一町計上南海上と云観音堂）、瀬崎を歴て洲村持鼠島渡り一周測。又瀬崎より左見送番所（蘭船唐船帰船に役人詰）、中ノ屋敷、字木鉢郷、ヤキサ川尻、左上に塩硝蔵あり、左白頭山、白頭浦、神崎、五番臺場、左神崎大明神、左見当堀、岩穴あり一名クヒチガヒ、長崎入江口（一名玉ノ浦、又鶴ノ浦、深江浦。総名長崎浦）、神崎臺場前にて打止。	
202	202	202	202
雪ノ浦出立。乗船、黒崎村・三重村界、字大岳ノ下より左山沿海、三重村止宿前を歴て本隊測所へ打上。三重村止宿前よりランタイ川尻、セビ崎（測遠幟に繋）、舞ノ浜、三重村枝京泊浦、陌刈平村、亀甲島遠測、平川尻、ウブメ崎、障子岩、式見村内螺崎測遠幟に繋。		福島測。同島立瀬鼻より右山測、瀨崎、中鼻、瀬戸村枝福島、焼島瀬戸、焼島より渡を取て残小印に繋。又、松崎、測遠幟に繋終。又、瀬戸村地方、宮ノ崎より左山沿海、雪ノ浦村、唐芋崎（測遠幟繋）、音無川尻、奥は入江なり。川尻口洲鼻より川向路へ渡を取る。川尻口洲鼻より川尻入江を回る。雪ノ浦本村入江を一周し川尻口渡に繋、ニツ瀬鼻にて順逆両手合測。	
202	202	202	202
庄屋熊野牧太		浦庄屋田崎勘助 村庄屋富永伊左衛門	
同	同	同	同
長崎市	西海市	長崎市	西海市
式見村	雪ノ浦	式見村	雪ノ浦
(9)	(8)	(9)	(8)
15	14	15	14
宿泊日・旧暦		宿泊地	
(西暦)		現・市町村名	
宿泊宅		特記・天体観測	
大図番号		大図番号	

伊能図完成二〇〇年記念行事

「伊能図完成二〇〇年記念の集い」開催

今年(2021年)は、文政4年7月10日(西暦1821年8月7日)に伊能図(大日本沿海輿地全図)が幕府に上呈されてから二〇〇年目にあたる。

これを記念して、4月16日(金)から4月18日(日)の3日間にわたり、「伊能図完成二〇〇年記念の集い」が伊能忠敬の全国測量の拠点となった隠宅が東京都江東区内にあったことに因んで、江東区文化センターを会場にして開催された。



会場入口の案内板

行事の主催は、地図や測量の関係8機関*で構成された「伊能図完成二〇〇年記念事業推進協議会」(以下、「推進協議会」という)であり、伊能忠敬研究会も構成団体として参加した。このほか、協賛団体には、富岡八幡宮、(公財)江東区文化コミュニティ財団、令和の伊能大図をつくる会が参加し、国土地理院、江東区、香取市が後援した。

行事の内容は、関係団体による「伊能図完成二〇〇年記念式典」、一般参加による「記念落語会」

及び「記念講演会」のほか、「伊能図フェスティバル」として、伊能図と伊能忠敬の測量機器の展示、伊能忠敬の測量とミウラ折りを体験するワークショップ、3D測量成果による「バーチャル富岡八幡宮」への参拝体験などであった。

一 伊能図完成二〇〇年記念式典

行事2日目の4月17日(土)の午後2時から、「伊能図完成二〇〇年記念式典」が建物3階のレクホールで行われ、来賓、関係団体の代表等80名ほどが参加した。伊能忠敬研究会からは、菱山代表ほか、星埜、鈴木の両特別顧問、伊能洋顧問、玉造理事、新沢理事の6名が参加した。



記念式典の主催者挨拶の様子

右手奥に来賓、手前は関係団体代表者。左奥の主催者席には故渡辺一郎さんの写真が置かれていた

式典は、開会後主催者を代表して推進協議会の会長である星埜特別顧問から挨拶があり、続いて野田勝国土地理院長、山崎孝明江東区長、宇井成

一番取市長、丸山聡一富岡八幡宮宮司の来賓4名から祝辞が述べられた。

最後に式のアトラクションとして、地元木場の木遣保存会「木響会」による木遣が披露された。また、参加者には記念の品として、令和の伊能大図「江戸」と「富士山」の2図が贈られた。

式典終了後、参加者は2階の展示コーナーに移動し、展示されている伊能図や伊能忠敬の測量器具などを見学したほか、ワークショップの会場に移動し、測量体験やミウラ折り、富岡八幡宮のバーチャル参拝に参加した人もいたようである。

二 記念落語会

4月17日(土)の午後5時から、施設内のホールで「伊能図完成二〇〇年記念落語会」が開催された。会場は500名余りの席があるが、コロナウィルス感染拡大防止のため、前後左右の席を空け、入場者数は定員の半数の250人に制限された。また、入場時には、検温と手の消毒をして、チケットも半券を自らちぎって箱に入れ、会場内でのマスク着用など、感染防止対策が徹底された。

記念落語会は、立川志の輔の独演会で、演題は「伊能忠敬物語―大河への道―」。志の輔自身が伊能図に出会ったところから、自身の体験を基に伊能忠敬の大河ドラマ制作に苦悩するドラマ作家を描いた1時間40分に及ぶ長編の創作落語であり、この斬を基に映画化も進められているという。ドラマの脚本を依頼された作家が伊能図上呈の場面を見事に描いたが、伊能忠敬のドラマにはならないという下げが待っている。伊能忠敬没後二〇〇年行事でも演じられたので、伊能忠敬研究会の会員には、馴染みのある斬であるが、気がつけば、

志の輔の大河ドラマに引き込まれていた。



落語会の会場

入場者数は半分に制限され、前後左右の席は空席だが会場全体は来場者で埋め尽くされた

落語終了後、伊能忠敬研究会名誉会員でもある立川志の輔氏から昨年他界した渡辺一郎氏と2年前からこの企画を相談されていたことが語られ、展示されている伊能図や測量器具なども見て欲しいとアナウンスされたこともあり、展示会場は午後8時の閉館時間まで見学者が絶えなかった。

三、記念講演会

行事3日目の4月18日(日)午後1時30分から、前日の落語会と同じホールで星埜由尚氏による記念講演会が開催された。会場のコロナウィルス感染防止対策は、前日の記念落語会と同様の措置が講じられ、参加者数も250人以内に制限された。講演の演題は、「伊能忠敬測量の日本地図を読む―二〇〇年前の日本の姿―」で、講演内容は、本

誌1〜5ページに詳細な報告がある。

四、伊能図フェスティバル

(1) 伊能図の展示

展示された伊能図は、旧陸軍が明治初期に模写した記録があり、平成13年に渡辺一郎氏によってアメリカ議会図書館で見えられた大図のうち、関東地方の25枚、国土地理院が保有する1/6000の江戸実測図南北2枚、伊能小図の複製図3枚などのほか、新たにコンピュータで再描画した「令和の伊能大図」4枚(江戸、横浜、小田原、富士山)などである。



関東地方の伊能大図

地図に上って200年前の街道や地名を確認する参加者

このうち、関東地方の大図と江戸実測図は談話ロビーの床に敷き詰められ、その他は展示ロビーの展示パネルに掲げられた。江戸実測図は、地元の深川が詳細に確認できることから、見学者は地図の上に立って二〇〇年前の地元の風景を思い描

いているようだった。

令和の伊能大図は、原寸大のものが展示され、見学者は、色鮮やかな地図とパソコンのフォントで読みやすくなった地図に見入っていた。なお、令和の伊能大図は約二分の一に縮小したものが談話ロビーに設置された売店で販売されており、記念に購入する見学者も少なくなかった。本誌に添付した「令和の伊能大図」は、江戸の大図に南の横浜と小田原の一部を繋いだものである。

(2) 伊能忠敬の測量器具の展示

展示ロビーでは、伊能忠敬の測量で使用された器具のレプリカが展示されており、見学者は説明パネルを読みながら伊能忠敬の測量方法を確認していた。展示されていた器具は、中象限儀、小象限儀、半円方位盤、彎窠羅針、量程車、鉄鎖、間縄、梵天、御用旗などである。



伊能忠敬の測量機器の展示

手前から間縄、鉄鎖、量程車、小象限儀が並ぶ

このほか、展示ロビーでは伊能図や伊能忠敬の

測量を説明するパネルや富岡八幡宮の資料館で展示されている故渡辺一郎氏所有の原寸大伊能中図、測量行程を示した地図などが展示されていた。

展示ロビーと談話ロビーの入場者数は、3日間で700人以上となった。

(3) ワークショップ（伊能忠敬の測量体験）

伊能忠敬による地図を描くための測量は、2点間の磁針による方位と距離の測定を繰り返す導線法で行われた。磁針は穹窿羅針が使われ、距離の測定には主に間縄が用いられたが部分的に歩測も使われた。この体験コーナーでは、穹窿羅針の代わりにオリエンタリング競技で使われるシルバコンパスを使い、距離は歩測によることで、競技性もあり、親子連れや家族で参加する人の姿が目についた。



伊能忠敬の測量体験

シルバコンパスで方位角の測り方の説明を受ける参加者

会場は1階の中庭で、歩測の幅を確認するため、30mの基線と地図に描くポイントとなる目印の

コーンが設置され、参加者は指導者の説明を聞きながら測量を体験し、描いた地図の出来栄に一喜一憂していた。

会場が屋外であり、天候が気になったが、2日目の夕方に降雨があった以外は、予定通り実施でき、3日間の参加者は130人余りであった。

(4) ワークショップ（地図のミウラ折りに挑戦）

「ミウラ折り」は、宇宙構造物の設計家で人工衛星の太陽電池パネルや大型の宇宙アンテナなどの設計に携わった三浦公亮氏の発案による紙の折り方で、折り畳んだ紙を一瞬で開き、一瞬で元に戻せるという特徴がある。



地図のミウラ折りに挑戦

難しそうだけど説明を聞きながら手順に従って折れば意外に簡単

使用する地図は、江東区の地理院地図とそこに表示されている自然災害伝承碑を表裏に印刷し裏面に折線を入れた用紙が用意されており、誰もが容易に折れる工夫がされていた。

会場は、落語大会や講演会が行われたホール近

くの展示室で、3日間の参加者は120人ほどであった。

(5) 3D測量による「バーチャル富岡八幡宮」への参拝体験

富岡八幡宮境内の3D点群データによる立体モデルが作成され、参加者は専用のゴーグルを装着することで境内の立体的な景色の中を自由に異動してバーチャルの参拝を体験していた。

会場はミウラ折りと同じ展示室で、3日間の参加者は110名ほどであった。

本記念式典は、2年以上前から渡辺一郎名誉会員が企画・提案し、星埜由尚特別顧問と堀野正勝会員が中心になって関係機関や地元、立川志の輔氏等と調整を行い、1年ほど前から推進協議会を立ち上げ、4回の委員会と5回の幹事会で議論を重ね、漸く実現したものである。折しも新型コロナウイルスの感染拡大の問題が重なり、実施も危ぶまれたが、3回目の緊急事態宣言が発出される直前に開催できたことが幸いであった。

伊能忠敬研究会としても、ご協力いただいた関係機関、団体に対し謝意を表するとともに、準備から運営に携わられた幹事の方々に改めて敬意を表したいと思う。
(事務局)

*「伊能図完成二〇〇年記念事業推進協議会」構成団体（順不同）

日本土地家屋調査士会連合会、公益財団法人日本測量調査技術協会、一般財団法人日本地図センター、公益社団法人日本測量協会、一般社団法人全国測量設計業協会連合会、一般社団法人地図調製技術協会、一般社団法人日本ウオーキング協会、伊能忠敬研究会

伊能図に描かれた現存十二天守

河崎 倫代

伊能図を見ると、二〇〇年前の日本を旅している気分になる。例えば、城下町を歩く。測線に沿って今も歩ける町がある。☆印がある。この町の星空はどんなだったろう。山あいの城下だったら空は狭かったはずだ。天守が見える。しかし、今は見られなくなった天守も多い。この二百年間に火災、落雷、地震などで失われてしまった。幕末に存在していた天守は六十余りだったという。明治維新後は、版籍奉還、廃藩置県と続き、城はその役目を終えて天守も解体された。かろうじて残った天守はわずか二十だったという。さらに、太平洋戦争中の空襲によって七天守が、戦後の失火によって一天守が失われた。こうして、現存している江戸期からの木造天守は十二となった。今日、各地に見られる天守の多くは「復元天守」である。その中には、史実に基づいて再現された天守もあるが、外観、内部、建築資材などに疑問を持たざるを得ないものも少なくない。

伊能図に描かれた天守は、測線と文字と山並み・家並み、若干の地図記号の続く中で、ひととき美しく、見て楽しい存在だ。しかし、錯覚してはいけない。これは実写ではないのだ。まるでドローンを飛ばして得た空撮写真を見て描いたように俯瞰的である。伊能隊が城下の街路から見上げて描いた構図ではない。城を描くに際しての基準はあったのだろうか。それとも担当隊員の筆任せだったのだろうか。そのことに触れた研究があったら教えていただきたい。



伊能図に描かれた城の例

これからリポートする「伊能図に描かれた現存十二天守」は、かつてその城を訪れたことのある石川県支部会員が、『測量日記』を読みながらリレー式に記述する、ちょっとした紀行文である。コロナ禍の中、気軽に楽しんでいただけでは幸いだ。

※「現存十二天守」のうち四天守は四国にある。第六次測量にのみ参加した幕府天文方下役柴山伝左衛門の『旅中日記』は『測量日記』を補足する貴重な記録であり、ここでも『柴山日記』

として引用した。

※参考文献

・山下景子著『現存十二天守』幻冬舎新書二〇一一年

・『伊能図大全』河出書房新社二〇一三年

第2巻45 p、50 p、69 p、197 p、200 p、

第3巻157 p

第4巻35 p、65 p、67 p、71 p、85 p、95 p

宇和島城(愛媛県宇和島市)

室山 孝

伊能忠敬測量隊が宇和島城下にやって来たのは、第六次四国測量の文化五年閏六月二十一日(一八〇八年八月十二日)である。忠敬をはじめ、天文方下役四名、内弟子三名、従者など八名、総勢十六名であった。

四国西南城沿岸はリアス式の海岸線が続き、そのほとんどが伊予(愛媛県域)にある。測量隊が土佐から伊予に入った六月二十五日、宇和島伊達藩の郡(こおり)方下役である都筑九右衛門・横田儀兵衛・森丈右衛門・小川五郎兵衛ら八名に出迎えられた。小川五郎兵衛は測量家であった父五兵衛の跡を継いで藩の絵図御用を勤めており、測量隊の作業にも加わったことが『測量日記』に記されている。伊予最初の宿所内泊浦(愛南町)の本陣には、宇和島藩郡奉行山家(やんべ)佐織も挨拶に来ている。



『伊能図大全』(河出書房新社)第3巻 264p

測量隊は複雑な海岸線や由良岬を丹念に測量し、日振島・戸島のほか、小さな島々も丁寧に測り、宇和島城下町に到着したのであった。

『測量日記』に、宿は本陣味噌屋庄三郎、脇亭主題屋助右衛門・灘屋貞二郎、別宿は米沢屋六右衛門、脇亭主米沢屋幸六・中屋安太郎とある。測量隊員柴山伝左衛門の『柴山日記』には、「本町三丁目」の「菜種や米津(沢)屋六左衛門」方に八ツ半頃到着とあり、これは別宿であった。『測量日記』に、翌々日二十三日の測量は、「本町二丁目測所」から開始とあるので、「本町二丁目」に忠敬らの本陣宿があったようだ。二十一日の夜は晴れて天文測量を行った。「輿地実測録」(国立公文書館蔵)には「宇和島本町 三十三度一十四分」とある。

元禄十六年(一七〇三)の「宇和島御城下絵図」(公財)宇和島伊達文化保存会蔵)を見ると、城山の堀の東側に形成された町人町は「袋町通」、それに続く「堅新町通」、その東側に「本町通」、さらにその東側に「裏町通」とあって、この三本の通りが基本的な町人町であった。近代に入って城山周囲の堀は埋められ、今はバスが通る幅広い道路(国道56号線)となったが、旧町人町は「袋町通」以外それほど道路幅は変わっておらず、当時の「本町通」は、現在の本町追手二丁目付近から、中央町二丁目、新町一丁目へ南北に抜ける細い通りである。この通りが中央分離帯のある「牛鬼すとり」と交差する角に、宇和島市設置の旧町名「本町」標柱が立つ

ており、天守閣も垣間見える。

『測量日記』に、翌二十三日は朝から晴天であったが、宿所に逗留し、「地図盤を仕立てる」とある。複雑な沿岸や多くの島々の測量データを整理し、下図作成に取りかかったようだ。郡方下役の都筑・横田・森・小川の四人が袂姿で来訪し、また下目付寺田由兵衛も来訪しているので、彼らに地図作成作業を見学させたのであろう。寺田由兵衛は「以後、案内のよし」とあり、翌日の測量案内を勤めたらしい。この日の夜も天文測量が行われた。

二十三日は、朝から曇り晴れで、坂部・柴山・下川辺・青木ら隊員六名は城下町と近辺の測量に出かけた。六ツ半頃出立、「本町二丁目」から「播磨口ノ門」、そこから「大手前」を通り、「中ノ町(侍屋敷)」、「佐伯町」、「松崎新田」、「毛山村南



旧町名「本町」標柱。(HP「宇和島の散歩道」より)。左上方に天守が見える。



本丸二之門跡付近から見た宇和島城天守閣

組、「来村」（くのむら）、同村内「宮下村」を過ぎ、「九嶋浦」、「坂下津浦字午越（馬越）」まで測量し、一昨日の測点に合測させた。そこから船で城下町の北方「須賀浦の内字川崎」まで海を渡り、さらに同浦の内「堤新田」、「須賀（本浦）」を測り、それより宇和島城下の北側「横新町」、「堅新町」、「袋町（一丁目・二丁目）」、「茶屋横町」を通って、「本町二丁目測所」に繋いだ。城の周囲を一周したことになる。

『柴山日記』にも、前半は二十一日測量の逆コース「城下市中并侍屋敷を通り、二十一日打止に繋ぎ」、後半は船で川崎並びに渡り、北側から市中を通り、今朝の出発点で終わったとある。この測量は、前測量の確認と、案内役である下目付寺田由兵衛の測量見学（案内と監視）を兼ねたものであったと思われる。

一方、宿所に残った隊員は下図作成等に当たったと思われるが、忠敬はこの日、城下町北側の外れにある和霊神社に参拝した。『柴山日記』による

と、翌二十四日昼過ぎ、郡奉行山家佐織が来訪し、山家の先祖（初代伊達秀宗に仕えた家老山家清兵衛公頼）の霊を祀る和霊神社の由緒を語り、先祖は主君に諫言し「切腹」した忠臣であるとしている。「切腹」とあるが、実際は、清兵衛の財政立て直し策に不満を持つ政敵が、主君秀宗に讒言し、暗殺されたとのこと。その後、政敵や暗殺関係者が変死し、災害や飢饉も起こったため、清兵衛の怨霊の仕業とされ、秀宗は清兵衛の霊を鎮めるため、和霊神社を創建したのであった。

二十四日の『測量日記』に、「晴曇、この日、当城下出立の所、郡方一同の願いにつき、地図を成す」とある。出立予定を一日延ばし、郡方の依頼を受けて、地図作成に当たったのである。何の地図か記載はないが、小川五郎兵衛も参加した、島々を含む宇和島藩領域の下図と推測される。『柴山日記』に、この日、郡奉行山家佐織来訪とあるのも、測量隊への労いのためであった。専門家ではない柴山は作業に加わらず、山家の話し相手をつとめたのであろう。

さて、宇和島伊達藩十萬石の城下町宇和島は、リアス式海岸の宇和島湾最深部にある。元禄十六年の古絵図によると、城山は直接海に面し、そ背後に城下町が形成されていた。現在の城山北側と西側の市街地は当時海であり、天然の堀となっていた。

伊能大図を見ると、測線は宇和島城の前面（西側）を通らず、背後の城下町に回り込んでおり、海岸線は見取り図である。二十三日の城下及び周辺測量では、坂下津浦馬越から須賀浦川崎まで、城山

の前面を船で渡ったが、この間は測量できなかったのである。その頃迄には一部埋め立てられていたであろうが、藩としては幕府役人に測量されなかつたのであろう。

宇和島城は、文禄四年（一五九五）、豊臣秀吉により七万石で封ぜられた藤堂高虎が、大名として初めて完成させた城であり、慶長六年（一六〇一）完成という。その後、慶長十九年（一六一四）、伊達秀宗が徳川家康より十萬石を拝領し、翌二十年入部して以来、二二五年九代に及ぶ宇和島伊達家の居城となった。標高八〇メートルの城山の本丸に建つ天守閣（国重文）は、寛文十一年（一六七二）、二代伊達宗利が大改修したもので、三層三階、白壁総塗込め造りで、高さ一五・七メートルである。

筆者は、城山東側（大手）の登城口から桑折長屋門（家老桑折家屋敷の門を移築）を通り、比較的急な石段の道を登り、中腹の井戸丸を経て、本丸へ上がった。二の門跡から東南に振り返ると、本丸石垣の向こうに天守閣が優美で印象的な姿を見せていた（写真）。本丸西端と天守三階からの眺めも素晴らしかったが、宇和島湾は市街地の向こうにやや遠く見えた。

昼食に名物「鯛の釜飯」を注文した。シンプルながらも味わい深く、旅の思い出の一つになった。鯛は古くから宇和島の名産であり、四泊もした測量隊の食事メニューにも当然上がったであろうと、しきりに想像された。

※参考文献

・『愛媛県の歴史散歩』（山川出版、二〇〇六年）
・『宇和島城』（宇和島市教育委員会文化スポーツ課二〇一九年版パンフレット）

松山城（愛媛県松山市）

室山 孝

松山といえば、若き日に旧制松山中学校教員として滞在した夏目漱石が描いた『坊ちゃん』の舞台であり、また司馬遼太郎『坂の上の雲』で正岡子規と秋山好古・真之兄弟が青春時代を過ごした町として描かれ、これらゆかりの観光名所も多い。

市街地東北にある道後温泉は日本最古の温泉とも言われ、道後温泉本館（国重文）は明治二十七年（一八九四）建立の木造三層楼であり、独特の雰囲気醸し出している（現在営業しながら改修工事中）。

伊能忠敬は、第六次の四国測量の時、文化五年八月十一日（一八〇八年九月三十日）から松山城下に三連泊、次いで道後温泉に二連泊した。『測量日記』は次のように記す。

十一日、七ツ頃に船で無須喜島（睦月島）を出立した測量隊は、先手の伊能忠敬らが新浜村枝村高浜村（松山市高浜町高浜）、後手の坂部貞兵衛

らはやや北側の堀江村（松山市堀江町）に着岸。

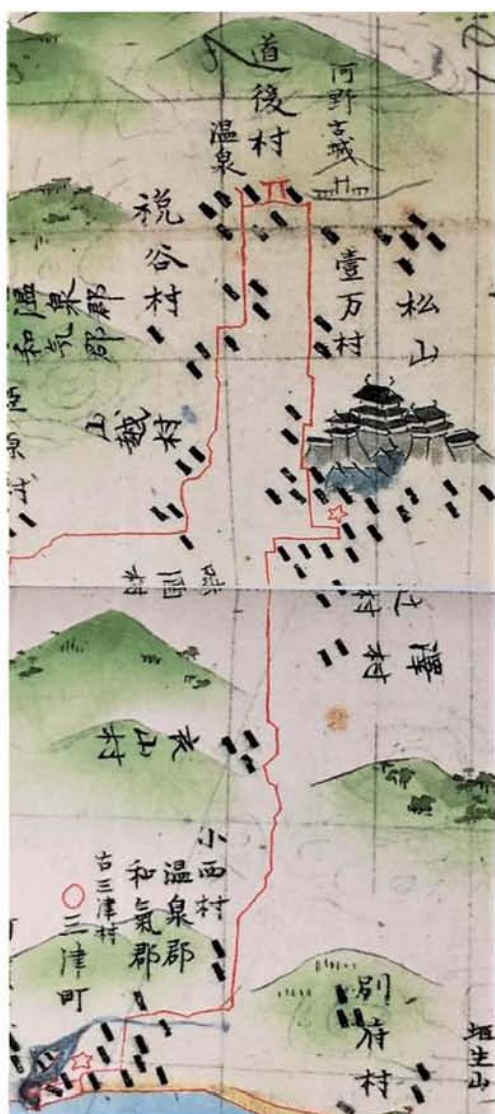
三津町を通り、両隊は九ツ半後に城下府中町（城山の西側。現、若草町付近）に到着。本陣「城下会所」に宿泊した。松山までの案内は松山藩の郡方下役・浦方下役と村役人が付き添い、城下の案内は町役人が担当した。会所の亭主役は大年寄和田屋政右衛門であった。当時、府中町の南端は松山城の西堀に接し、武家屋敷があったが、隣接して南北二つの奉行所が道を挟んで立地し、その北側に町会所が隣接してあったという。宿所の「城下会所」とはこの町会所のことであろう。

翌十二日は朝から晴れていたが、会所に逗留。

地図を作成し江戸の暦局へ書状を書いた。夜は天文測量。「輿地実測録」（国立公文書館蔵）には「松山府中町北極高三十三度五十一分半」とある。

十三日も晴曇であったが逗留し、地図を作成した。この延泊は、道後村に神事があるためと『柴山日記』は記す。

十四日、五ツ後、大曇の中、松山城下を出立し、府中町から呉服町、新町、清水町、水口町、一万



『伊能図大全』（河出書房新社）第3巻
246p、247p



中央が大天守、左側が小天守。見えないが左手に南北二つの隅櫓があり、十間廊下（渡櫓）で結ばれる。

村と道後村まで測量。松山城の北側を東に進むコースであった。

『測量日記』に、道後村入口右手に河野古城跡（中世伊予守護であった河野氏の居城跡、現在「道後公園湯築城跡」として整備）と八幡社があると記し、伊能大図にも「河野古城」が記載される。古跡と神社は忠敬の関心事であった。

四ツ後、本陣で温泉主（温泉場の鍵を預かる管理者）である明王院に到着。別宿は鹿島屋平吉方であった。『柴山日記』に、明王院は惣髪で身分は俗、「惣湯預り」とある。修験者（山伏）であった。

道後温泉は、寛永十五年（一六三八）、新藩主松平定行が施設整備に着手し、深さ約六五cmの浴槽を、高さ約一・三mの石垣で囲み、六つの浴室に分

けたという。当時、大屋根の惣湯の入口は東北側の東から「一之湯」(武士・僧侶用)、「二之湯」(女性用)、「三之湯」(庶民男性用)、南側に「十五銭湯」(武士の妻女用)、「十銭湯」(養生湯)(旅人・庶民用)の六湯があり、使用後の流れ湯で西端の外れに「牛馬湯」(家畜用)が設けられたという。温泉管理は寛文頃までは町奉行の下役が務め、次いで藩主別荘の御茶屋番が引き継ぎ、元禄頃から明王院が惣湯の鍵を預かり、明治維新まで続いた。明王院は宿屋株を握って入浴客の管理に当たり、また享保十九年(一七三三)に藩主別荘であった御茶屋が廃止された後、藩主の休息所にもなったという。測量隊の宿所本陣になった明王院には、そのような背景があった。

近年旧藩主家子孫の久松家で発見された江戸中期(元禄十六年〜享保七年頃)の「道後温泉絵図」は、中央に瓦葺きの温泉(惣湯)を描き、その左手(北側)に藩主別荘の「御茶屋」、手前(西側)には平屋の建物が両側に並ぶ「湯之町」があり、その北側町並の角、惣湯に面して「鍵屋」(明王院)を描いている。測量隊の別宿は、「湯之町」にあった旅宿であろう。

忠敬は温泉に関しては何も記していないが、『柴山日記』に、「一ノ湯、二ノ湯、三ノ湯、養生湯、十五銭湯、十銭湯、馬ノ湯、都合七湯也」とあり、この構成は、寛永年間の創建時と基本的に変わっていないようだ。柴山伝左衛門は「一ノ湯留湯」に幾度も入ったとある。また「名産 道後織柄糸、道後脇素麺」ともある。この素麺とは寛永十二年(一六三五)創業をうたい、現在も供される五色素麺のことであろうか。

十五日、朝から雨で逗留し、地図を作成。午後

雨が止むと、七ツ後、忠敬は八幡社(『柴山日記』に「湯月八幡、大社也」とある、現在の伊佐爾波神社)に参詣。翌十六日、測量隊は道後村を出立し、次の宿所辻町(松山市北条辻町)へ向かった。このように、城下町会所と道後温泉に計五泊しながら、ほとんど宿所で地図作成に従事した。この作業はおそらく測量データを整理し、下図作成に当たったもので、隊員の休息も兼ねていたと思われる。ここへ来る前、宇和島城下では、郡方一同の依頼に応じ、一日延泊して、おそらく宇和島藩領内の下図を作成し提供したが、松山ではそのようなことは『測量日記』にも書かれていないので、通常の下図作成作業であろう。

松山藩は十五万石(厳密にはこの頃十四万石)で、当時の城主は松平定則(松平家十代目)であった。松山城(国重文)は、市内中心部にある標高一三二メートルの勝山丘陵にある。本丸へ上るには、東側、東雲町側からの登城道に沿って設置されたロープウェイやリフトを利用すると便利である。筆者が乗ったロープウェイは、『坊ちゃん』に出て



戸無門と本丸太鼓楼



大天守より見た本丸と松山市内

くる「マドンナ」風装いの女性ガイドが案内した。上がって曲輪の左手、大手門跡を通り、戸無門から筒井門、次いで太鼓門をくぐると、正面突き当たりに連立式の天守閣が見える。これは奥の大天守と左

手前の小天守に、南北二つの隅櫓を配置して渡り櫓でつなぐという形式で、内側に中庭ができるという防御を考慮した特徴のようだ。もっとも、現在の天守閣は嘉永五年(一八五二)に四年かけて再建竣工したもので、伊能測量隊当時のものではない。実は、定則の父松平定国とのとき、天明四年(一七八四)一月一日の夜、天守への落雷から、火災となって焼失しており、測量隊が来た時、天守閣はなかった。勿論、測量隊は城内立ち入りを許されたわけではなく、城下町から城山を見上げて、櫓の一面が垣間見えるだけだったのである。

※【参考文献】

- ・『愛媛県の地名』平凡社、一九九三年
- ・『松山城』(財)松山観光コンベンション協会二〇〇七年
- ・『湯の町道後隅々案内』(株)エスピーシー、二〇一二年

丸亀城（香川県丸亀市）

河崎 倫代

伊能忠敬一行が丸亀城下に入ったのは、第六次四国測量の文化五年九月二十日（一八〇八年十一月八日）。『測量日記』によると、この日も二手に分かれて測量し、忠敬隊は四ツ前に丸亀城下に着いた。止宿先は通町の本陣高島勘右衛門。着後、郡方下役、町同心、町惣年寄、町奉行らが次々に挨拶に来た。本陣は屋号を「見附屋」といい、代々町の大年寄りを務めていた。一千坪の敷地には豪華な客殿と庭園があり、数々の著名人の宿泊所となったが、『測量日記』には家作に関する記述はない。現在、跡地には「史蹟 丸亀本陣址地」の石碑が建っている。『測量日記』によると、柴山伝左衛門らは別宿大島屋「吉蔵」宅だったが、『柴山日

記』では宗古町の大島屋「吉兵衛」と記している。七ツ頃より雨。夜は大曇りで天文測量はできなかった。高松藩の久米栄左衛門（通賢）が訪ねて来たが、夜も更けていたので会わなかった。翌二十一日は二手に分かれて金毘羅社領松尾町まで測り、本陣伊予屋半左衛門、別宿多田屋治兵衛宅に分宿。夜は曇っていたが五ツ頃に晴れて天文測量をおこなった。

二十二日は朝より晴天。『測量日記』には「金毘羅参詣。直に金光院へ立ち寄り座敷一覽。」とのみ記されている。しかし『柴山日記』には、忠敬、坂部、柴山、下河辺、青木の五名が麻の袴を着用して参詣し、初穂料を下役四人で「百疋」納めたこと、茶菓子が出されたことなどが書かれている。忠敬は寛政五年（一七九三）に久保木清淵らと共に、伊勢参宮と関西旅行に出た。その際の『旅行



『伊能図大全』（河出書房新社）第3巻 180p、182p



「石の要塞」といわれる丸亀城。壮大な石垣と三層三階の天守は城下からも望めた。2018年7月の西日本豪雨とその後の台風で、城の南側にある三の丸とその下段の帯曲輪の石垣が大崩落し、現在、修復中である。丸亀城の顔ともいえる大手門側の石垣に被害はなく、通常通りの見学ができた。



“五人百姓”の露店と
「加美代飴」



白い傘の下で
名物の「加美
代飴」を売る

『記』によると、金毘羅参詣のため乗船したが、風向きが逆で波も荒かったので参詣を諦め引き返したという。十五年ぶりに金毘羅詣でが叶ったというのに『測量日記』の記述は随分と簡略である。参詣後、無測量で丸亀城下へ引き返し、各々前宿に止宿。宿へ久米栄左衛門が訪ねてきた。まもなく始まる高松藩領測量の打ち合わせだろう。夜は晴れて天文測量ができた。『輿地実測録』（国立公文書館蔵）には「丸亀福島北極高 三十四度一十八分」とある。



五つの露店があった。本来は商売禁止の境内だが、神事への功勞により昔から特別に営業を許された「五人百姓」だ。『柴山日記』にも「名物、薄く述（延）し飴あり」と記されている。測量隊一行も買ったのだろう

か。
金刀比羅宮参詣を終えて、JR土讃線・予讃線を乗り継いで丸亀に向かった。駅から徒歩十五分くらいで丸亀城正門に着く。城跡は亀山公園として整備され、天守までは急勾配の坂道を七、八分歩かなければならない。途中「日本一」の高さを誇る石垣がそびえる。天守は三層三階。「日本一」小さいとされ、高さ十五呎。城下から大きく立派に見えるように、正面（北側）は幅十一呎、唐破風や入母屋破風を施しているが、西側は幅九呎と狭く、装飾も一切ない。昭和十八年に重要文化財に指定されている。小さな天守からは丸亀市内が一望され、瀬戸内海や瀬戸大橋、讃岐富士を望むことができる。

【余話】



讃岐と言えば「讃岐うどん」ということで、「うどん学校」に体験入学してみた。粉を練り、足で踏み、麺棒で延ばして切り、茹でて食べる。約30分の行程。肝心なのは、季節によって塩分濃度を変えらるることと「踏む」と。軽快な音楽に合わせて、仲間が囃し立てる中で、踊るように「踏む」。終了後は、卒業証書・うどん作り秘伝帳・古地図が一体になった掛け軸と麺棒がプレゼントされる。上手にマニュアル化された楽しいひと時だった。おススメです。



塩水 = 小麦粉 × 4.2% (冬)	塩水	1	15
(Softener) 中力粉 4.4% (春秋)	冬	1	15
Cached Year 4.6% (夏)	春秋	1	11
250g × 4.4% (中力粉) = 110g	夏	1	9

※参考文献

- 山下景子著『現存十二天守』幻冬舎新書二〇一一年
- 佐久間達夫「伊能忠敬、旅先で方位や緯度測定」『伊能忠敬研究』五十七号二〇〇九年

令和の伊能大図制作

令和の伊能大図をつくる会 横溝 高一

1 はじめに

付録の地図はアメリカ議会図書館蔵伊能大図（以下、アメリカ大図）を基図として、後述するとおり国立国会図書館蔵伊能大図（以下、国会大図）等を参照しPCで着色、図1のように90号を中心に89号、93号、97号、99号の部分と接続しています。2019年に故渡辺一郎さんと仕様を決めながら試作を開始しました。渡辺さんは今年の記念事業までに35図を制作したいと言われました。横溝1人では制作は不可能であることを認

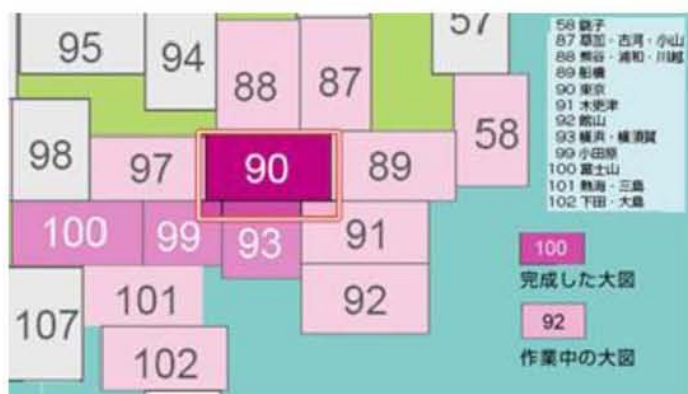


図1 第90号を中心とした伊能大図一覧

識され、稲葉さん、竹村さんの応援を得て計36図に着手しています。ただし横溝の着色作業がボトルネックで、5月末現在4図の完成に留まっています。

2 いま、何故、伊能大図をつくるのか

『伊能図大全』（2013.12 河出書房新社刊）編集の中から掲載大図に上呈図とは乖離があり、横溝が細々と修正を兼ねて着色をおこなっていました。フロア展着色図と同様にAdobe Photoshop（以下、フォトショップ）を使用している着色で187号福岡、188号佐賀・久留米、189号日田、190号佐世保、62号秋田（着色順）で、渡辺さんには見せていました。2017年10月に高知新聞から制作依頼を受け、渡辺さん監修のもと、土佐國（高知県）部分



図2 平成の伊能大図 土佐國

の大図5枚半の着色を引受けました。187号福岡等の図群より完成度が高まり『平成の伊能大図』としています。その後、大々的に作成しようとして渡辺さんから提案があつて、現在に至っています。

2020年2月19日富岡八幡宮で行った記者発表で渡辺さんは「2021年は伊能地図上呈200年記念にあたります。アメリカ大図を基図として、国会大図他を参照し、近年のPC技法で現存大図の欠点を補い、伊能大図を制作したいと考えて『令和の伊能大図をつくる会』を発足しました。昨年からは試作を始めた一部をご覧にいます。まだ3図だけですが、ご声援、ご協力をお願いします。」と述べられました。記者からの「完成は何時になるのか」との質問に、「10年後を見込んでいます」と応えられました。渡辺さんは100歳まで生きるつもりだと、頼もしくもありましたが、あと10年あれこれ指示されるのは「うんざりだ」と思ったものです。

アメリカ大図、国会大図とも明治初期に複写され、誤りも多く、上呈図とは異なる『明治の伊能大図』であることから、新しく制作する伊能大図は『令和の伊能大図』としました。

3 制作方針

これまでの大図制作や試作、伊能図大全の編集、デジタル伊能図等の閲覧等の経験でアメリカ大図、国会大図は以下の長所、短所あります。

①アメリカ大図を基図とすると著作権フリーで自由に使えるメリットがある。

この長所を活かし、教育現場における教材としての要望に応えたいと思っています。

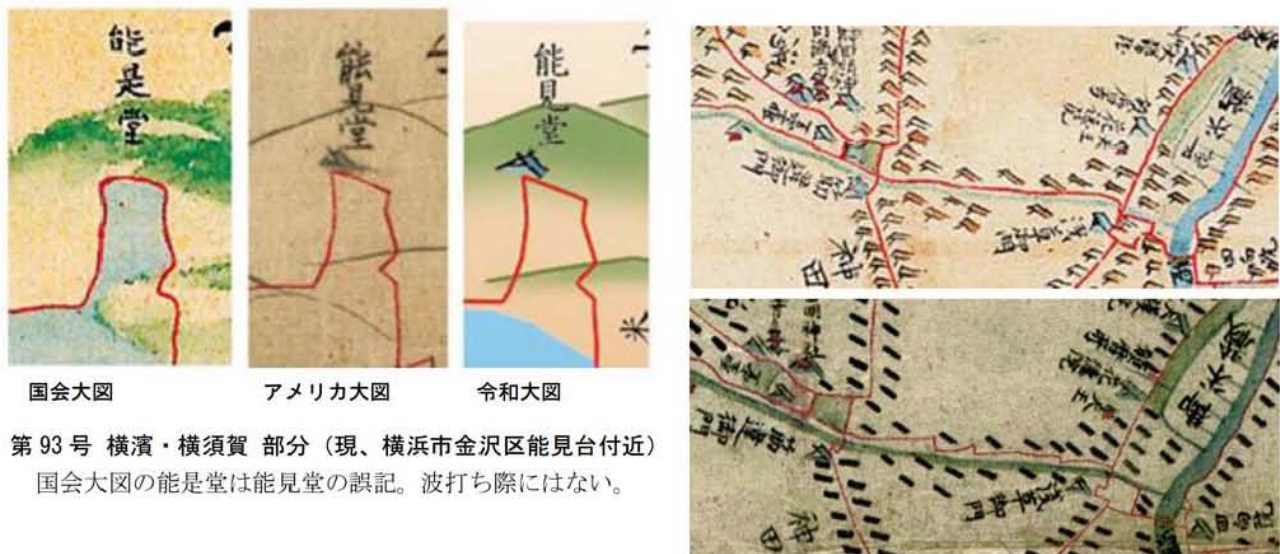


図3 国会大図（上）とアメリカ大図（下）の測線の差

④アメリカ大図には幕府関係者（譜代大名、旗本）、寺社等の所領の記載がない
国会大図には千駄ヶ谷村、代々木村に寺社領が



図4 天測地点

右のアメリカ大図には☆印が描かれている（深川の隠宅）。
「永代橋」は判読し難い。家並みは ■ で描かれている。

②アメリカ大図の測線、海岸線は上呈図をほぼ忠実に複写している
国会大図の測線、海岸線は粗雑に描かれていて、写本としては不正確です。
国会大図は筋違御門から浅草御門まで直線で、浅草橋が2本架かっているように見えます。
③アメリカ大図には天測を行った地点の☆印が、ほぼ描かれているが、国会大図はまったく描かれていない図がほとんどである
アメリカ大図も沿海実測録や北極高度測量記を見ると描き漏れがありますが、追加で描くことはしません。

⑤両図とも地名等の表記ミスが散見される
『測量日記』、『伊能図大全地名索引』、『角川地名辞典』、『地理院地図』を参照して修正する。ただし誤っていても測量日記にしたがう。測量日記に誤りが発見された場合は、忠敬さんの誤記として作業記録に残す。
※本誌添付地図中の「津久井郡」は、当時の資料、測量日記を精査したところ、「津久井縣」が正しい表記であることを確認しました。
訂正してお詫び申し上げます。

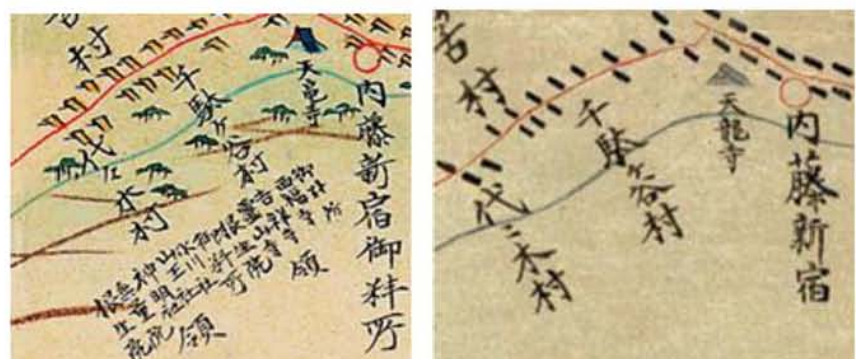


図5 国会大図（左）の寺領の記載

記載されているがアメリカ大図にはありません。国会大図を参照して記述します。

⑥ 沿道風景は国会大図の方が圧倒的に綺麗
国会大図、山口県文書館蔵伊能大図（以下、毛利大図）、松浦史料博物館蔵伊能大図（以下、平戸図）を参考に着色する。

⑦ 交會法の目標としたランドマークには+がある
（国会大図には全く記載なし）
上野の寛永寺中堂の屋根に+が描かれています。



図6 相模國津久井縣（左は国会大図、右はアメリカ大図）

本誌に添付の地図は「津久井郡」としましたが、「津久井縣」の誤りでした。訂正してお詫びします。

⑧ 地名、所領等の文字のコード化
江戸府内から目標となっていたのでしよう。その南には黒門が描かれています。長津田村の古城跡（横浜市緑区長津田）にも+が描かれています。

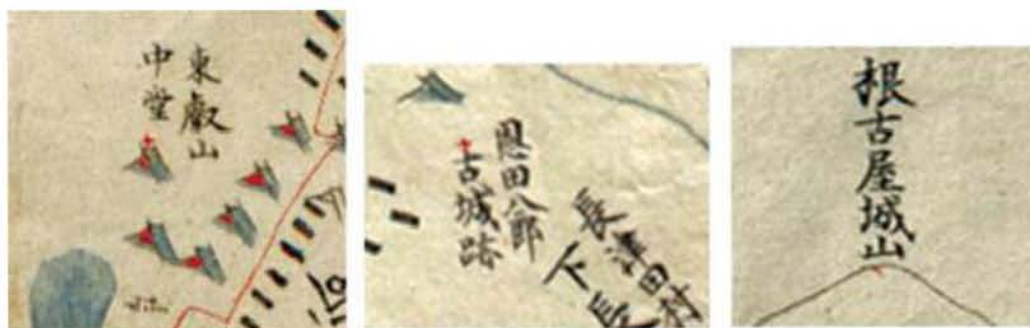


図7 交會法の目標

山頂は+印が多いが、これも交會法の目標と思われる。

令和の伊能大図の最大の特徴は地名等の文字をコード化したことです。一般にワープロソフト（Microsoft Word等）で文章を書くように、PCのソフトウェアで記述していることです。ただし記述はAdobe Illustrator（以下、イラストレータ）で、アメリカ大図に記載されている字体に似た「HG正楷書体PRO」（ベクトルフォント）で記載しています。この方式で地名等の誤記を修正でき、さらに現代人には読み易く、川筋等に記載された名称などが判読できるようになりました。また、ベクトルフォントであるため、拡大、縮小しても文字品質を保てることです。付録の伊能大図の文字は全て読めるはずです。さらに近い将来AI技術の進歩で、例えばフランス中図に書かれているような達筆の字体に置き換えることができると思っています。

4 沿道風景の描き方

国会大図は写本としての正確さでは劣りますが、一見してアメリカ大図より非常に綺麗です。そこで毛利大図、平戸大図、さらに九州沿海伊能大図（東京国立博物館蔵。以下、九州沿海図）に倣ってフォトショップで描いています。作業中は100レイヤ以上になりますが、最終的には20レイヤ程度にまとめて、レイヤ単位に修正できるようにしています。

4.1 家並、寺社等の描画

アメリカ大図の家並は図4で示した通りです。国会大図に倣い図8のようにアイコン化しました。神社仏閣、陣屋など民家とは異なる大型の建物は新しい表現が登場する毎に描き、アイコン化も

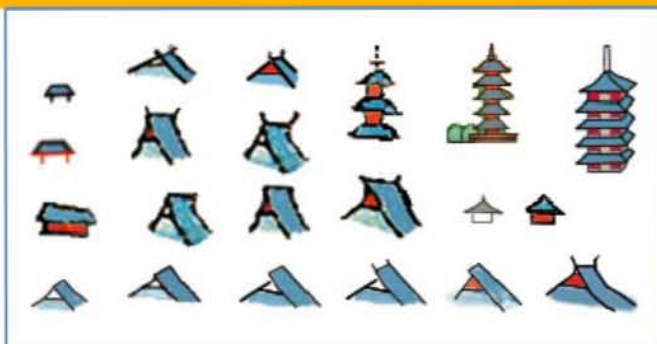


図9 神社仏閣



図10 地図合印



図8 家並

しています。初期よりだんだん上手くなっているのが自分で分かり、いずれ置き換えなければならないと思っています。

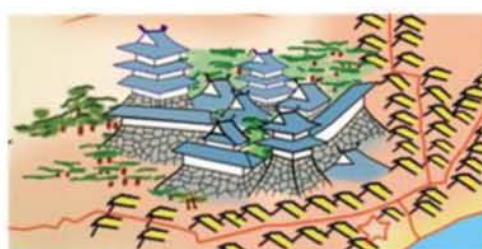


図11 小田原城と城下（アメリカ大図（左）と令和大図（右））



1 高知城



9 川越城



37 新宮と城下



49 松代城下

図12 城郭の描画

番号は制作順で、1 高知城は瓦だけ着色、9 川越城、37 新宮と城下あたりから城内に樹木を描くようになりました。

4.2 城の表現

添付地図の江戸の大図に江戸城は描かれていませんが、全国をカバーする214枚の大図には127ヶ所に城が描かれています。国会大図などの着色された図を参考に現在49城を描いています。

4.3 山を描く

図13の下が90号「江戸」、上が100号「富士山」での山の描き方です。100号は描いた山が1500mを超える高山が多く、江戸の低山とは表現を変えました。当然ながら渡辺さんからは「上のようにペンタツチで全図、描くように」と。描く時間が下の2倍以上かかるため、課題としています。

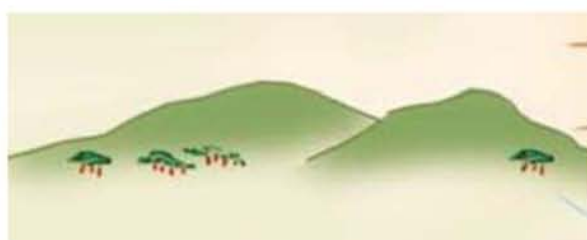


図13 山を描く

4.4 富士山の色

通常「富士」と表記しますが、忠敬さんは例外なく「富士」です。稲葉さんから90号、100号全て

小田原城および城下は図11の通りです。9城目の川越城には石垣が描かれており模倣し、見栄えがよいので、以降描くことにしました。城の規模にもよりますが、石垣の描画だけでもまる1日かかることがあります。

宝永火口が随分小さいのが横溝の印象で、国会大図の宝永山より火口を目立つようにしましたが、渡辺さんからは「忠敬さんが見たのは噴火から1



図14 富士山の山肌の色違い

見直して修正の指示がありました。富士浅間社等も対象でした。
渡辺さんと横溝で、富士山の山肌は緑か青かで互いに譲らず以下のやり取りがありました。
渡辺「緑の富士山の方が綺麗だ」
横溝「そうは思わない。北斎の富士山は例外なく青です」
渡辺「上呈図は緑だったはず。国会大図が緑の理由」
横溝「明治の画家の印象で緑にした。稲葉さんや私の周りは皆青が良いと言います」
渡辺「自分の目の黒いうちは緑にせよ」ということで現状は図の通り緑富士です。



図15 樹木と田圃

4.5 樹木や田圃の表現
最も時間が掛かるのが樹木の描画です。地図にとって実際にその位置にあった木であるならランドマークとして意味があります。国会大図をみるかぎり、重要なオブジェクトとは思われません。ところが樹木、田圃を画かないと、地図がつまらないものになるのです。134号奈良がこの理由で公開を見送りしました。
土佐國着色は159号高知からはじめ、渡辺さんから一つ山には1本は木を描くようにと指示され、言われなくとも思いますが1本じゃバランスがとれないので最低でも図13のように樹木を描いています。画家の方はスイスイ描く

00年、現在は300年、変わっているだろう」「宝永火口を正面にした絵画や写真はほとんど見ないが、あんたのようにはこだわる必要はない」
渡辺さんが亡くなり、適当な時期に青富士にするつもりです。

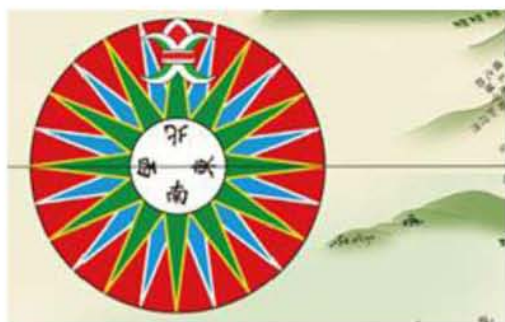
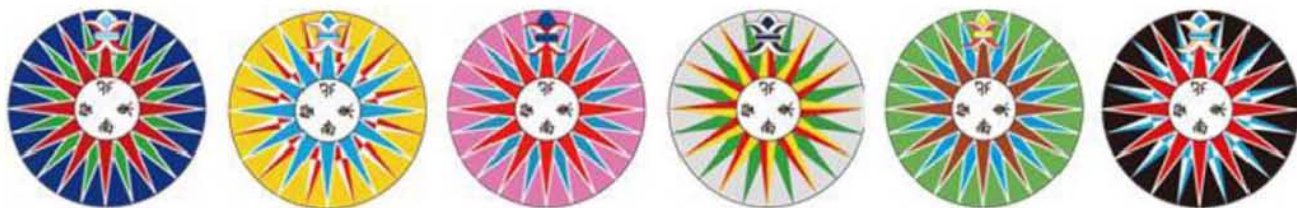


図16 コンパスローズ

4.6 コンパスローズの再現
隣接図との接続位置を示すコンパスローズ（忠敬さんは接続符号と言っていたか？）は毛利図、松浦図に倣い再現しました。国会大図は全て黄色のベースになっていますが、毛利図、松浦図の1図中のコンパスローズは全て色が違っていて24方位で画かれ一目瞭然です。当時は手書きであるため214図、全て違っていかもしれません。
このコンパスローズは平成の大図で制作し、令和の大図では40種程度を使いまわしています。

のでしようが、素人ではそうは行きません。熟練すれば素早く画けるようになると思われませんが、現時点では作画に手間がかかり大きな課題です。
平戸大図には松原が描かれ、九州沿海図には杉並木が描かれており、上呈図を想像すると気が遠くなっています。
国会大図に画かれている田圃（水田だけでなく陸稲も）は『東海道分間延絵図』も同様の表現であることから、当時は一般的だったとして図15下のように描いています。アメリカ大図しかない図は課題です。



5 まとめ

令和の伊能大図の作成イメージは分かかって戴けたと思います。現在作業しているメンバーは全員70歳以上で、渡辺さんの年齢まで、頭脳明晰に生きられる保障はありません。後継者を育成しなければならぬと思っています。着色に使用するソフトウェアは高価であり、一部の機能しか使っていませんが、動作PCもそれなりの性能が必要で、ハードルが高くなっています。それでもやりたいと思われる方は大歓迎です。ZoomのKnow Howを伝授できると思っています。また着色は無理だけど制作中の地図(図17)のチェックは出来るという方の参加も大歓迎です。地元の地図は地元の方たちにチェックして戴くのが良いと思っています。

令和の伊能大図の一般公開は「伊能図完成200年記念の集い」の江東区文化センターと保土ヶ



谷区役所（横溝の地元）で限られたものでした。見て戴いた方たちから「伊能図はこんなに綺麗だったの」

「本物は火事で焼けてしまいましたが、比べものにならないくらい綺麗だったはずです。妥協をしない伊能測量チーム、手抜きをしない江戸の絵師達が、高価な和紙に画いたもので、想像できると思います。」と応えていました。

また地元に住んでいる方ならではの地名の誤り、地図上の表現等の指摘や質問がありました。その場で応えられないものもありましたが、指摘事項は調査して、誤っていれば原図を修正しています。これも令和の伊能大図が電子データであることのメリットです。

新しく5月19日に伊能小図（副本）発見の発表があり、びっくりするとともに渡辺さんが生きていたらと残念に思いました。

生前から「国内で伊能図が発見されたら、何を置いても駆けつける」と事ある毎に言われていました。ゼンリン小図の発見は昨年の7月だったとありました。渡辺さんとの最後の電話は6月19日12時頃で30分話していました。令和の大図の進捗状況、渡辺さんの遺稿となった『伊能忠敬の日本地図』（渡辺さんは『忠敬と伊能図復活物語』とされていました）の掲載画像の確認などで、遺言めいたことは言われませんでした。もし6月初めにこのニュースを渡辺さんが知っていたら「きつと生き返った」と思っています。

※「津久井縣」の呼称について
(編集子)

吉田東伍著『大日本地名辞書』昭和46年増補版（富山房）の第五卷「甲斐国津久井郡」の項に新篇相模風土記を引用して次の記載がある。

北条役帳にも「奥三保十七村、田一向無之、何も山畠迄也、千木良、与瀬、吉野、沢井、佐野川、小淵、日連、那倉、牧野、青根、鳥屋、青山、若柳、三加木、中、長竹、大井等なり」と記し、また保内とも題し、其辺住居の諸士を津久井衆と闔称せり、按ずるに、鎌倉將軍の頃、築井太郎、治郎義胤、相模川の東岸、宝峰（長竹村の属）に城郭を構へて居住し、其辺を築井領と闔称せしと云、是區別の権輿なるも知るべからず。かくて其後、正保中の改定に、彼津久井領の地全く分ちて津久井郡としけるが、元禄四年に至り、山川金右衛門奉はり、更に改正して津久井県と称す。

明治期の模写図における山の表現

菱山 剛秀

はじめに

今年は、伊能図が幕府に上呈されて200年目に当たる。伊能忠敬の測量の拠点となった東京都江東区では記念の行事も行われ、九州では国内2例目という伊能小図の発見もあった。

一方で、幕府に上呈された伊能図や、伊能家に残されていた控図は、明治以降の火災や震災により消滅したとされ、伊能隊の手になる大図は、地方の大名などの要請で提供された限られた地域のものだけである。

伊能図は明治時代に新政府の下で需要が高まり、当時の複数の政府機関で模写が行われた。それも国内に残るのは、国会図書館に所蔵されている関東周辺の一部と旧海軍が模写したとされる海上保安庁が保有する一部地域に限られる。明治期の模写は陸軍の記録にも残されており、平成13年に当研究会の名誉会員であった故渡辺一郎氏が米国の議会図書館でこの模写図（「アメリカ大図」）を発見した。その後、この模写図はデジタル化され、国会図書館所蔵の模写図（「国会大図」）とともにWeb上で閲覧可能になっている。

この2種類の模写図は、いずれも当時の記録から伊能家の控図を模写したものとされているが、各図を子細に比較すると、地図の表現や文字の筆跡だけでなく、測線や海岸線の形状、地名の注記などに若干の違いが認められることが分かっている。ところが、地図に描かれている山の表現は、彩色が施されているか山輪郭を線で描いたかの違

いのみが注目され、位置的な差があることには注目が及んでいなかったように思われる。



図1 左から、地理院地図、国会大図、越後奥地全図の比較

「国会大図」に描かれた山の位置

新潟在住の会員から伊能図と同時期に作製された「越後奥地全図」という国絵図について情報を提供いただいた。この図の研究者である亀井(2017, 2018)によれば、この図は、江戸時代の代表的な測量術とされる「清水流」を学んだ草間文績や内藤多助の測量に基づいて作製されたもので、それまでの国図に比べ極めて精度が高いという。そこで、現在の地理院地図を基準に、国会大図と位置の精度の比較を試みたところ、図1のように山の表現はデフォルメされているものの、相対的な位置関係は地理院地図とよく整合することを確認した。

地理院地図と伊能図、越後奥地全図のいずれも山の相対的位置関係がよく対応する中で、国会大図に描かれている弥彦山の位置だけが大きく北にずれていた。このずれの原因が伊能隊の測量の精度によるものなのか、明治期の模写方法によるものなのかを検証するため、アメリカ大図とも比較してみたが、図2に示すように、アメリカ大図の弥彦山の位置は、国会大図ほど大きなずれは認められなかった。このため、国会大図の弥彦山の位置のずれは、伊能隊の測量によるものではなく、明治期の模写によるずれであることが想定された。これまで、国会大図とアメリカ大図の山の表現の違いは、彩色が施されているか輪郭線だけで描かれているかといった描き方の違いが注目されていたが、描かれている位置にも差異が認められることが明らかになった(図3)。こうした差異が生ずる原因としては、模写方法の違いが考えられる。

国会大図は、骨格となる測線を原図から移写した後で、山景は見取りにより絵画的に描いた可能

性が高いと考えられる。一方、アメリカ大図は、測線の移写と同時に、基図から山の輪郭を直接移写したものと考えられる。両図は、模写方法の違いから、山の絵画的な表現は国会大図の方が原本に近く、位置の正確さはアメリカ大図の方が原本に近いと考えられ、模写図の作成目的の違いが模写方法に反映されたのではないかと思われる。

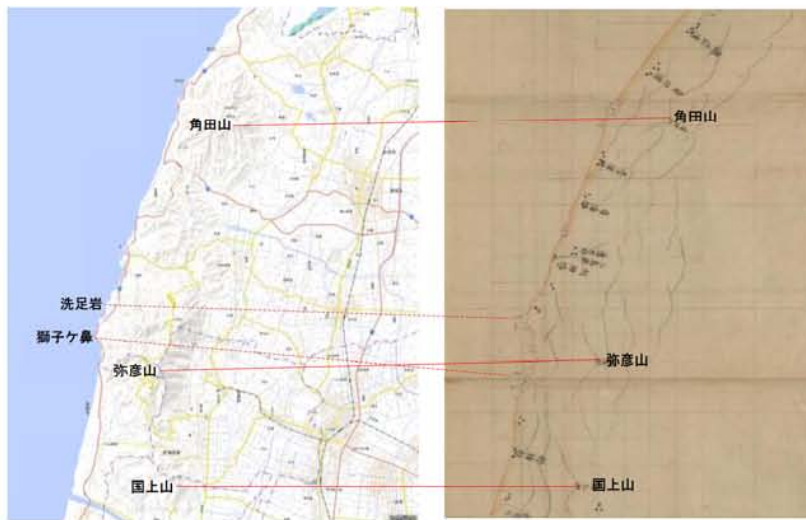


図2 地理院地図（左）とアメリカ大図（右）の比較

なお、両大図とも弥彦山西側の海岸線の形状が地理院地図と比べるとずれが見られるが、両図間ではずれは無く、アメリカ大図は、海岸を未測量の線で描いている。この箇所は海岸が急崖のため、

海岸線を測量できずに既存の地図等を参考に描き入れたと考えられ、模写の際のずれではなく、現地の測量ができなかったことによるものである。

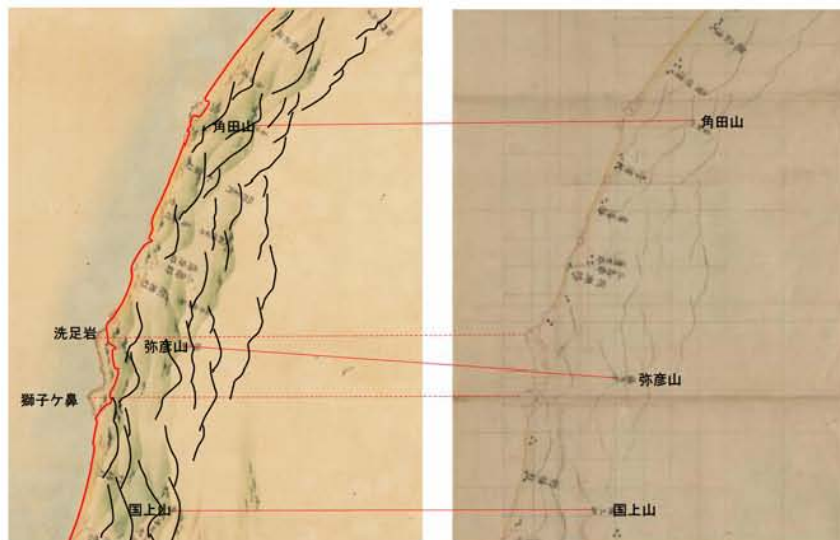


図3 国会大図（左）とアメリカ大図（右）の山の位置
国会大図にアメリカ大図の山形を重ねて比較

模写図の課題

明治期に陸軍が模写したアメリカ大図は、原図と異なると考えられる箇所が指摘されている。

山形県の象潟付近は、伊能隊による第三次測量後の文化元（1804）年に発生した象潟地震による海岸付近の隆起が知られていた。伊能忠敬記念館が所蔵する測量当時のものと考えられるこの付近

の大図（記念館大図）は、アメリカ大図の海岸線と異なり、湖水と海が水路で繋がっていることから、アメリカ大図は、象潟地震による海岸線の変化を反映したことが推測される（図4）。



図4 象潟付近の大図
（上）アメリカ大図
（下）記念館大図
朱破線はアメリカ大図の海岸線

伊能図の原本ともいうべき、上呈図やその控図が現存しないことから、伊能図の研究には現存する模写図を参照するしかないが、後世の模写図には、模写の目的や方法により原本と異なると思われる表現があることに注意する必要がある。

文献

- 亀井功 2017 文人の測量家内藤多郎助
- 亀井功 2018 在野の地理学者草間文績…合理精神越後を歩く…二〇〇年も早く生まれてしまった男…日本一の『越後輿地全図』を作った男

画像データ

越後輿地全図：新潟県立文書館「文書館だより」

第17号（2012）

国会大図：国立国会図書館デジタルライブラリ

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1286626?tocOpened=1>

アメリカ大図：伊能忠敬e資料館

https://inoarc.tokyo/02dataRm/inoh_map_check/ino_dai-zu.php

記念館大図：伊能忠敬記念館

<http://www.city.katori.lg.jp/sightseeing/museum/>

銅像建立と広報の必要性

日本地図の第一歩は吉岡から 伊能忠敬

北海道福島町 中塚 徹朗

伊能忠敬翁没後200年の平成30年(2018年)、私の住む北海道福島町吉岡の地に測量姿の伊能翁の銅像が誕生した。建立者は福島町鳴海清春町長。伊能研の地元会員である私は、当時名誉代表の故渡辺一郎先生に銅像建設の御指導をいただくべく、僭越ながら町とのパイプ役を仰せつかった。銅像作家には酒井道久先生をご紹介いただき、お陰様で4月27日、伊能洋先生御臨席のもと除幕式が盛大に執り行われ銅像完成を祝った。

だが、不思議なもので銅像ができてしまうと、「なぜ銅像が建ったのか?」という疑問の声が町内各所から聞こえてきた。町は議会や回覧板等で銅像建立を町民に説明していたし、なんと言っても銅像には伊能翁による当地上陸と蝦夷地測量開始のいきさつを渡辺一郎先生に十分に紐解いていただいた解説板が添えられている。しかし、より多くの町民に理解を得るためには、もっと分かりやすい新しい広報の必要性が感じられた。同年6月、タイムリーにも福島町教育委員会(現在、小野寺則之教育長)は、町の歴史をわかりやすく振り返る『北海道ふくしま歴史物語』の町民全戸配布事業を立ち上げ、編集委員長に私(福島町史研究会会長)が任命された。編集方針は、福島町にゆかりのある人々の挑戦と活躍の足跡を、絵や資料を用いてわかりやすく子供たちや町民の皆さんに理解していただき郷土愛を育むこととし、できるだけこれまで知られていないローカルな内容で表現

することとした。当町が誇る「国民栄誉賞に輝く横綱く千代の富士」物語をはじめ計8本のテーマで歴史物語全体は構成されているが、ここではそのうちのひとつ「日本地図の第一歩は吉岡から 伊能忠敬」について、簡単に、お知らせしたい。1800年(寛政十二年)江戸を出て奥州街道から三厩へ至った伊能測量隊一行は、蝦夷地吉岡(現福島町吉岡)に運ばれ上陸した。翌日、最初の蝦夷地測量が開始される。これを記念し、没後200年の年に測量姿の銅像は建てられた。

さて、この「歴史物語」の中で「伊能忠敬の銅像はなぜ建ったのか?」という疑問に分かりやすく答える工夫をいくつか用意した。漢字の少ない文章表現はもちろんのこと、一枚の絵に、銅像・地球・星座、そして当町地名の入った伊能大図をそれぞれ配置して作家に描いていただいた。銅像の下には子供達との教育の現場風景も書き入れ、当町における伊能測量の実際と意義が一つの絵で分かるように工夫した。(絵1)。また、史実を示す写真資料を読者の目で確かめていただく工夫をした。その価値が分かれば銅像建設の必要性や意義も自然と理解されるだろう。町内で銅像建設の気運が高まったのが2017年、ちょうどこの年の11月、私は香取市の伊能忠敬記念館を訪問させていただいた。記念館では福島町と関連のある書状・日記・下図・地図など21点の国宝を見せていただき許可を得て写真に収めていた。この中に、今回本文に掲載できた当町上陸場所(吉岡川)を示す長男景敬への忠敬翁書状があり、そして、蝦夷地測量の第一歩を記した忠敬先生日記があったのだ。また、当町の地名を数多く記した幕府へ提出した伊能図も掲載できた。このように編集委

員会の様々な工夫のもと『北海道ふくしま歴史物語』の「日本地図の第一歩は吉岡から 伊能忠敬」は完成した。



右から2番目の絵が「伊能忠敬」

さて、この本の全戸配布がいま完了し、「伊能忠敬翁の銅像がなぜ建ったのか」と疑問に思う町民の皆さんへ着実に理解が届いただろうか?

伊能銅像建設と「歴史物語」編集作業に関わった一人としてその効果達成を願わずにいられない。

本文完成をご支援くださった戸村茂昭会員と今回執筆の機会を与えて下さった河崎倫代理事にこの場をお借りして感謝申し上げます。

なお、本文は「北海道ふくしま歴史物語」で検索するとWEBで閲覧できるのでぜひご覧ください。(文中の写真、資料が掲載されています。)

<http://www.town.fukushima.hokkaido.jp/book/html5.html#page=1>

伊能図完成二〇〇年記念 「伊能ウオーク」開催

九州支部 馬場 良平

はじめに

昨年の夏、伊能忠敬研究会会報担当者から「地元図書館・公民館等で『伊能図完成二〇〇年記念』のミニ展示会などを企画していただけないか」というお話をいただきました。

私自身は「伊能図完成二〇〇年記念」で何かをしなければという思いはありましたが、何分コロナ禍であり、決断が出来ずにいました。今年に入り、企画展の提案はともかく「伊能忠敬測量隊が残した足跡を辿って、その業績を顕彰しなければいけない」との思いは日増しに募っていました。

一、「伊能ウオーク」開催

令和三年三月、やっと重い腰を上げて伊能忠敬の業績を顕彰する「伊能ウオーク」を開催することになりました。「伊能図完成二〇〇年」記念イベント「新型コロナウイルス感染症退散祈願」「伊能ウオーク」と題して、伊能忠敬測量隊が肥前国測量時に参詣した神社三社を巡る「伊能ウオーク」

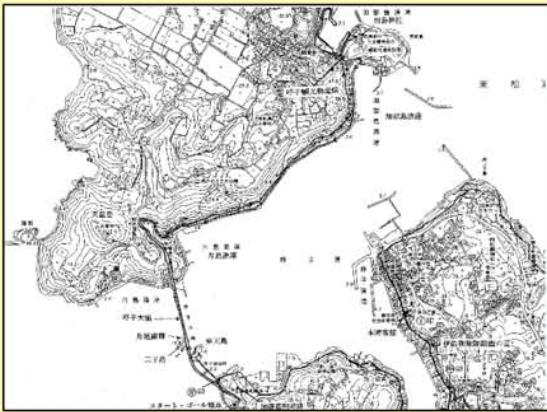
です。

- ① 第一回目令和三年四月一日 唐津市呼子町加部島・田島神社
- ② 第二回目令和三年五月九日 三養基郡基山町宮浦・荒穂神社
- ③ 第三回目令和三年六月一三日 杵島郡白石町辺田・稲佐神社

いずれも、伊能忠敬測量日記に詳しく記述されている処です。

二、第一回目「伊能ウオーク」

四月一日(日)第一回目の「伊能ウオーク」・田島神社は、天気にも恵まれ、コロナ禍の中でも五〇名の参加があり、呼子大橋を渡って加部島へと向かいました。呼子大橋は橋梁延長約七二八mあり、加部島振興の農免道路として



田島神社への行程図・当日配布資料

開通した橋ですが、風光明媚な呼子町のシンボルとなっています。呼子が交通の要衝地として発達してきたのは、加部島が呼子湾の沖に位置し、天然の防波堤としてあったからだと言われています。



伊能図重ね合わせ図

文化九年(一八二二年)八月一七日二手に分けて筑前国から肥前国入りした測量隊は、神功皇后社(現在玉島神社)へ打上、両手はここで合流して神功皇后社へ参詣して、肥前国測量の第一歩を印しています。その後、伊能忠敬測量隊一行は、唐津城下から東松浦半島を北へと進み、呼子浦や名古屋村に逗留して、小川島、加部島、松島、加唐島、馬渡島など玄界灘の島々を測量しています。

八月二三日呼子浦に入った伊能本隊は藩主の御茶屋にて昼食後、弁天島へ渡り、弁天島一周一

丁十八間五尺(約一四三m)、また、二子島へも渡り一周一丁二十三間(約一五一m)と記しています。加部島へは八月二四日小川島測量後、二五日は高島測量後、二七日には名古屋浦入江奥測量の前と三度に分けて渡っています。二五日には田島神社へ打上、測量日記に田島神社の祭神、創建、鳥居のことなど詳しく記しています。また、二七日には別隊が田島神社へ参詣しています。

田島神社は肥前国四式内社のひとつに数えられる格式ある神社で「名神大」の格があり、「佐賀



田島神社をバックにマスク着用での参加者

県神社誌要」の第一ページに掲載されるほどの肥前国で最も古い神社の一つとして知られる由緒ある神社です。また、松浦佐用姫伝説の佐用姫神社を祀っています。

田島神社のことは測量日記に「・・・外に田島神社へ打上四十間。田島神社式内祭神湍津姫命田心姫命市杵島姫命三座、外大山祇命稚武王命、天平三末年鎮座、華表に天元三庚辰年縣令波多氏修造之と。文化壬申迄八百三十三年になる。又、佐与媛社御朱印百石、神主平野内藏丞望夫石あり。此地にてヒレフス山と云・・・」と記しています。

田島神社では、呼子地区春祭りのため、宮司不在で「コロナ退散」祈願祭は行うことが出来ませんでした。参加者全員による合同参拝をいたしました。

田島神社参拝を済ませて帰路、呼子大橋の袂から弁天島遊歩橋へ下って弁天島の女島に渡りました。北の男島には潮の加減で渡ることは出来ませんでした。伊能測量隊が足跡を残した弁天島に立つことが出来て、参加者は大いに満足された一日となりました。

た。



弁天島遊歩橋をゆく御用旗

三、第二回目「伊能ウオーク」

五月九日（日）第二回目の「伊能ウオーク」・荒穂神社は、大型連休明けのコロナ感染症の拡大傾向の真直中にあり、中止すべきか大いに悩みました。高齢者の方々には、事前に「参加はご自重下さい。」とのメールを送るなどコロナ対策をして開催しました。開催当日集合場所の基山駅には、コロナ禍にもめげず二〇名が集まりました。伊能忠敬研究会古参の河島悦子様も参加していただきました。



基山町・荒穂神社への行程図

荒穂神社は伊能忠敬測量隊が街道測量の途中、街道をはずれて足を延ばして参詣した神社で、肥前国四式内社のひとつに数えられる格式ある神社です。

荒穂神社のことは、文化九年九月二五日の測量日記に「・・・荒穂社、打止二十六町三十間。荒穂神社、式内祭神一座、彦火々出見尊、瓊々杵尊、相殿、加茂八幡、住吉宝満、春日和魂、別雷、孝徳帝大化年中基肆山に鎮座、天正十七年為兵火、炎上して其後此所に移すという。社人禾田美作守・・・」と詳しく記しています。



荒穂神社への道
(伊能図重ね合わせ図)

荒穂神社では「新型コロナウイルス感染症」退散祈願をしていただきました。祝詞奏上では文化九年九月二五日伊能忠敬測量隊が荒穂神社へ参詣したこと、「伊能図完成二〇〇年記念イベント」・「新型コロナウイルス感染症」退散祈願「伊能ウオーク」のことなどを読み上げていただき、参列者一同大変感激しました。

梶田（のきた）宮司は伊能忠敬測量隊が参詣したことはご存じでなく、われわれの訪問を「鳥肌が立つ思いで待っていた」と挨拶されました。何より宮司が自分の先祖の名前が「社人禾田美作守」として、伊能忠敬測量日記に記してあったことに、感慨深いものを

お持ちでした。伊能忠敬とのご縁で二〇〇年の時空を超えて新しいドラマが生まれました。



荒穂神社の宮司も入り記念写真

四、第三回目「伊能ウオーク」

六月一三日(日)第三回目の「伊能ウオーク」・稲佐神社は、梅雨時の蒸し暑い曇天の中、四四名の参加を得て開催しました。新型コロナウイルス感染症の状況が少し落ち着いて来たことから、長崎県からの参加者があり、久しぶりの再会を喜びながら稲佐神社をめざして歩いてゆきました。

文化九年十月二四日、伊能忠敬測量隊の本隊は多良越長崎道を南下している途中、高町宿から街道からはずれて稲佐神社へ立ち

寄っています。



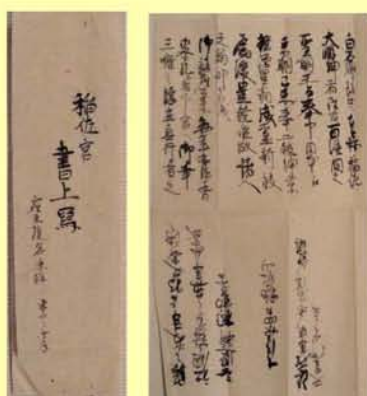
白石町・稲佐神社への行程図

この時のことは測量日記に「・・・稲佐神社へ打上る。二十町十五間、稲佐神社祭神百済国聖明王、九月十九日祭礼、白石郷鎮守、別当普門坊観音院、座主坊、吉蔵坊、観智院、講堂・・・」と記しています。



稲佐神社への道
(伊能図重ね合わせ図)

現在、千葉県香取市(旧佐原市)伊能忠敬記念館に所蔵されている国宝「伊能忠敬関係資料」二、三四五点のなかに「稲佐宮由緒書上」(国宝・文書・記録類539)が残っており、それによって測量日記が記されていることがわかります。

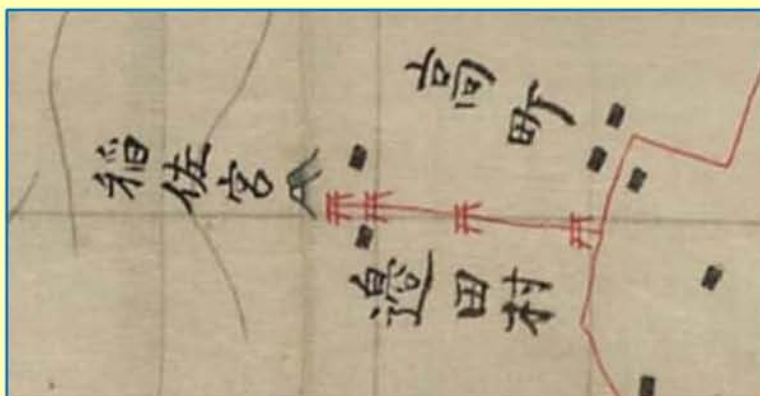


稲佐宮由緒書上(右:折紙)
千葉県香取市伊能忠敬記念館所蔵

また、伊能大図には、高町の「一の鳥居」から稲佐神社まで一直線に伸びた道筋に四つの鳥居が描かれており、非常に珍しいものになっています。

稲佐神社では、笠原宮司によって「新型コロナウイルス感染症」退散祈願をしていただきました。宮司挨拶の中で、伊能忠敬が参詣したことは初めて知ったと話され、私たちの「伊能ウオーク」で新たな歴史が解明されたことを

喜んでおられました。約八kmを歩いた往復三時間の「伊能ウオーク」は、午後〇時二〇分無事終了する事ができました。



伊能大図第190号・佐世保
稲佐神社へ四つの鳥居が描かれている

おわりに

この三回の「伊能ウオーク」で訪ねた田島・荒穂・稲佐の三神社では、いずれも「伊能忠敬測量隊」が参詣したということを知らなかった、記録が残っていないということでした。私たちは伊能忠敬

※伊能図と現代の地図重ね合わせ図は、長崎市の入江正利様に作成していただき使用しました。



稲佐神社コロナウイルス退散祈願後、記念写真

測量隊の足跡を辿りながら、伊能忠敬の業績を一般の方々へ伝え、伊能図に描かれた地名を誇りに、豊かな郷土の歴史を紡いでいかなければならないと深く実感しました。今後は「新型コロナウイルス感染症」退散祈願による沈黙化を期待して、コロナ感染症の心配のない、マスクのいらない伊能忠敬顕彰の「伊能ウオーク」を、定期的に開催してゆきたいと思っています。

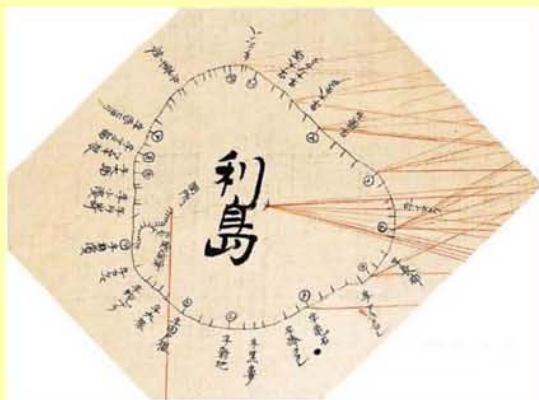
伊能忠敬記念館HPで初のオリジナル動画を公開！

玉造 功

千葉県香取市の伊能忠敬記念館のHP（ホームページ）では、始めて動画を作成公開しました。内容は伊豆七島の利島の下図から針突法をつかって自分だけのオリジナル大図を創ろうというものです。対象年齢は小学校中学年から大人まで。ステイホーム対策に絶好です。



香取市立伊能忠敬記念館HPから



国宝：地図・絵図類 177

伊豆七島利島・新島・式根島・地内島下図
香取市立伊能忠敬記念館所蔵

使用する下図は伊能忠敬記念館HPからダウンロードできます。針突法の手順が詳しくかつ易しく紹介されています。最後には、伊能図の特色である絵画的表現についても、庵絵図の代わりに使う地理院地図の利島の航空写真を表示する手順まで示されており、とても親切です。山道の部分の狭い間隔の針穴で測量の苦労と作図の苦労を体験することも出来ます。

新たに「伊能小図」副本確認

事務局

5月18日に日本地図学会からこれまで知られていなかった「伊能小図」が確認されたと発表があり、テレビ、新聞等が一斉に報道した。

確認されたのは、九州の福岡県小倉駅近くにある「ゼンリンミュージアム」に寄託された「實測輿地圖」とされる3枚揃いの伊能小図の副本（以下「ゼンリン小図」という）である。確認したのは、伊能忠敬研究会の特別顧問でもある鈴木純子さんと星埜由尚さん等で、鈴木さんは、日本地図学会の古地図を専門に研究する「地図史料・地図アーカイブ専門部会」の主査でもあり、星埜さんは、日本地図学会の会長もされていた。記者発表は、オンラインで行われ、発表の様子は現在もYouTubeで視聴することができる。
<https://www.youtube.com/watch?v=EHvXose57Po> (6月20日確認)

3枚揃いの伊能小図は、国内では、東京国立博物館所蔵の「日本沿海輿地図」（以下「東博小図」という）のみで、この図は国の重要

文化財に指定されている。

海外を含めると、幕末の文久元年（1861）に幕府が英国測量艦に与えた小図（以下「英国小図」という）が英国ナショナルアーカイブズに所蔵されていることが知られているが、原図から直接針突法により移写した副本ではなく、謄写等により筆写された写本である。

この度確認された「ゼンリン小図」は、3枚揃いの伊能小図の副本であることが確認され、地名の筆跡も「東博小図」と酷似していることから、同図と同じ時期に、同じグループによって描かれた可能性が高いと考えられる。

なお、「東博小図」は、幕府の昌平坂学問所が旧蔵していたことが判明しており、伊能隊が作成した図である可能性が高いと考えられている。両図とも地図の記号に「合印」という印が用いられていることも、印を所有していた伊能隊の作である可能性が高いことを示している。

「ゼンリン小図」は、「東博小図」に比べ、虫損が少なく、保存状態がよく、複製の際の針孔も確認できるとのことである。また、

他の小図には見られない凡例が北海道の図の北東部に記載されているのもこの図の特徴といえる。凡例の内容は、上呈図に添えられた「沿海實測録」に記載されている凡例と同じ内容とのことである。

ゼンリンミュージアムでの展示

3図のレプリカを展示

展示期間：2021年6月5日
～8月29日

10:00～17:00（最終入館16:30）

月曜休館（祝日の場合は翌平日）

所在地：福岡県北九州市小倉北

区室町1-1-1

リバーウォーク北九州14F

詳細：https://www.zenrin.co.jp/museum/event/

ゼンリン小図の緒元

図名：「實測輿地圖」

地図の構成：3図幅1組

地図の寸法：

第一（蝦夷地）151.9×160.5 cm

第二（東日本）256.6×161.0 cm

第三（西日本）203.7×160.0 cm

縮尺：43万2千分1（1里3分）

地名の数：約13,500箇所

渡辺一郎 著

『伊能忠敬の日本地図』

昨年6月に亡くなった渡辺一郎氏の遺稿「伊能忠敬の日本地図」が5月20日に刊行された。



本書は、伊能忠敬や伊能図・伊能忠敬の測量についてコンパクトにまとめた集大成ともいえるふくろうの本「図説 伊能忠敬の地図を読む」（渡辺一郎・鈴木純子共著、2000年2月初版、2010年12月改定増補版）を元に文庫版として再編集し、第9章と10章に渡辺氏の初期の目的であった伊能図探訪から始まった国外にまで及ぶ伊能図発見の経緯が追加されている。

第9章と10章に掲載された「伊能図の探検と発見の旅」は、渡辺氏のみが知る裏話も掲載さ

れており、伊能忠敬研究会の25年余に及ぶ歴史でもある。

事典としても利用できる内容だが、文庫本なので嵩張らず持ち歩くにも便利である。

本書の構成

- 序章 伊能図の時代
- 第1章 伊能忠敬の生涯
- 第2章 伊能図を読む
- 第3章 測量の方法
- 第4章 天体観測
- 第5章 日本全国の測量 東日本編
- 第6章 日本全国の測量 西日本編
- 第7章 最終版伊能図の完成
- 第8章 伊能図の復活
- 第9章 伊能図の探検と発見の旅1
- 第10章 伊能図の探検と発見の旅2（事務局）

河出文庫「伊能忠敬の日本地図」

発行 河出書房新社

2021年5月20日発行

本体 990円（税込1089円）

新入会員の自己紹介

石川県 隅田 暁



今年9月で68歳になります。隅田 暁(すみだ さとる)と申します。現在、石川県金沢市に住んでおります。

生まれは石川県鳳珠郡能登町鶴川というところですが、高校を卒業してからは建築技術者としてある建設会社に入社し、全国・海外とあっちこち駆け巡りながら48年間勤めてきました。一昨年地元の会社に転職して現在

に至っております。

伊能忠敬の生き方には感銘を受けており、以前から非常に興味がありました。会社の朝礼で、伊能忠敬が55歳という高齢から17年間で日本の精密地図を作ったスーパーな人物である話を話したばかりの時に、地元紙(北國新聞)の市民のお知らせ欄に、海みらい図書館で伊能忠敬の講演があるという記事を見てビックリしました。

早速、申し込んで講演会を聴講し、それがきっかけで伊能忠敬研究会の存在を知り入会しました。伊能忠敬に非常に興味がありますが、皆さんの様に伊能忠敬研究会にお役に立てる知識はありません。伊能忠敬を通じて皆さんと交流したいと考えております。今後とも宜しくお願い致します。

【趣味】城めぐり、サイクリング、ドローン撮影。

兵庫県 田中正子



はじめまして。第92号表紙の島原半島にゆかりある、兵庫県在住の田中正子と申します。

古都奈良の大学の鹿の集うキヤンパスで社会学を専攻した後、大阪府内での埋蔵文化財調査に補助員として従事、遺跡発掘現場で泥んこになっておりましたが、昨年より、コロナ禍の中、実家の医院(尼崎)にて、事務全般を担当しています。

写真のような平板測量の日々からは離れましたが、長年気になつておりました伊能忠敬研究会への入会を思い立った次第です。

伊能隊第八次(九州第二次)測量の長崎県島原半島小浜村における宿泊宅が、私の高祖母の実家(正確には、島原藩主の庶子であった高祖母の養家)、本多家・本多湯太夫家であるという由縁を、

近年知ったこともあって、ますます伊能忠敬師匠(万歩計「新・平成の伊能忠敬」を通じて弟子入りしているもので、こう呼ばせていただきます)への敬意と興味を深めております。

関心ある医学史や我が先祖の歴史調査も含め、いろいろと探究していきたいと思っています。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

事務局からのお知らせ

日本地図学会主催・伊能忠敬研究会共催により、伊能図完成200年記念集会『伊能図』の現代的価値を考える」を開催します。

開催日時は、2021年7月10日(土)午後1時30分から午後3時までの1時間30分を予定しています。実施方法は、リモート講演会としてWebで配信します。

参加ご希望の方は、次のホームページからお申し込みください。(参加申し込みアドレス)

<https://www.academihills.com/seminar/detail/20210710.html>

※次ページのポスター参照。



—「大日本沿海輿地全図」幕府上呈 200 年記念集会—

「伊能図」の現代的価値を考える



伊能図の作成は、我が国が近代化を成し遂げることに欠かすことができない基盤となる日本地図の「礎」となった偉業です。世界的にも国土の精密な実測に基づいた伊能図の価値は計り知れないと言えます。

伊能忠敬等は 1800 年より 17 年間をかけ、10 度に渡る全国の実測により全国を実測しました。その結果を測量終了後に 3 年間をかけ、彼の死後も弟子たちが引き継ぎ、3 種類の縮尺の異なる日本地図を完成させ、文政 4 年 7 月 10 日 (1821 年 8 月 7 日) に幕府に上呈しました。今年は、伊能図が完成し、幕府に上呈してから 200 年になります。

今回、「伊能図の幕府上呈」から 200 年を記念し、上呈の日 7 月 10 日に合わせて伊能図の全容、価値、作成の意義を明らかにする集会を開催します。

まさに現代に通じる「伊能図」の偉業を讃える会にしたいと考えています。

多くの皆さんの参加をお願いします。

日 時：2021 年 7 月 10 日 (土) 午後 1 時 30 分～午後 3 時 (1 時間 30 分)

実施方法：リモート講演会として Webiner で配信します。(無料)

詳 細：<https://www.academyhills.com/seminar/detail/20210710.html>

(Web ページからお申し込みください。)

基調講演

鈴木 純子 (元国立国会図書館、日本地図学会名誉会員、伊能忠敬研究会特別顧問)

星 埜 由 尚 (元国土地理院長、元日本地図学会会長、伊能忠敬研究会特別顧問)

司会・進行

太田 弘 (日本地図学会常任委員)

主催：日本地図学会 (地図史料・地図アーカイブ専門部会)

共催：伊能忠敬研究会

協力：アカデミーヒルズ

後援：日本地図センター、東京地学協会、測量協会 等 (申請中)

背景図：伊能小図 (ゼンリンミュージアム蔵)

『伊能忠敬研究』投稿要領

①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。

*刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字(704字×3段または480字×4段)です。長い原稿の場合は連載として分割していただくこともあります。

②原稿のかたち

・本文(テキスト) 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。

・写真 一般的なJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350dpi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。

*印刷サイズが100mm×75mmで350dpiのカラー写真の場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラやスマートフォンによって5Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありません。

デジタルカメラのデータ仕様がわからない場合は、L判(127mm×89mm)程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキャナで撮った電子ファイル(JPEG形式またはTIFF形式)にしてください。

③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およびそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷り上がり見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。(詳しくはホームページ <http://www.inoh-ken.org/> を参照)

送り先

・電子メール添付の場合 kaiho@inoh-ken.org
・郵送の場合 〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2階

伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

④注意事項

- ・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。
- ・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可を取っておいてください。
- ・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。
- ・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。
- ・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいてください。

次号(第95号)は2021年10月発行、**原稿締切は8月31日**の予定です。

第95号は特集号を予定しており、一般記事の掲載は2022年2月発行予定の第96号になる場合もあります。

伊能忠敬研究会入会の御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方とはどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。

- ①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年三回発行
- ②例会・見学会の開催
- ③忠敬関連イベントの主催または共催
- ④その他付帯する事業

三、入会方法等

入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、伊能忠敬研究会事務局所在地

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2F

電話・FAX 03-3466-9752

(留守の場合は録音テープに吹込んでください。)

事務局メール rai@inoh-ken.org

郵便振替口座 〇〇一五〇六〇七二八六〇

ホームページ <http://www.inoh-ken.org/>

編集後記 ◇昨年6月28日に渡辺一郎さんが逝去され、1年が過ぎた。◇4月には、伊能図完成200年記念行事が行われた。◇新型コロナウイルスの感染は、その後も収束を見ず、実施にあたっては、参加人数の制限や感染対策が求められたが、予定通り実施できたのは、奇跡的なタイミングだと言わざるを得ない。◇記念行事終了1週間後には、再び新型コロナウイルスの感染拡大防止のための緊急事態宣言が発出され、あらゆる行事が中止を余儀なくされたからだ。◇この行事を企画した渡辺さんの思いが、開催を後押ししたとは思えない。◇5月には北九州のゼンリンミュージアムで伊能小図の副本発見が報道された。伊能図上呈から200年目の節目に、渡辺さんが追い求めて来た「伊能図」の発見である。◇研究会が幕府上呈の日(七月十日)に合わせて予定していた記念講演会は、一旦白紙に戻したが、日本地図学会と共催で、オンラインの集会として実施が決まった。◇研究会は、本会誌の次号、第95号で伊能図上呈200年の特集号を企画している。(H)